Answer

亨珈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｎｓｗｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ８０１２Ｓ

【作者名】
亨珈

【あらすじ】
主人公のスティールをかばい死亡した『銀の界』第一王子ディーンが『狭間の界』に転生してきます。理の秩序をかなり無視して時間軸もさかのぼり転生するという無茶っぷりです。
記憶を持ったまま転生するというディーンの約束は果たされるのか、そして二人は出会えるのでしょうか。
そして幼馴染のスティングの気持ちに気付かないまま親友のサンディの恋路を応援するスティール。シャールから思いを寄せられていることにも気付かず・・・恋はかなりの混戦模様！

前作と違う世界での話なので、未読の方にも楽しんでいただけるといいなと思います。
綾織今様本館及びブログからの転載です。微修正しながらのＵＰになります。
ストーリーは近未来の学園物風ファンタジックな恋愛小説といった感じです。

★おまけのＳＳを差し替えました★

1

地球より一回り小さなとある星は、隣接する異世界の住人から〈狭間の界〉と呼ばれている。
表面積のほぼ半分を水で覆われたこの星の住人は約二０億人。野生動物たちの生きる環境とは完全に分離され、機械化された文明とそれ以外の地域との差は実に明白である。
もとは〈金の界〉〈銀の界〉とともに至高の存在に統治されていたとはいえ、今はその名残はひとかけらもなく・・・精霊・妖精・魔法といった類のものは、消滅してしまった世界。
ただひとつだけ、人々の遺伝子に組み込まれている記憶は「この世界を平穏に保つこと」。
故に、いかに科学力が発達しようとも、誰もこの星の外には興味を示さない。広い空の向こうには何があるのかと、そこへ行ってみたいとは、考えもしない。
そんな閉鎖された世界の、ある若者たちの物語。

講義の終了を告げるチャイムが建物内に鳴り響いた。
個人用ブースの端末から己の生体情報を抹消し、電源が落ちるのを確認すると、男性は三方を可視パネルで仕切られたドアのないブースを出た。
五０のブースが設けられた教室は一気に和んだ空気に包まれる。
「あの教授、サボりすぎだろ～」
男子生徒たちの苦笑が聞こえ、たった今荷物を脇に立ち上がった青年も思わず頷いてしまう。
サボるといっても授業が休講になるわけではなく、教授の出張先の講演の録画再生。しかもそれをレポートにまとめろときたものだ。
高い授業料払っていてこれでは、皆から苦情が出るのも当然という

ものだ。
はぁ、とひとつ溜息をついて、青年が艶やかな黒髪を乱暴にかき上げたとき、不意にその腕にぶら下がる勢いで後ろに引かれ、青年はバランスを崩して足踏みした。
「ちょっと、ロル！ほんとなの？」
振り返らなくとも分かる、青年のガールフレンドの声だった。
「シンディ、せめてラリーにしてくれないかな」
黒髪の青年は、落とさないように手荷物を抱えなおしながら彼女に相対した。赤毛に近いくせのあるブロンドをきっちりと結い上げた小柄な女性が、青い瞳を半眼にして彼を見上げている。どうでも話をきかなくてはというものか、腕は両手でしっかりと握り締めたまま離してくれそうにない。
青年もシンディと呼ばれた女性も大学の三年生。学生とはいえ二十歳を過ぎたれっきとした大人である。ロルという子供っぽい愛称で呼ばれるのは流石に恥ずかしいのだろう。
「なによ、なんならローリーって呼んでもいいのよ？」
シンディは嫌味ったらしく微笑むと、青年が逃げないと確信したのかようやく手を離し、ショルダーバッグの中から極薄のオーガニックパネルで出来た三０ｃｍ四方のデジタルペーパーを取り出した。
「で、これ！ほんとなの！？」
ずいっと青年の目の高さに掲げられたパネルにはよくあるゴシップ記事がでかでかと映し出されていた。
曰く『イーストエンドのＩＴ王子ローレンス・シュバルツ、セントラルに編入か！？』と。
そこには件の黒髪の青年の隠し撮り写真も大きく写っていた。
漆黒の艶やかな髪は普段はラフにたらしてあるが、フロントとサイドを撫で付けて整えてタキシードを着た姿は高貴なオーラに包まれており、紫がかった黒い瞳は、何処か遠くを見つめていた。
「ははは、こないだの学園祭の写真じゃないか」
のほほんと笑うローレンス青年に業を煮やし、シンディは「笑って

る場合じゃなーい！」と声を荒げる。
今のやり取りの間に大半の学生は退出していたが、残っていた者達が何事かと注目した。
大学生ともなれば、同じ講義を取っていても面識のない場合も多く、卒業するまで一度も顔を合わせないこともざらにある。そんな中でもローレンスの名前は知らぬものがいないほどの、彼は有名人であった。
ただし、家業の手伝いで忙しいらしく、授業以外で彼に絡みにくいため友人は少ない。それでも、その美貌と来る者拒まずの態度のためガールフレンドは途切れたことがなく、大抵は複数の女性が周りにいたりして、男子学生たちの嫉妬の的・・・になりそうなものだが、意外と敵も少ないらしい。掴みにくい青年なのである。
「んー。書いてあることは本当だよ」
ざっと目を通して、ローレンスはようやく答えた。
「それにしてもシンディ、こんなゴシップ雑誌購読してたの？どうせお金払うならもっと有益な情報にしなよ」
「失礼ね、ちゃんとした経済雑誌ですよーだ。それにちゃんと有益な情報が提供されてるじゃないのっ」
軽口にきちんと応酬しながらも、シンディの瞳が不安げに揺れていた。デジタルペーパーをバッグにしまい、再びローレンスの腕を握る。
「編入って、何で今頃・・・？」
「だって、ここの教師陣、最近たるんでるよ。ちっとも勉強になりゃしない。丁度来期から、セントラルで電子工学の権威の教授が客演するんだよ。それ受けに行きたいからさ」
ふるふると落胆したように首を振るローレンスに同調するかのように、室内の生徒たちも頷いた。皆聞き耳頭巾である。
「授業なんて、その講義だけ通信してもらったらいいじゃないの」
客演講師ならば、普通は大学外からの一般聴講生も歓迎するものだ。それを自宅のコンピューターで聴講すればとシンディは問うた。

「ところがこの教授、学生にしか聴講の権利を与えないんだって。しかも録画もなし。一回ごとに生の講演しか認めないって・・・今時お堅いスタンスなんだよ。まぁそこが気に入っているんだけどね」
ちょっと遠くを見る目になったローレンスの心は、既にセントラルに飛んでいるのだろう。期待に満ちた眼差しは彼の魅力を倍増させる。それでも、彼の眼差しを自分に繋ぎ止めて置くべく、シンディは必死に食い下がった。
「でもっ、お父さんの仕事の手伝いはどうするのよ？実質半分くらいはロルが動かしているんでしょ、会社」
連邦の管理体制のうち、機械に任せられるものは機械に任せ、その統制はセントラル地下深くにあるマザーコンピューターが行っている。今市場に出回っている家庭用・企業用のコンピューターのＩＣは、ローレンスの父親の会社が開発しているのだ。彼はその巨大企業、シルバー・シュバルツ・コーポレーション（略してＳＳＣと呼ばれる）の跡取り息子であり、株主でもある。
「半分だなんて、大袈裟だなあ。僕はちょろっと手伝っているだけで、趣味の範囲内だよ。それこそ、何処に住んでいても開発くらい出来るし」
さらっと流されてしまい、シンディの大きな瞳は更に潤んだ。遠巻きにやり取りを眺めている級友たちは「似たような光景、よく見かけるなぁ」と彼女に同情していた。
そう、いつもいつでも、女性たちは勝手に青年に接近し、それなりに相手をしてくれるために勘違いをして、最後にはこれまた勝手に怒って離れていくのである。彼が男性にもあまり嫌われない理由の一つであったりするのだが、傍目にはやはり女性をとっかえひっかえしているようにしか見えないだろう。
いつか殺傷事件になるぞ、とまことしやかに囁かれてもいたりする。
「それより、早く行かないと食堂しまっちゃうよ」
頓着なく別の話題にされて、それでも「待ってよ」と縋れるほどシンディはしぶとくなかったらしい。力が抜けた手をそっとはがすと、

ローレンスは念の為尋ねてみる。
「一緒に食べる？」
今度は彼女の方がふるふると、弱々しく首を振った。
「・・・いい。私、午後は授業ないし、もう帰る」
「そう。じゃあまたね。今期はまだ一ヶ月あるし、また一緒にランチでも」
ひらひらと手を振って出て行く青年を見送ってから、ようやく流れ始めた涙が頬を伝って床にパタパタと落ちた。
「なによ、ちっとも別れを惜しんでくれないし、記事になる前に教えてもくれなかったし、なんなのよぉ・・・！私・・・」
なんでもなかったってことだね、と。声には出さずに出刃亀たちは呟いた。

2

小春日和の朝だった。綺麗に澄み渡った青空には、山際に僅かな雲が覗くのみで、他には何も光をさえぎるものはない。
セントラルと呼ばれる居住区一帯は、基本的に三階建て以上の高層建築は認められておらず、自然環境七に対して人工物三となるように絶妙に建物が配置されている。マーケットと呼ばれるショッピングモール地区は地上部分は一階、そして地下は三階まで。その下の階層が利用できるのは、連邦政府管理下の施設のみと規定されているのだった。
お陰で、肉眼で見える範囲にはまことにのどかな地域となっている。
「うぉーい、おーきてーるかー！」
一０軒ほどの一般的な住宅が隣接する一角で、制服姿の男子が怒鳴っていた。グレーのジャケットとパンツ姿でネクタイはなく、チャイナカラーに似た襟元を緩めてその下のボタンも半分は外したまま。脇に抱えたヘルメットには、校章らしき一角獣を模したエンブレムが描かれていて、彼が跨ったままのバイクはタイヤではなくリニアとジェット推進で浮遊し進むタイプのものである。もっとも、安全上の理由から、この世界ではタイヤを備えた乗り物は廃止されており、居住区内のみの移動には乗車人数に合わせたさまざまな形のリニアモーターカーが利用され、遠方には居住区の端から世界各地に繋がっている空中のパイプの中から、定期的に超高速リニアが発着しているのだ。
少年が乗っているのはその中の二人乗りの跨るタイプのものであり、スポーツの一環として娯楽施設でレースを楽しむことも出来る車種であった。
少年の視線は、一戸建ての二階の窓に注がれていて、一拍置いて玄関がバタンと開き、少女がまろび出てきた。
「おはよー！待たせた？」

腰まで伸びた紅茶色の髪は、先っちょがあちこちにはね、寝坊したことが一目瞭然である。
「約束の時間には外に出てろって言っただろ。お前夜更かししすぎ！何やってんだ、部活もサボって」
少女より薄く赤みがかった茶ーーー雅にいうなら香色だろうーーー色のストレートの髪は、なんだか適当に切られているみたいで、これもあちこちはねている・・・ように見える。が、これは少年のファッションらしく、年寄りにどういわれようときちんと撫で付けるのも揃えるのもよしとしていないようだ。
元々つり気味の橡色の瞳を更に吊り上げて少女を睨み据えた。
「う。遊んでるわけじゃないもんね。あたしだって色々と忙しいんだいっ」
少女は唇を尖らせながらも、ごめんごめんと謝罪の言葉を口にしながら、自分のヘルメットをかぶって少年の後ろに跨った。
「ほらほら、遅れるから早く行こうよ」
「誰のせいだと思ってるんだよ」
少年は仏頂面で自分もヘルメットをかぶると、グリップを握りギアをローに入れて発進した。
たちまち、家々が流れるように二人の後ろに消えていく。二人が通っている学園までは、バイクでほぼ一五分。まあ大した距離ではないが、歩いて通える距離ではなく、普段少女は自分のリニアカーで通っていた。但しタイヤのない一人乗りの軽自動車が自動運転で通学路を進むようになっており、全く面白みはない。そのため、今日のようにたまーにだが、近所に住む同級生に同乗させてもらっているのだ。
「久し振りにスティールと登校するような気がする」
ヘルメットの通信機器が、少年の声を拾い正確に後ろの少女に伝えてきた。
「そうだねー。なんかバタバタしちゃってて、頼むの忘れてたよ」
スティールもヘルメット越しに返答する。

「で、何やってんだ？毎日毎日遅くまで」
「ちょっと・・・捜しもの、かな。砂漠の砂の中から宝石を探してる感じ」
はぁ、と溜息。これも正確に伝わって。
「はあぁ！？」
運転席の少年は、驚いたもののすぐに真面目な表情に戻った。
「なんなら俺も手伝うぜ？何捜してるんだ？」
「ごめん、これはあたしにしか出来ないことなんだ。写真とか、ないし・・・姿も変わっているかもしれないし・・・」
「ふうん？」
なんだか大事なものらしいが、話してくれないなら仕方ない。一抹の寂しさも感じながら、話題を変えた。
「そういや、おまえんとこの鳥、あれつがいなんだろ？卵産んだら分けてくれよ。あ、勿論卵をじゃなくて雛が大きくなったらだぜ？」
この世界にはペットショップのような店は存在せず、特別に理由がない限り野生動物の捕獲も禁じられている。個人がペットを得る手段は、つてとかこねとかレトロな手段のみ。金銭の絡む取引自体が禁止されているのだ。
スティールは、ひく、と頬を引きつらせた。

リルとジルファさんが・・・つがい！！

この場にリルフィがいたら目玉を突かれかねない。大惨事勃発だ。
ジルファの方は大喜びで「いいこと言ったな、少年！気に入ったぞ」とでも言いそうだが。
「えーと、多分すぐには無理・・・リルが逃げてるから。あはは」
乾いた笑いを漏らし、少年は残念そうだった。
「二羽とも大きくて綺麗だし、人の言葉聞き分けてるみたいだし、絶対可愛いのになぁ。早く仲良くなってくれねーかな？シャールいなくなって寂しいけど、賑やかしくて良かったよな」

大きな白い犬が突然消えたことについては、元の飼い主が見つかり、そちらに引き取られたと伝えてある。
一０年も経って引き取るも何もないだろう、と少年や他の友人は怒っていたが、仕方ないことなんだよと無理に納得させた。自然環境の豊かな未開の地だから、なかなか見つからなかったんだよと。
心配し慰めてくれているのが判るので、スティールはギュッとその背中を抱きしめた。
「ありがとう、スティング」
「お、おう」
精悍に日焼けした少年の頬が赤くなったことは、背中越しには伝わらない。それでも少年は、誤魔化すかのようについ口を滑らせてしまった。
「なんか、前に乗せた時より、胸が大きくなったような・・・」
独り言に近かったのだが、これまた機械は正確だった。
「スティングのスケベーっっ！！」
後ろで叫びながらも、少女は腕を緩めるわけにはいかず。ましてや運転の邪魔をして二人で転ぶわけにもいかず。
ヘルメットの外にも漏れるような声で口喧嘩しながら、二人の乗ったバイクは校門をくぐった。

3

スティールたちの通う学園は、初等部から大学部までの一貫教育である。もっとも、セントラルの大半の学校がそうであり、それぞれの校風を全面的に押し出して卒業までバックアップし、生徒たちを囲い込もうとしている。

よって人数は結構多いものの、初等部入学の五歳から共に学んでいれば、必然的に全員の名前と顔くらいは一致するのも当然で、その中でも特にスティールが親しくしているのが、幼馴染みのスティング・レスターと、住居の区割りは違うが中等部から編入してきたサンドラ・シンフォニー、ビクトリア・オースの女子二名だった。

スティール自身があまり周りに同調しないというか、天然にゴーイングマイウェイなので、キャピキャピとした普通の女子の会話についていけず・・・テレビなどの娯楽情報にも疎いため、意外に女友達は少なかったりするのだ。

そんな彼女だが、実に女の子らしいクラブ活動をしていた。

「む。綺麗に膨らんだと思ったのに、オーブンから出した途端にペシャンコになっちゃったぁ！」

姉さんかむりの手拭いに白い割烹着。格好だけは家庭的な様子で、手元の鉄板を見つめる少女。

お世辞にもシューとは呼べない物体が、その上に整然と並んでいる。

「あはー。まぁシュークリームは大抵シューで失敗するのよ、どんまいどんまい」

同じ調理台でカスタードクリームを作っていたサンドラが、慰めるように声を掛けた。

彼女の前には綺麗にふっくらと膨らんだシューが並んでおり、これからナイフを入れてクリームをつめるところだ。

スティールは恨めしそうに自分のシューを見つめ、盛大な溜息をつく。
「私ってば、本当にお菓子作りに向いていないかも」
「菓子も、の間違いだろ」
調理室のドアが開き、廊下側から突込みが入る。
「そろそろ出来上がるかなーと思って切り上げてきたけど、今日も失敗かよ」
にやにやと意地の悪い笑みを浮かべて入ってきたのはスティングだった。
「も、とは何よ失礼ね！」
鉄板を調理台に置くスティール。
「先週はグラタン作ろうとしてカレーになってたじゃん」
そう、火加減を間違えてホワイトのつもりがブラウンソースになってしまったのだ。
「くっ、そんな昔の話・・・っ」
「昔じゃねーだろ！」
くううと悔しさを堪えながら、手元のナイフを握り締めるスティールを見て、スティングはさりげなくサンドラの背後に行きその肩に手を置いた。
「うわ、やべぇ。助けてサンディ、殺されるぅ～っ！」
「もう、何やってんのよ二人とも～」
呆れたように笑うサンドラの頬が微かにピンクに染まった。スティールと柄違いの手拭いの下から覗く髪は、きつくカールした黒檀のような黒。ピンと伸ばせば脇くらいまでの長さなのだろうが、くるくると巻き上がっているため肩のところまでしかないように見える。長く伸ばした前髪と一緒に後ろで一部を結って、その上からカチューシャで押さえているようだ。
大きな青い瞳は笑った拍子に細められ、少し羨ましそうにスティールに向けられていた。
そんな視線には全く気付く様子もなく、スティールは膨らみの足ら

ないシューをこじるようにして切り開き、なんとか平凡な味に仕上がったカスタードクリームを詰めていった。
調理室には他にも一０数人の女子がいたが、既にスティングが来るのは日常的になっているようで誰も関心を示さない。そして、そもそも調理部に在籍している女子たちは意中の男子にプレゼントするのが目的のものが多く、互いに味見し合っては完成した菓子をいそいそとラッピングするのに忙しかった。
「あー腹減った～」
ぼやきながらも嬉しそうな表情のスティングは、勝手知ったるなんとやらで食器棚から皿とティーセットを取り出して並べている。
今や家庭でも手料理を食べる機会は減っており、そこそこ収入のある家庭ならば仕込から全て自動調理機任せである。この学園に置いてあるようなガスのコンロやオーブンなど、備えている家庭は珍しいとさえいえるだろう。
「やっぱり火で焼いた食べ物は格別だな」
いち早く席に着いたスティングは、サンドラから供されたシュークリームを頬張ってうっとりと噛み締めた。
「スティールのママはあんなに美味しい料理作るのに、なんでそんだけ失敗できるんだ？」
尋ねる方の少年は心底不思議そうだ。
ガスコンロを設置してきちんと出汁をとって日々の食事を提供している今や数少ない人種が、スティールの母親である。
お陰でたまにご相伴に与るスティングも、舌が肥えてしまったらしい。それなのに、毎日それを食べている本人が全く料理センスがないというのが疑問なのだ。
むむむむむ、と唸る少女は、今度はフォークを握り締めている。

そうなんだよ、自分でも判ってるってば。
それなのにシャールなんてにっこり笑っていつも「美味しいよ」って全部食べてくれるんだよ？

こないだ差し入れしたサンドイッチなんて、野菜を挟む順番間違えてパンがびちょびちょだったってのに・・・。
軽く自己嫌悪。

ヒョイ、とスティングがスティールの手元から出来上がった物を一つ口に運んだ。
もぐもぐと咀嚼して、嚥下してからようやく口を開いた。
「なんつーか・・・うん、噛み応えのあるシューだな」
「それって固いってことじゃない、はっきり言えば？」
顎を引いて上目遣いにじとぉーっとスティールが睨んだ。
「人が気を遣ってるのにその言い草かよっ」
「何処が気を遣ってる態度なのよーっ」
ムキーっと沸点に達しそうなスティールを見て、スティングはカップの紅茶をがぶりと一気飲みして腰を上げた。
「おー怖い怖い。じゃな、三０分後に駐車場でなっ」
すたこらさっさと調理室を出て行ってしまった。その際にもう一つ、シュークリームを掠め取っていくことも忘れない。
「あ、食べるだけ食べて逃げたーっ！」
ぷりぷりしながら食器を流しに運ぶスティールを見て、サンドラが溜息をついた。
「優しいよねぇ、スティング」
「はいぃ？」
聞き咎めて、スティールはびっくり眼でサンドラを見つめた。
「文句言いながらも、最後に持っていったのもスティールのだし、いつも出来上がる頃合見計らってやってきては落ち込んでいるとこ茶化して最後は怒らせてうやむやにして去っていくじゃないの。あれってやっぱりわざとだよ～。彼なりにスティールのこと慰めてくれてるんじゃないのかな」
そんなこと思ってもいなかったので、口を開けてぽかんとしてしまう。

「小さい頃から一緒なんでしょ？やっぱりスティールのことよく理解しているんだね、羨ましいなぁ」
まなじりの下がった大きな青い瞳が、じいっとスティールを見つめ返してきた。
「そ、そんなこと・・・っ」
あるかもしれないな、と思ったので、言葉が続かなかった。

それにしてもサンディは今日に限ってなんでこんなこと言い出したんだろう？
スティングがあたしに絡んでくるのはいつものことなのに。
そして、試食時間になると現れるのもいつも通りなのに・・・。

「私も、スティングのバイクに乗ってみたいなぁ」
吐息混じりにサンドラが呟き頬を染めるのを見て、ようやくスティールにも合点がいった。
「サンディ、もしかしてあいつのこと」
視線を外し目の前の自分のシュークリームを見つめて、サンドラがこくりと頷いた。

そっか、そうなんだ・・・。

少し考えて、言い訳がましくならないように口を開く。
「あたし、物心ついたときにはスティングもシャールもいて、兄弟みたいに育ったんだよね。ほら、あたしんちのある区画、他に子供がいないでしょ？しかも同い年だしね。毎日土手の周りで泥んこになって転げまわってた。
だから、家族みたいな感じ・・・ていうか・・・うん。少なくとも、あたしは恋愛感情ないっていうか」

でも、スティングは多分違うよ？

言葉にはしないで、サンドラは唇を噛み締めた。
毎日毎日嫌というほど見せ付けられているから判る。
スティングがスティールに向けている感情は、スティールが抱いているそれとは全く違う種類のものだ。

「ねぇ、スティールは誰か好きな人がいるの？」
不意に自分に振られ、また目を丸くするスティール。
なんだって今日はこんな話題になってしまったんだろうと思う。
思春期の女子が集えばこのような話題になるのはしごく当たり前のことなのだが、大抵その場に本人であるスティングがいるため、なかなかサンドラも口に出さなかったのだろう。

「あ、あたし？あたしの一番はシャールって知ってるじゃない」
「シャールはこないだ引き取られていった犬のことでしょ？そうじゃなくて人間だよ」
呆れ半分にサンドラが言った。
でもシャール本当は人間なんだもん・・・とは口が裂けても言えやしない。
加えて、サンドラの瞳はこの上もなく真剣だった。毎週末にはシャールと会って遊んでいると言っても更に呆れられるだけだろう。
「シャール以外に・・・好きな、ひと・・・」
うんうん、と頷くサンドラをぼーっと見ながら、頭に浮かんでくる人物がいないわけではなかったが。
今何処にいるのか、なんていう名前なのか、本当に容姿は変わっていないのか、何もかも知らないづくしの状態で。
「いるんだ、ね？」
ほっと少し安心したようにサンドラが首を傾げた。
「うーん・・・好きなのかと言われると間違いなく好きなんだけど、その『好き』の種類がまだよくわかんないというか・・・」
「はぁ、まあスティールのことだからそこは保留しておくわ。また

いつかその人のこと聞かせて？」

いつか聞かせられるような状況がやってくるのかしら。
そうなるようにがんばっているつもりだけれど。
いつか逢えるその日のために自分磨きもしなくちゃと、調理部に入ったものの、技術はまったく身につかず。自分でさえちょっと口にするのを躊躇するようなものしか出来上がらない。
幸いなことに、腹を下すほどの変なものが出来ていないだけ僥倖といったところか。

スティールの胸ポケットで電子音が鳴り響いた。
「ほぇ？」
カードタイプの通信機器を取り出してみると、オーガニックパネルに映ったスティングが怒鳴り声を上げた。
『くぉら、スティール！もう四０分経ったぞ！！何やってんだ！』
時計を見ると、もうじき閉園時刻が来ようとしていた。日没には至らないが、夕日はかなり低いところまで落ちてきている。
「あああ、ごめん！もうちょっと待ってて」
通信を一方的に切り、慌しく調理台の上を片付け食器を洗う。
「後は私がやっておくから、もう行ってあげて」
一緒に片付けながらサンドラがにこやかに言った。
嫉妬心がないわけではないが、スティールの意中の人がスティングではないと知り心が晴れたのだろう。結構現金なものである。
これ、スティングに渡して。と押し付けられたサンドラ手製のシュークリームを抱えて、スティールは駐車場へと駆けて行った。

4

学園の敷地内には、学部という垣根を越えた共用部分もかなりある。その中でも一番の規模を誇るのが図書館であり、密かに連邦政府も一目置く品揃えだと言われているらしい。

そもそも、電子情報で事足りる昨今、紙媒体でしか情報を入手できない特殊なもの以外では、図書館を利用するものは少ない。それでも、持ち出し禁止の書物も沢山あるのでこのような施設が成り立っているのだが、意外とそれ以外にも気軽に借りられるような図書も一通り揃えてあるところが変わっているかもしれない。スペースの無駄遣いだという者も多いが、「図書館」という特別な環境を好む人種も結構多いもので、常に蔵書は増え続けていて迷路のようになりつつある。

週末に、ひょっこりとスティールはその図書館を訪れた。
実はここでシャールの読みそうな本を物色しては、後で自宅に取り寄せているのだ。
ついでにカラーページの多い料理本を眺めては、ほーっと感心の溜息を漏らしたり。児童書のコーナーに座り込んでは、幼い頃に読んだ絵本を眺めたりと、静かな時間を一人楽しんでいた。

何しろ蔵書の量が半端ではないので、天井は遥か数十メートルも上、そして書物もそれと同じ高さだけある棚の中にぎっしりと詰め込まれている。それでも棚はどんどん増え続けて、通路は人がすれ違うだけの余裕しかない。それでもここを訪れる人が少ないから、ぶつかるどころか姿を見かけることすらまれだった。
いつものようにＩＤをかざそうとして、入り口でスティールは足を

止めた。

あれ？と思う。
誰かが急いで建物の陰に隠れたように見えたのだ。
不審な行動だが、生徒がかくれんぼでもしているのだろうか？
どちらかといえば大学部の敷地に近いここでそんな遊びをしている人がいるなんてちょっとおかしなことではあるけれど。

校舎自体はレンガ造りなどちょっとレトロな雰囲気だけれど、学園のセキュリティーレベルは高く、部外者は建物の中には入れない。見学者もいるため構内の散策は許可されているが、それ以外は学生たちですら自分のＩＤを示さないと入館出来ないようになっている。

スティールはそれ以上は気にしないことにして、中に入っていった。まずはシャールの分をと、機械工学の棚に向かう。そうしたら、見慣れた人影が目に入った。

「はにゃ～、珍しいこともあるもんだ」
相手も気付いて、手元の書面から視線を上げる。
「んん？俺が図書館に来ちゃわりいのかよ？」
ざんばらな前髪を梳くようにかき上げ、じろりと睨まれて、スティールはぺろりと舌を出した。
さほど気にしたわけではなかったらしく、スティングは本を棚に戻すとにやりと笑いながら寄ってきた。
「それよりさ、これこれ、試作品だけど」
手を出すように言われ、手の平を差し出すと、そこに小さなシール上の物を載せられた。爪の先程のＩＣチップに見える。
「なにこれ？」
首を傾げて顔を寄せてまじまじと見つめるが、スティールにはさっぱり判らない。

スティングは指でスティールを招くような動作をし、耳元で囁いた。
「位置情報を発信するチップ」
言われても、ふーんそう・・・としか答えようがなかったが、何だか違法なものな雰囲気だ。
「何に使うのよ、これ～」
訝しげに眺めていると、突然上から声が降ってきた。

「下にいる人たち、急いでどいてー！」

瞬間のことだったが、スティングはスティールを抱えて横に飛び、スティールは顔を上げて棚の上の方から急降下してくるリフターを、スローモーションのように眺めていた。

天井まで棚があるという事は、当然普通の脚立などでは上部の本に手は届かない。指定した本を取って来てくれるロボットも配備されているのだが、自分でいろいろと背表紙を眺めて選びたい人用に、人一人が立ったまま浮遊昇降できるリフターも利用できるようになっているのだ。
それがなんらかの要因で故障して落下しているのだ。それに乗った人間と共に！

ガシャン！という大きな音を想像していた二人は、肩をちぢこませたままそっと目を開けた。
リフターは床ギリギリのところで動作を停止し浮遊している。最低限の人命救助システムが働いたのだ。それでも、乗っていた人は衝撃で床に放り出されて倒れていた。

「あの、大丈夫ですか？！」
体を起こし、膝をついたままその人の方ににじり寄る。スティールたちと同じグレーの制服。デザインはジャケットタイプでひと目で

大学部の男性だと認識できた。
「ああ・・・なんとかね」
呻きながら、横倒しに倒れていた男性は両手を床について体を起こした。

「すまないね、巻き込んで。全く、旧式なのはいいけど、制御不能になるなんて信じられないな」
確かに聞き覚えのある声。そして、現れた端整な顔立ちを目にして、二人はそれぞれの理由で呆けたように動きを止めて見入ってしまった。

濡れたように艶やかな黒髪を手櫛で整えながら、男性はゆったりと微笑んだ。紫がかった黒檀のような瞳が二人を映して・・・。

自分でも何をしているのか判らなくなった。

「ディーン！見つけたっ」

スティールは、気が付いたらその首に抱きついていた。
抱きつかれた男性は勿論、スティングも口をあんぐりと開けて驚愕の表情だ。

「おおおい、スティール！馬鹿お前何やってんだよ！」
引き剥がそうと服を引いたのは、幼馴染みが恥ずかしい行動をしているのを止めさせようということだけではなく、半分以上は嫉妬からだっただろう。

それをやんわりと制止して、男性はぽんぽんとスティールの背を叩いた。
「可愛い女性に抱擁されて嬉しいんだけれどね、僕は君とは初対面

だよ？」
涙を浮かべて、頬を染めたスティールは体を離した。
おい、もっと離れろ、と後ろではこっそりとスティングがまた服を引いている。
「誰と間違えてんのかしらねーけどさ、この人はローレンス・シュバルツさんだろ」
「ロ、ローレンス？？」
「ＳＳＣのだよ、まさか知らないわけねぇだろ？」
眉を寄せて、スティールはしばし考えた。そういえば、自宅のコンピュータなどにそんなロゴが入っていたような気がしないでもないような・・・。

「あ」
開発会社の名前だと、大分考えてからようやく気付いたらしい。
呆れたようにスティングは肩をすくめ、ローレンス青年はくすくすと笑っていた。

「ごめんなさい、あたし、顔は知らなくって」
わたわたと恥ずかしそうに手を振るスティールに、更にローレンスは笑いを深めた。
「凄い、僕はもっと自分のこと有名人だと思っていたよ。でもなんか嬉しいかも」
「いえっ、こいつは本当に世間知らずっつーか、そういうの疎くって、普通は知ってますっっ」
少女の背後から、スティングが割って入る。
「すげー本物だよ～。あぁあ、サインもらいたいのに何も持ってねぇよ～」
ポケットを探りながら、スティングは溜め息。
「うん、じゃあ握手」

ローレンスの方から手が差し出され、スティングは両手でしっかりと握るとぶんぶんと振った。
「光栄ですっ！俺も電子部門の開発に興味あるんでっ」
「そうなの、じゃあ卒業前には是非我が社も受けてみて」
「はいっ」
なーんて興奮気味のやり取りの後、ローレンスはスティールにも手を差し出した。

「きみも、よろしくね」
「え・・・と。はい」
おずおずと手を差し出すと、大きな手がしっかりと握り返してきた。
「あたし、スティールです。スティール・デ・ドール。高等部一年。あの、ローレンス・・・さん、は・・・ずっとここに？全然知らなかった、です」
どう口にしたら良いものか、たどたどしい喋り方になってしまう。

「新学期に編入してきたばかりだよ。本当は三年だったけど、大学部一年からやり直しさ。少なくとも四年間は同じ学園で生活するわけだね」
にっこりと笑みを浮かべて説明するローレンス。

「あ、オレはスティング・レスター、同じく高等部一年です」
会話に横入りするスティング。
いつもと違う様子のスティールがどうにも気になって仕方ない。

学園は初等部五～一一歳、中等部一二～一六歳でここまでが義務教育。高等部一七～一九歳、大学部二０～二三歳の構成になっている。スキップも可能だけれど、それぞれの学年でかなり専門的な選択もできるため、スキップの逆に下の学年をやり直すケースも稀にある。ローレンスはそれを選択したようだ。

その胸ポケットで、携帯端末が振動する気配がした。
「あ、ごめん。そろそろ行かなくちゃ」
ローレンスは、ぐいと手を引いて、スティールも一緒に立ち上がらせると、パタパタと制服を払った。そうしていると足音が聞こえ、作業着姿の男性二人がローレンスに声を掛けた。
「申し訳ありません、整備不良でご迷惑をお掛けしたようで。念の為健康状態のチェックをしたいので同行していただけますか」
「いいですよ、精々打ち身くらいです」
「そういうわけには参りませんので」
断ろうとするローレンスの両脇を固めるようにして、二人は通常の入り口ではなく、用務員用の通路らしき方へ向かって行く。

5

あの人たち、もしかしてさっき外で見掛けた人？

違和感を感じたスティールは、そっとローレンスのジャケットの裾を引いて呼び止めた。

「あの、また会えますか？」

「真面目に通学しているから、きっと」

軽く答えて、押されるようにして出て行ってしまった。

三人の姿が見えなくなってから、スティールはしかめっ面になった。

その隣で、はっと思い出したようにスティングが袖を引く。

「おい、スティール、誰なんだよディーンって」

「ねぇスティング、さっきの発信機の受信機出して」

答えはなく、厳しい口調で言うスティールに驚きながらも、スティングは自分の携帯端末を取り出した。

パネルに映った光点が、徒歩の人間とは思えないスピードで移動していく。

「なんだこれ？」

首を傾げるスティングに、固い表情のスティールが呟く。

「ねぇ、ＳＳＣってすんごいお金持ち、だよね？」

「金持ちっていうレベルじゃねーだろ。さっきのローレンスさんの個人資産だけでも、連邦の年間予算より多いとかいう噂・・・」

あ！とスティングが驚愕する。

「もしかして、さっきのって」

うん、とスティールが頷く。

「あたし、ここに入る前に建物に隠れるようにしている人陰見かけたの。多分さっきの人たちがリフターにも細工して、事故を起こして誘拐したんだ」
「うわー。学園のセキュリティーもお粗末なもんだな！敷地内で誘拐されるかよ」
頭を抱え込むスティング。
「どうしよう、追わなくっちゃ」

端末を握り締め、スティールは出入り口に向けて駆け出した。
「おい待てって、俺たちが追いかけたってどうにもなんねーよ！」
その後を追うスティング。

それに立ち塞がるように、建物の外に真っ赤なスーツが現れた。
膝上のタイトスカートにはぎりぎりまでスリットが入り、見事な脚線美を惜しげもなく晒している。豊かな胸は、駆けてきたらしき振動で揺れ、ショートボブのけぶるような見事なプラチナブロンドが風になびいた。

「ローレンスさま！？」
中に向けて呼ばわる声は、艶のある大人の女性のものだった。

危うくぶつかりかけて急制動し、スティールはその女性を見上げた。
ヒールを差し引いても一七０センチはあるだろう、豊かな胸とヒップでなければモデル体系のゴージャス美人だった。
「あなたたち、中でローレンスを見かけなかった？」
当然名前を知っているもの、という尋ね方だった。

「あの、あなたは・・・？」
疑い半分でスティールが尋ねる。先刻の男たちの仲間ではないという保証はない。

「私は、ローレンス様の秘書でアンジェラと申します。怪しいものではありません。入館証明ならこちらに」
ひらりと胸ポケットから当日限り有効の、学園発行の証明書が差し出される。スティールはそこに刷り込まれた学園の印を自分の端末で認識させてから、初めてほっと息をついた。

「実は・・・」
スティールとスティングが交互に先程の出来事を説明した。そして、訝しく感じたので別れ際にジャケットに位置情報の発信装置を取り付けたことも。

「機転を利かせてくれてありがとう。後は私どもで。」
有無を言わせぬ口調でアンジェラは二人に告げた。
「坊や、ちょっとこれ借りるわね？」
男なら誰でも骨抜きにされそうなうっとりするウインクを残し、アンジェラは自分の携帯端末で誰かと会話しながら足早に去って行った。

本当はスティールもついて行きたかったが、到底無理なことは判っていた。
銀の界の時とは違う。自分はこの世界でも何も出来ないただの小娘だと。

それでも・・・今出来ることは、やれたよね？
直感であれはディーンだと解っていた。
例え今、自分のことを憶えていなくても、感じる。その波動。

まずは無事に戻ってこられますように。

祈りながら、二人は言葉もなく家路に着いた。

6

スティングと別れて自室に入り、もしやニュースにならないかと滅多につけることのないテレビのスイッチを入れた。
ベッドの足元側の壁にぴたりとくっついているスクリーンに、連邦各地のニュースが次々と示されていく。

ただいまの言葉もないスティールを訝しく思い、リルフィがその肩に舞い降りてきた。
『今日はまた元気がないのね？暗くなる前に帰ってきたのはいいけど、何かあった？』
「あった」
硬い表情のまま、こくりと少女が頷いて。ジルファもふわりとその傍らに舞い降り、リルフィはそれを一瞥してすぐに少女に意識を戻した。

「これ見て」
ぱたぱたとリモコンのキーボードを操作して、スティールはテレビ画面を切り替えた。スクリーンに大写しになったのは、シルバー・シュバルツ・コーポレーションのＨＰ。その経営陣の中からローレンスを選び拡大して二人に示す。

『えぇ？！』『おぉ・・・』
金と青の鳥から驚きの声が漏れる。まぁ実際には思念が頭の中に直接響くのではあるけれど。

『完全に盲点だったな。まさかこんな有名人だったとは・・・』

ジルファの意見に、スティールは少し肩の力を抜いた。
「うん、ごめんね。なんか、一般的には顔知っている人の方が多いみたい・・・。あたし、凄く遠回りしていたみたいだよ～」
『でも良かったじゃないの。これでもう私も当てのない人探しからは解放されるんだし』
『私たち、だよ？』
ジルファの突っ込みは、完全に聞かなかったことにされたらしい。

『それにしても今度は逆にコンタクト取りにくくなっちゃったかもしれないわねぇ。
コンピュータ関連の開発会社とくれば、自宅も会社も近付きにくいんじゃないの？』
リルフィはセキュリティの厳しさに注目したらしい。

「それがね、実は今日偶然なんだけど・・・」
スティールは放課後の出来事を詳しく語った。
それで帰宅後すぐにテレビを点けたのだと。

『流石、引き合う運命・・・だな』
感心したようにジルファは目を見張り、リルフィは眩暈を感じて危うく肩から転がり落ちるところだった。
『トラブルを背負い込まなければ済まない体質なのかしら・・・』
トラブルの第一弾に関わっている自分のことは完全に棚上げして頭を抱えている。

確かに、ここまで異世界の住人と関わっている狭間の界の人間は他にはいないだろう。そしてそれに関連して、両親が願うような慎ましやかで平凡な人生からどんどんずれていってしまっているのでは、と思う。

なんにしても、その時スティールが一人ではなくて良かった。
リルフィは素直にスティングに感謝した。
もしも一人だったら、突っ走って自分のリニアで後を追ってもっと厄介なことに巻き込まれていたかもしれない。

スティールはといえば、またニュース画面に切り替え、制服を脱ぐのも忘れて画面を食い入るように見つめている。一応全チャンネル表示にしてそれらしいニュースが流れ次第切り替えるつもりなのだろう。

「スティール、ご飯食べましょうよ」
ドアの向こうから、母親が呼んだ。
「あ、うん。すぐに行く・・・」
本当はテレビの前を離れたくないのだろうが、食事を抜いて親に心配をかけるわけにはいかない。
スティールはそそくさと部屋着に着替え（その間、リルフィの無言の威圧によりジルファはいつも壁の方を向かされてしまう）、両肩にリルフィとジルファを乗せてダイニングへと向かった。

『願い』は世界最強の魔法。

青年の『願い』は異世界に同じ魂を抱いて時を遡り生まれ落ち
少女の『願い』は生まれ落ちた青年を見出し

そして少年の『願い』は
青年と少女がなるべく早く出逢えますようにと
　目に留まりやすいところに生まれますようにと

そうして選ばれたのが、遺伝子情報にも違和感なく同じ姿を保ちつつ〈目に留まりやすい〉生まれのところだった。

ただ、それだけのこと。

どうか、あなたの願いが叶いますようにと
優しい少年が祈った
奇跡を信じて。

広い部屋だった。
連邦政府のお膝元であるシティの中でも、特にセキュリティの厳しいホテルのワンフロアを貸し切り、ローレンスはそこから大学に通っていた。

その中で自分で使用しているのは、寝室と研究設備のある部屋だけではあるが、使用人たちの寝起きする部屋などいろいろと確保するため、そして安全面でも他人を同じ階に寝泊りさせるわけには行かなかったのだ。

本人はあくまでも一生徒として、ごく一般的な一人暮らしを希望したのだが、両親共に却下され、取り敢えず目に付くところには使用人を置かない、というレベルでの「一人暮らし」を認めてもらったのだ。

しかし編入早々に誘拐劇が起こり、学園の上層部の人間は現在こぞってイーストエンドのシュバルツ家で平身低頭している頃合だろう。
そして本人はと言えば、明日にでも学園内のシステムを全部最新式

のものに入れ替えてしまおうと、皮算用しているところであった。
これは獲らぬ狸どころか、確実に懐に入ってくる皮算用であるが。

机に向かっているのも疲れたので、ローレンスは椅子を引き、革靴をポイポイと脱ぎ捨てるとソファに全身を投げ出して寝転んだ。丁度肘掛に頭と足首が乗り、実に寝心地が良い。床は堅めの材質の無垢の板張りなのだが、それがまた素足に馴染むのだった。

なかなか刺激的な一日だった。
有能な部下たちのお陰で、何かされる前に無事身柄確保されたローレンスは、帰宅後すぐに自分の研究室に入りやりかけの作業を終わらせてから速攻で学園宛に請求書を作成した。

今回の件は全て敷地内の生徒の安全を護れなかった学園に責任がある。慰謝料とは言わないが、せめてセキュリティレベルを上げてもらわないと、今後の生活が困る。
そんなことをする生徒は他にはいないだろうが、ローレンスにとって誘拐は日常の出来事であり、今回のように他人まで巻き込みかけたとあっては放っておくわけにはいかないのだ。

そういえばあの少女・・・
確かに何か懐かしい感じがする。会った事はないはずなのに何故・・・？

脳裏に琥珀の瞳が焼きついて離れない。
もっと美しく魅力的な女性はいくらでもいる。それなのに、どうしてか気にかかっているようだ。
あの少女が自分のことを違う名で呼んだとき、本当は少しドキリとしたのだ。

「・・・ディーン、か」

扉のセンサーが来訪者を告げた。
室内へは網膜認証だけで入れるようになっているので、こちらの了解もなしで扉は深夜の来訪者を招き入れた。

カツカツとヒールの音を響かせて入室したのは、夕刻に図書館に現れたアンジェラだった。スーツから黒いイブニングドレスへと着替え、大きく開いた胸元と両脇スリットから覗く均整の取れた太腿が、えも言われぬ色香を醸し出している。匂い立つような熟れた大人の艶やかさよ。

「あらいやだ、ローレンスさま。入浴もまだなのね」
さま、と言いつつも、口調は親しい友人か家族のものである。何もつけていないのに紅を刷いたようなふっくらと大きめの唇がほころんだ。

「ああ・・・取り敢えず急ぎのものだけ済ませたんだ」
顔を向けることもせず、ローレンスは開襟シャツのボタンを外し始めた。
「もしかして、今日の件は新しい製品に関わりのあること？」

ソファまで来ると、背もたれ側から覆いかぶさるようにアンジェラは腰をかがめた。
「多分ね・・・詳しくはもう警察にでも政府にでも任せるよ。製品自体は完成しているし、特許も申請した。データも理論も完璧なはずだけど、如何せん実験データが・・・」
はぁ、と溜め息をつくローレンス。
「何しろ今までとは違う分野だし、勝手がわからない」
「何を作っているかは何となく知ってはいるのよ？」

アンジェラは舌先で唇を湿らせ、屈んでローレンスの耳元に口を寄せた。
「ナノテク・・・かしら？それとも液体金属で？」
「どっちもビンゴ」
寝そべったままようやく視線を合わせて、ローレンスは微笑んだ。
流石センセイ、と囁く。

「一言で言うと新型ＩＵＤ。病院に行かなくても、または女性側にそれと気付かれず男性が仕掛けることができる。逆もまた然り。成功率は九九．九％といっておこうかな。一００％のつもりだけど、完全なものはこの世に存在しないから」
ふうん、と応じながら、アンジェラの長い指先がローレンスの胸元に滑り込んできた。

「薬剤のように副作用もなし、侵入してきた精子の活動を止め、最後には自分も一緒に体外に排出させる働きを持っている無害なチップだよ。但し、効果は二四時間で完全な使い捨てだけどね」
指先が下半身にまで下りて行き、スラックスの上からやんわりと青年の中心を愛撫する。
ふ、と目を細め、ローレンスが息を吐いた。

「いいわね。ぞくぞくするわ」
その薄い唇をアンジェラの赤い舌先がそっとなぞる。今にも吸い付きたそうな濡れた唇から、甘い吐息を漏らしながら。
「私を実験に使うといいわ」
既に情欲の炎をその瞳に燃え上がらせ、アンジェラはローレンスのベルトを外した。
「その代わり、今夜は眠らせないわよ？」

苦笑しながら上半身を起こすローレンスに、もう我慢できないとソファの背から女の体が滑り落ち体を重ねた。

「では・・・死にたくなるほどの快楽を」

天使かはたまた悪魔か、艶然と微笑むローレンスにアンジェラはうっとりと見惚れた。幼い頃から傍にいるが、これほどまでに賢く美しい青年になるとは。

「受けて立ちましょう？」

にっこりと微笑んで、アンジェラはむしゃぶりつくように体の下の青年の唇を吸った。

ローレンスが初等部に上がる頃、二五歳のアンジェラはさまざまな意味での教育係として雇用され、以来常に傍に仕えてきた。一０代で軍に入り格闘技も一通り身に着けているアンジェラは、その容貌で男性陣の目を欺きながらＳＰとしての役目も果たしてきた。そして、学校では学ぶことのない処世術・・・一般的には卒業後に身につければ間に合うものでも、幼いローレンスは備えていなければならなかったのだ。中等部に上がる頃には夜のテクニックも。これは半ばアンジェラの趣味ではあるのだが、頭も体も全て駆使してローレンスに叩き込んできたのだ。

我が子ほどにも年の離れた主従関係だが、知らぬものが見れば精々三０歳くらいにしか見えない肉体は、いつも社内外で色欲交じりの視線に晒され、それを糧に更に彼女は若く美しく保たれる。

一から十を学ぶ典型的秀才肌の生徒と、彼を育てた教師として、濃厚な夜が始まろうとしていた。

7

丁度食事が済んでスティールが自室に戻ったとき、携帯端末が鳴った。スティングからの着信だった。
『おう。連絡あったぞ』
スティングの端末から自宅に連絡があったのだそうだ。
全て片付いたので、ご心配なくと。翌日にでも端末は返却しますと伝えてきたのは、あの時の秘書だったという。

『良かった～これで安心して寝られるな』
「う、うん。そうだね」
へたへたと床に座り込みながら、スティールは画面のスティングに頷いてみせた。

『で、さぁ』
スティングからそれまでの溌剌とした雰囲気が消えて、何故か視線が宙を彷徨った。

「どうかした？」
首を傾げるスティールにもう一度視線を合わせると、
『ディーンって誰だよ？』
と尋ねた。

夕方尋ねても答えが得られなかったのをまだ覚えていたらしい。本人にとっては知らない男性の名前は重大な問題なのだろう。
『間違えるほどローレンスさんにそっくりなのか？』
あれだけの美男子はそうそう存在しないはずだと思いながらも、もしもそうならば自分では勝てないと思ってしまう。

「あ、えと・・・うん・・・なんていったらいいか」
助けを求めるようにスティールの視線がリルフィに注がれたが、
『適当に誤魔化しときなさいよ』
仔細なアドバイスは得られず、嘘をつくのが苦手な少女は言葉に窮した。

「シャールとあたしの命の恩人・・・ていうか・・・」
こんななんでもない普通の女の子のあたしを好きって言ってくれた人。
などとは口が裂けても言えなかったが、思い出したら恥ずかしげな様子が顔に現れてしまったらしく。

『それ、お前の好きなやつ？』
ショックを隠しきれない様子でスティングが言い募った。
近所に住んでいて、スティールの行動も好みも趣味も大抵は把握していると自負していただけに、それら全てが衝撃だったのだろう。

「好きっていうか・・・まだわかんないよ。でもシャールと同じくらい好きだよ？」
犬と同レベルかよ！と心の中では突っ込みを入れながらも（裏事情を知っているリルフィとジルファですらこっそり突っ込まずに入られなかった）、スティールの「好き」のレベルは全てシャールを基準に測られているのだと知っているが故にその愛情の深さに思い至ってしまうのだった。

『あのな、俺もお前のことが・・・好きなんだけどっ』
ありったけの勇気を振り絞って口に出した言葉に返された答えは。
「うん？あたしも好きだよ？シャールの次くらいかなー」
にっこりと、そしてあははと照れ笑いするスティールに、流石のリ

ルフィとジルファも止まり木から滑り落ちそうになり、ジルファはその後抱腹絶倒で床を転げまわっていたのだが。

『な、なんと愉快な娘だ・・・笑い死にしそうだよ』
『頼むからそのまま死んでもらいたいものね』
その姿に冷たい視線と言葉を投げかけつつも、リルフィもスティールの天然ボケっぷりには嘆息するしかなかった。

流石に付き合いの長いスティングは、立ち直りも早かった。
『そんなの知ってるよ』
と笑顔に戻り、それより後ろで鳥の鳴き声がなんか変じゃねえか？と続けた。

翌日、今度は失敗しないで出来上がった手製のマフィンをバスケットに入れて、スティールは銀の界へと渡った。いつも週末はそうなのだが、空は快晴である。無意識のうちにシャールの意思が反映されているらしい。
草原に腰を下ろしてぼーっと空を見上げていたところに現れて、今度はすぐには飛びつかずにバスケットを草の上に下ろし、体を起こしたところを見計らって首っ玉にかじりついた。
「シャールぅ～っ！逢えたよっディーンにっ」
瞳の奥に僅かに寂しさを宿しながらも、シャールは声を弾ませているスティールの背中をギュッと抱きしめた。

「早かったね。良かったぁ」
「シャールのお陰だね、きっと」
興奮気味のスティールは、ありがと、と言いながらシャールの頬に軽く口付けた。勿論、人型に戻ってから初めてのことだったので、

シャールの方は驚いて目を見開いた。

「お礼だよ？」

ちょっぴり照れながらも、至近距離で小首を傾げられ・・・一瞬そのまま抱き寄せて唇にもっと深く口付けたい衝動に駆られたが、なんとか堪えた。

どくどくと、血液の流れる音が妙に大きく聞こえる。

ああ、僕の鼓動なのか・・・。

冷静に分析して、自分を失わないようにと、深呼吸する。

「あれ、ごめん。い、嫌だったかな・・・溜め息、ついた？」

そうしたら今度は少女の方が慌ててしまった。へにゃっと眉毛が下がり、なんとも言えない可愛らしさに見えるのは、最近の自分の目がどうにかなってしまったのかと思うほどだ。

「ち、違うっ！・・・そうじゃなくて・・・っ」

ああ、なんて言ったらいいんだろう。

本当に困ってしまう。

今までみたいなスキンシップをしていたら、いつか本当に我を忘れて〈雄〉の本能の赴くまま行動してしまいそうな自分が怖い。

でもそんなにくっつかないで欲しいなんて言えないし、言いたくはない。

ちゃんとしたキスがしたいなんて、今はまだ言えない。

「それで、ディーンはどうだった？」

仕方なく話題を変えてみた。

「あー、そうそう、それなんだよねぇ」

何の疑問もなく乗ってきてくれて、ほっと安堵する。

それでも、かくかくしかじかスティールが説明するのを聞きながら、またも心の中にもやもやが広がっていくのを止められなかった。
「というわけで、目下どうやったら記憶が戻るのか思案中なの～」
はぁ、と息をつくスティールに頷いて見せながら、心の片隅ではこのままずっと記憶なんて戻らなくていいとさえ考えてしまう。
新しい命と新しい名前を得て、裕福でそれなりに幸せな人生を送っているであろう元義兄。命を助けてもらって本当に感謝しているけれど・・・。

頼むから。僕にはもうスティールしかいないんだから。
僕からスティールを奪わないで・・・。

こんなことを僕が少しでも願っている限り、本当に記憶は戻らないかもしれないというのに。
それでも僕は思わずにはいられない。

ここまででもういいでしょう？
このまま狭間の界で、スティールとは学友のままで、卒業したら接点も無くなって。
そのまま僕の知らない誰かと結婚して家庭を持ってくれたらいい。

僕の願いは昔からたったひとつだけ。
スティールと一緒にいたい。ただ、それだけなのに。

「あ、そういえばユキさん、先週会った時には少しお腹が出てきたみたいだったね。もう、ヤツカさんったら、ユキさんがちょっとでもテーブルにぶつかったら飛んできて抱き上げて連れて行っちゃうもんだからおかしくって。最後にはユキさんも『コレくらいで仕事休めないわよっ』て怒り出しちゃってさあ」
おめでたのユキとその亭主の様子が余程おかしかったのか、スティ

ールはクスクスと思い出し笑いをした。

「あかちゃん、か」

生まれたらさぞかし可愛いだろうな、と二人ともほんわかした空気に包まれる。

女の子だったらヤツカが下にも置かない可愛がりようだろう。生まれてすぐから、この子は嫁にはやらない、とか言うかもしれない。

「僕も子供欲しいかも・・・」

ぼそりと呟いた声をちゃんと聞き止めたらしく、

「いいねぇ、シャールの子供なら男の子でも女の子でも美人さん間違いなしだねっ」

想像するだけで嬉しいのか、満面の笑みでスティールが頷く。

「いつか生まれたら、あたしにも抱っこさせてね？」

と。

返す言葉が、見つからなかった。

自分が産むかもしれないっていう選択肢はないみたいで。

勿論そこまで深くスティールは考えもしていないのだろうけれど。

天然ボケの恋愛下手もここまでくると最早犯罪である。

気の毒な二人の少年だった。

8

一方その頃狭間の界の少年も、玄関まで応対に出てきたスティールの母親の言葉にショックを受けていた。

「ごめんなさいね、あの子ったら最近毎週出掛けているのよ。前は探し物って言っていたけど、今はシャールに会いに行っているみたいでねぇ」

頬に手を添えて溜め息をついている優しそうな母親。面差しはスティールとそっくりだ。

携帯端末にいくら連絡しても応答がないので直接来てみたら不在で。

「端末まで置いていくなんて・・・」

本当にシャールに会いに行っているんですかと尋ねたかったが、ぐっと飲み込んだ。家族に無用な心配をかけさせてはいけない。

「本当に僻地なのよ～。電波も届かないから持って行くだけ無駄なんですって」

それにしてもそんなにしょっちゅうだとあちらさんもご迷惑じゃないかと思うんだけど、いつまでも犬離れできなくて困った子ね、と母親は続ける。

「わかりました。いえ、約束していたわけじゃないんで、また学校で」

ぎくしゃくと笑みを作ると、スティングは回れ右した。

「あ、待って待って」

ちょっとここで待っていてと言い置き母親は一旦家の中に戻ると、

深鉢を持って出て来た。
「これ昨夜から仕込んでいるポトフなの。晩御飯にでもどうぞ」
ドール家とレスター家ではよくある光景だった。
料理の苦手なスティングの母親は、スティールの母親の手料理が大好物なのである。

「味付けしてシチューやカレーにしてもいいから」
「いえ、そんなことさせたら台無しになるんでこのままで是非！」
「いやぁねー、スティングったら」
コロコロと笑いながら、深鉢を抱えて家路に着くスティングに手を振り見送ってくれた。

ゆっくり歩いても五分とかからない距離なので、考え事をする間もなく自宅に着いてしまった。そのままキッチンに向かうと、朝食後の珈琲を飲んでいた母親は目を輝かせて深鉢を奪い取り、早速味見をしていた。

晩御飯まで残ってないような気がする・・・。
嫌な予感がしたが、今日はもうそんなことはどうでもいい気になり、とぼとぼと自室に戻った。

二階の自室に入るなり、お気に入りの曲を壁に埋め込まれたスピーカーから流すようにスイッチを入れ、ベッドにもたれるようにして床に座り込んだ。
「シャール、何処にいるんだよ・・・？」

幼い時からずっと共にある存在だった純白の大きな犬。スティールがそのシャールを兄弟のように慕い「好き」の基準がそこになるのは解らないでもない。

で、〈シャールと同じくらい好き〉な存在がディーンとやらで、〈シャールの次に好き〉なのがオレってどういうことよ？
確かに高等部に上がってからは、そんなに頻繁に行き来していないし、休日も一緒に遊んだりはしていないけど、男の影なんてこれっぽっちも感じなかったというのに。
「納得いかねぇ・・・！」

一体いつ何処で知り合ったというのか。
まして、そこまで好きになるならそれなりに深い付き合いな筈。
そして、いきなり引き取られてしまったシャールの存在。
気が付いたときにはもう姿が消えていて、自分は別れの言葉も言えず。何処か分からない僻地・・・どっかの離島か？・・・にいるらしい飼い主の下へ足繁く通っているスティール。
更に言うならば、シャールが引き取られた頃からぐんとスティールが綺麗になった・・・ような気がする。これは自分が好きだからその欲目でそう見えているわけでもなく、学校でもたまに話題になることがあるのだ。
ただ、今まではその一風変わった性格から、恋愛対象としては男子生徒の噂話に上らなかったので安心していたのだけれど、これからはそうもいかないかもしれない。

今までは母親に「あなたの取り得は私譲りのサラサラストレートヘアーしかないんだから絶対伸ばすべきよ！」と主張されてしぶしぶ脇辺りまで伸ばしていたスティールだったが、それ以上は邪魔になるからと伸ばしたり切ったりを繰り返していたのに、最近はずっと伸ばしていて、その心境の変化もまた気になっている。
もしかしたらシャールの飼い主がディーンとやらなのかもしれない。
そうならば一度是非付いていかねばと、焦り始めたスティングだった。

「うなー」
かりかりと扉を引っかく音がして、ぼーっと考え事をしたままスティングはドアを少し開けた。するりと隙間から三毛猫が入ってくる。にゃおお～と訴えながら、ぐいぐいと頭をスティングの腕に押し付け、抱き上げられると満足げに喉を鳴らし始めた。

「なぁ姫。女同士、スティールの気持ちわかんねぇ？」
ぐるるるるる。目を細め、姫はぺろりと飼い主の頬を舐めた。ざらざらが当たらないように、舌先の滑らかな部分だけでそっと。
「にゃうあー。なぅ」
何か話しかけてくれるのだが、内容は分からない。
「こんだけ科学が発達していて、なんで動物の言葉翻訳機はねぇんだろうなー。やっぱりオレが作るしか！」
ははは、と笑うスティングに微笑みかけるかのように姫は大きな目をぱちぱちと瞬きして、チュッとその鼻先にキスをした。
意中の少女が姫と同じくらい自分にラブラブだったらどんなに嬉しいことだろうと、少年は猫を抱いたまま嘆息した。

それから少し経ちお茶の時間になった頃、センサーが来訪者を告げた。母親は何処かに出掛けたらしく、自動的にスティングの部屋のモニターに映像が映る。
ボディコンシャスな真紅のスーツが目に飛び込んできて、少年はあたふたと玄関に向かった。

「先日は私共の不手際でご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」
扉を開けると、女性は深々と腰を折った。胸の谷間が露わになり、赤面しながらもお辞儀を返すスティング。
「いえ、オレらは別に・・・」

「ご両親にもご挨拶をしたいのですが」
「すみません、それが出掛けていて」
改めて丁寧な礼を言われ、携帯端末を受け取りながら恐縮してしまう。これほどまでに官能的な女性を傍に置いて、あのローレンス青年は平気なのかと妙な心配をしてみたりも。
「この休日で学園内のセキュリティーを強化するために工事をしています。もうあのような事はないとは思いますが、また何かあればローレンス様のことよろしくお願いいたしますね。何分にも私共は学園内までは警護出来ませんので・・・。そしてなるべくあの方にも、普通のご学友たちとの生活を楽しんでいただきたいのです。」
スティングと視線を絡めて、アンジェラはにこりと微笑んだ。
「生体埋め込み型のチップとあなたのチップとの相乗効果で、位置確認がとてもスムーズに出来て本当に助かりましたわ。ありがとう」
「あ、あのチップは・・・その」
戯れに作ってはみたものの、実際に使うことは違法行為である。冷や汗をかきながらどうしようと思っていると、その手を取りそっと件のチップを握りこませ、アンジェラは滑らかにウインクしてみせた。
「その才能を伸ばすといいわね。それから、主がまた学園内で会いましょうと。自分の口からも直接礼が言いたいそうです」
「はい！」
我知らず鼓動が早まり、勢いのある返答をしてしまう。
くすりと口元を綻ばせ、アンジェラの顔が近付いた。
「では、私個人からのお礼を」
そっと囁き声。それから音を立てて唇を吸われ、スティングは直立したまま放心状態に陥った。

流石のアンジェラも、ティーンエイジャーと遊ぶ機会は持っておらず、ついついからかってみたくなったのだ。

可愛いわぁ。なんて遊び甲斐がありそうな子！

しかし、仕事の一環でここを訪れたものの、本来は主の警護をしていなければならない時間帯だ。早急に戻る必要があり、まさかこのまま家に上がりこむわけにもいかない。

少し残念に思いながらも、少年の頬から首筋に指を這わせてから名残惜しそうに瞬きで訴えて体を離した。

アンジェラの乗り込んだリニアカーが出発してたっぷり五分ほど経過してから、ようやくスティングの石化が解けた。へなへなとその場にしゃがみこみながら、「うわー」と呟く。

「やっべー・・・」

赤面したまま、ぐしゃぐしゃと髪の毛を掻き回す。

たったあれだけのことで、若い体は反応していた。治まるまでしばらくしゃがんでいようと思った。

空が茜色に染まる頃、ようやくスティールの携帯端末と繋がり、パネルにほんわかした笑顔が映りなんとはなしに癒された気分になる。

『どしたのー？課題のことなら、あたしもこれからやるところだから何も聞かないでっ』

顔の前で手をぶんぶんと振りながら少女が眉根を寄せた。

「あー。課題のことじゃなくて・・・今日何処行ってたんだ？探し

ものは見つかったのか？」
既に母親から聞いているという事は伏せて尋ねてみる。
『探しものは、一応見つかった、かな？』
「なんだよそれ。見つかったんならいいじゃんか」
『そうだね』
一瞬何か考えてから笑顔に戻る。
「なんか納得いかねーようなことでもあんのか？」
『ああ、いやー、うん。確かにスティングの言うとおり、見つかったからいいよ。うん、素直に喜ぶことにする』
「わけわかんねー」

何を探していたのかは、まだ教えてくれそうにもなくて。信頼されていないと不満が募る。

『今日はシャールのところに行ってたんだ。いつも二人で草原で遊んでるの』
「二人で？飼い主は？」
『あたしが会いたいのはシャールだよ？近くに住んでいる人たちとも話はしたりするけども』
飼い主なんていないのだから、なんとも答えようのないスティール。
少女にしては無難に質問をかわしたつもりだった。

「で、結局それって何処なんだ？今度オレも一緒に行くよ」
昔はよく一緒に遊んでたじゃないかというと、スティングが驚くほどの勢いで少女が拒絶した。
『だだだだだ駄目なの！あの、ほんとにあそこってば僻地だしっ。ホントはよそものは行っちゃいけないとこだしっ。あたしだって、あっちの許可がないと勝手には入れないんだしっ』
「は？」

なんだその取ってつけたような理由は。
というか、この世界にそんな場所が存在するのだろうかとまずは疑ってしまう。確かにスティングはセントラルからは出たことがないけれど、今時そんな閉鎖的なところがあるのだろうか？居住区ですらないんじゃないかと思ってしまう。

明らかに疑っている様子なのが伝わったのか、嘘じゃないからね！と少女が真剣な顔で言った。
『ありがとう、スティングもシャールのこと心配してくれてるんだよね。大丈夫、あっちでも元気にやっているから』
花のような笑みでそう礼を言われ、オレが心配してるのはお前のことだとは言えなくて。
「そっか？ならいいんだけどさ」

いやほんとはそうじゃなくて。よくない、ちっともよくないんだけど。
で結局自分でも何が言いたかったのか分からなくなり、適当に通話を終了した。

「ああー・・・なにやってんだろ、オレ」
ベッドに上半身だけうつ伏せてうだうだやっていると、いつの間にか傍に寄ってきていた姫が背中に乗り柔らかな肉球で肩甲骨の間を踏み踏みとマッサージしてくれる。
猫の体重は三ｋｇほどだけれど、それが小さな足の裏だけに分散されるとなかなかよい感じの踏まれ心地なのだ。
踏んでいる猫の方も至極ご満悦で喉を鳴らしている。
「姫、風呂でも入るか」
なー、と返事をして、猫は背中から下りた。

9

新しい週が始まり、つつがなく日々が過ぎて行った。セキュリティシステムが刷新されたことについては学園側からも全校生徒に通知があったが、特に誰も関心を示してはいないようだった。
週末の昼休み。授業の終わるタイミングを計っていたかのように、スティングの携帯端末に着信があった。
「あ」
驚き顔の少年は小声で何事か会話したあとスティールの傍に飛ぶようにしてやってきた。
「おい、今日はカフェテリアでメシ食おうぜ」
「えー？今日は天気もいいし、皆で中庭でって約束してたじゃない」
いつも母親の手製弁当持参のスティールは不満顔だ。スティングは購買利用なのでどちらでも大差ないけれど、カフェテリアは学園全体の共用スペースなので昼の時間帯は騒々しく、ゆっくり食べるには向いていないのだ。
「それが、ローレンスさんが昼飯おごってくれるって言うから」
「え？ほんと？」
ぱっと嬉しそうに顔が輝くのが気にはなったが、約束していたサンドラとビクトリアにも断りを入れて道々簡単に経緯を説明しながら四人でカフェテリアに向かった。

カフェテリアは各テーブルにあるコンソールから直接注文して、自動走行型のロボットが出来上がった料理を運んできてくれるシステムになっており、一旦席に着いたら途中で立たなくても良いので、座っている側からすれば入り口に人がやってくればすぐに目に付くので待ち合わせはしやすいといえる。
どうやら講義の時間の関係で早くから着席していたらしいローレン

スは、スティングたちに向かってにこやかに手を上げた。
今日はフレームのない眼鏡を掛けているが、それまでチラチラとローレンスを盗み見ていた周りの学生たちが一斉に入り口を向いた。
誇らしさと恥ずかしさとでぎくしゃくしながら、取ってくれていたらしい席に座る。
「あのー、私たちはあっちにいるから」
遠慮して隣のテーブルに座るサンドラとビクトリア。
そんなに離れているわけでもないし、混雑していて他の生徒たちに迷惑が掛かる様子でもないので、スティールも引き止めなかった。
有名人と初対面で同じテーブルでは食事も喉を通りにくいだろうとも思う。
他の学生たちも同じなのか、視界には入れたいけれどあまり近くには行かなくてもいいやという感じで、ドーナツ化現象が起きているのだ。
「先週は本当に助かったよ、ありがとう。ごめんね、こんなに遅くなって・・・もっと早くに会いたかったんだけど」
ローレンスがぺこりと頭を下げ、つられてスティングとスティールの二人もお辞儀を返したが、「気にしないでください」と慌ててハモるように口を開いたので、ローレンスはくすくすと笑ってしまった。
「仲がいいんだね、二人は。可愛いカップルだなぁ」
「カップルじゃありませんっ！」
即座に否定したのはスティール一人。
サンディの前でなんてこというのよ～っ！！
と内心冷や汗ものだったのだけれど、その勢いにスティングの方はショックを受けていた。
「ご、ごめん。付き合ってるんじゃないんだね」
あはは、と笑いながらローレンス。
「ただの幼馴染みで、こないだはたまたま図書館でばったり会っただけで・・・」

なんだかむきになって説明していると感じてしまうのはスティングだけではなかったが、まあこんなハンサムを前にしたらいくらスティールでもそうなっちゃうのかしらと、皆何となく納得していた。
「あー、じゃあオレ、これとこれとー」
そんな少女は見たくなかったので、スティングは「遠慮なくご馳走になります！」とコンソールに入力している。
「あの、あたしはお弁当があるのでいいです」
スティールは風呂敷に包まれた二段重ねの重箱を開いた。良かったらどうぞ、と言いながら。
先に一人で紅茶を飲んでいたローレンスは、茶器を端に寄せて珍しそうに重箱の中身を覗き込む。
「これは、きみが作ったの？」
「まさか！」
今度はすかさずスティングが否定する。
「こいつ調理は超の付くど下手くそなんで。でもおばさんの作ったものはめっちゃ上手いです！」
「ほんとのことでもソコまで言うかー？」
スティールは重箱の蓋の角でぐりぐりとスティングの頭を小突いた。ちなみにローレンスの向かいがスティングでその隣にスティール。細い通路を挟んでその隣のテーブルに向かい合ってサンドラとビクトリアが座っている。
「じゃあお言葉に甘えて」
とローレンスはスティールが持参したフォークで鶏肉の南蛮漬けを口に運んだ。ゆっくりと咀嚼して飲み込んでから、
「本当だ。こんな美味しいのは食べたことがないよ。どんなシェフが作ったものより愛情がこもっているからだろうね」
心底感嘆した様子だったので、嬉しくなるとともに少女は少し不安になる。
もしかしてディーンは、今度のお母さんからもあまり愛情を受けていないのではないかと心配になったのだ。しかし、まだそれを尋ね

られる環境ではない。
「いっぱいあるからどんどん食べてください」
ぐいぐいと重箱を押しやるのが精一杯だった。幸い、いつもスティングのつまむ分も考慮して余分におかずが詰められているので、量としては十分に確保されている。
いつも食べ慣れているスティングは今日は料理人の作ったメニューの方に気が行っている様子だし、自分ひとりでは食べきれないだろうとも思う。
じきに注文した料理も届き、合間に他愛もない会話をしながら和やかな時間が過ぎて行った。

そうだ、あたしこういう時間が欲しかったんだっけ・・・。
食後の紅茶を奢ってもらい、ほっと人心地のスティール。
いつかディーンに出逢えたならばどんなことを話そう、どんな風に過ごしたいだろうといろいろ考え、漠然とだけれどこんな風に大勢で深刻でない話をしたかったんだなぁと感じていた。

「あ、そうだ。これスティングにもあげるよ」
ふと思い出したのか、ローレンスがポケットから小さなプラスチックのケースを取り出し手渡した。
透明なケースに入った指先ほどの物体を見つめながら、何ですか？と少年は興味津々だ。
「僕の新作なんだけど、まだ実用化前のデータ集めしている状況でね。大学部ではかなり大々的に配ったんだけど、良かったら使ってみてデータ取らせて欲しいんだ」
「いいけど・・・これ何するもの？」
コンピューターに接続して使うものではなさそうだし、部品でもない。首を傾げる少年に「実はね」とローレンスが顔を寄せるように手招きする。
ぼそぼそと耳打ちされた少年は次の瞬間にはおでこまで真っ赤に顔

色を変えた。
「ＩＵＤって、まさか！！」
大声とまでは行かないが、きっちりと隣のテーブルまで声は届いていたらしく。デザートのイチゴをつまみながらぎょっとした表情でサンドラとビクトリアが男性陣を見遣った。
スティールはしばらく脳内検索をしたのちにようやくＩＵＤが何なのかに思い至り、訝しげに二人を見つめる。
しー、しーっとローレンスが唇に指を当ててあせっている。流石に中等部や小等部の生徒も僅かではあるが利用している場所では、好ましくない単語だからだろう。
ははは、と照れ笑いしながらローレンスが女性陣の方にも説明する。
「いやほら僕はてっきり二人が付き合っているものだと思っていたから、一応持ってきてたんだけど・・・その、相手がいる人に使ってもらえたらいいから。それと一応モニターってことにはなっているけど、まず間違いなく機能するので心配は要らないっていうか」
いや、心配しなくていいとかそういう問題じゃなくて！
ディーンったら、仮にも学園でそんなもの配るなんてーっっ！！
男同士の内緒話で済ませたかったらしいローレンスだったが、こうなってしまっては致し方なく。女性陣の非難の眼差しを受けながらも流石に堂々としたものだった。
驚いたものの、そこは年頃の男の子。スティングもすぐに平静を取り戻すと、
「じゃあ、スティール試してみる？」
「やなこったっ！」
いかにも突っ込んで欲しそうな口調だったので、軽くチョップしながらスティールはすかさずかわす。
ところが、隣のテーブルからサンドラがおずおずと声を掛けてきた。
「あ、あの、良かったら私が」

「はいぃ！？」
スティング、スティール、ビクトリアの三人が同時に驚愕の声を上げる。
間違ってもそんな冗談をいうタイプではない少女は、恥ずかしそうに、しかし真剣な瞳でスティングを見つめていた。
「え、と。・・・ていうか。マジで？いいの？オレと？？」
半信半疑のスティングに、こくこくと頷くサンドラ。やがてまた赤面したスティングにスティールのボディブローが入った。
「いいわけないでしょ！」
ぐはっと体を折るスティング。
「そういうことはしかるべき手順を踏んでから至るべきであって」
本気で痛がっている少年をきりりと見据えてきっぱりと言い切る。
「まずはちゃんとお付き合いをはじめなさーい！」
「・・・ま、マジですか・・・・・・」
冗談では済ませてくれそうにない少女の様子に、涙が出そうなスティングだった。
「ほほう、お付き合い・・・ねぇ」
今まで存在感を故意に薄くしていたビクトリアが、ごおおと炎のような怒りのオーラを纏いつかせて、体ごとスティングの方に向き直った。
焔のようなショートヘアーが今にも逆立ちそうな剣幕である。元々細い目が更に細められギラリと光った。
「それなりの覚悟があってのことだろうな？スティング・レスター」
ぽきぽきと拳の関節が鳴る音がする。
「そ、そんなに真剣になるなよ！冗談だろっ」
特別に習っているわけでもないのに、格闘技の授業では教師以外に勝てるものがいないという抜群のセンスを持つビクトリア・オースは、学園一の運動神経の持ち主なのである。
調理好きなサンドラとは、光と影のようにいつもつるんでいることで有名だが、運動部に所属している為放課後は調理室に現れること

もなく、出番が遅くなってしまった。
「御誂え向きに次の授業私たちのクラスは格技だな？」
不適な笑みを浮かべて腕組みするビクトリアに向かって、「勘弁してくれよ～」と両手を合わせるスティング。
「私の屍を越えてゆけ！」
ぴしりと少年を指差すビクトリアを見た瞬間、溜まらずローレンスが吹き出した。それまでも肩を震わせて笑いを堪えていたのだが、真剣な少年少女たちの様子に水を差さないようにかなり努力していたらしく。それでもここにきてどうにも抑えきれなくなったようである。
「ほ、ほんと、ごめん・・・！」
息も絶え絶えに謝りながらも、押し殺した笑い声はしばらく治まりそうにもなかった。

10

放課後になり、週末のお約束になりつつある図書館での時間を過ごすために早足で向かうスティールがいた。

午後の授業は不審者対策の関節技実技だったため、半ば強制的にビクトリアの相手をさせられたスティングは満身創痍の体たらくで、サンドラに慰められながら帰宅したので、今日こそは誰にも邪魔されない予定だ。

あの二人、うまくいくといいなぁ。

スティングの心中など知る由もない少女は、呑気にサンドラの恋の成就を願っている。

ＩＤをかざして入館し、まずは先週と同じく機械工学のコーナーで品定めした。天井を仰いで見たが、今日はリフターの姿も見えず、ローレンスは来ていないらしいと少しがっかりする。
昼休みに会ったばかりだけれど、個人的にゆっくり話が出来たわけでもないし、なんだか物足りなく思っていた。
といって、一人で会ったからといって何を話そうという予定もないのだけれど・・・。
ただ、顔が見たいなと思った。

ぱらぱらと本の中身を検分したものの、気が乗らず、今度は児童書コーナーに足を向けた。そちらのコーナーの一角には四畳ほどの土足厳禁の休憩コーナーがあり、毛足の短いカーペットとクッションに座ってゆっくり読むことが出来るのだ。

知る人ぞ知るスティール一押しの癒しスポットである。
はた、と足を止め、仕切りも扉もないそのコーナーに横たわる人に気付く。

壁に左肩をつけ仰向けに寝転んでいる男性は、腹の上で軽く手を組んで目を閉じている。白いクッションに艶やかな黒髪が広がり、天窓からやわらかく降り注ぐ光がスポットライトのようにその美貌を照らし眠り姫もかくやという雰囲気に包まれていた。
声を上げそうになり、両手で自分の口を押さえる少女。
もしやまた何事か起こったのかとそっと足音を忍ばせて近寄り、革靴を脱いでカーペットに上がると傍らに膝をついて呼吸を確認する。
殆ど息遣いも聞こえない静かさだったが、上から三個目まで外してくつろげられたシャツの下の胸はゆっくりと上下していた。

「びっくりした・・・」
思わず漏れた声にもローレンスが目を覚ます気配がないので、安心してぺたりと座り込む。
こんな風に目を閉じて横たわっているのを見ると、嫌でもあの〈銀の界〉での最後を思い出してしまう。

「ディーン」
囁いて呼びかけて。
どんどん冷たくなっていく体を抱きしめて見守るしか出来なかったあの時。
それを思えば、こうして傍にいられる今、どんなに幸せなことだろう。

「私を探して欲しい」
「・・・どうやって？」
「どうやってでも」

「全身全霊を掛けて、今度は自分の体できみを抱きしめるよ。だから」

映画館で最後に交わした言葉、ちゃんと覚えてるよ。
あたし、約束果たしたよ。ディーン。
この世界に生まれてきてくれてありがとう。
こんなにすぐ傍にいたのに、遅くなってごめんね。

「あたしね、ディーン。あなたに再会できたら、きっと記憶もすぐに戻って、以前みたいに笑いかけてくれるって思ってたんだ・・・でもね」
思わず唇から紡がれてしまう、今気付いたばかりの気持ち。
「あなたはずっと寂しくて辛い経験をしてきて、それなのにあたしとシャールを助けてくれて、そのせいで命まで散らせて仕舞って・・・。あたし、どれだけ謝っても感謝しても足らないの。シャールもきっと同じ・・・。だからね、今は思い直したの。
そんな記憶、戻らなくてもいいって。
ディーンが今幸せなら、あたしのことなんか思い出さなくていいよ。
もう一度出逢えた、それだけでもう十分だから。
だから・・・・・・」

長い睫毛を震わせて、深紫の瞳が少女を見上げた。
小さな声とはいえ、枕元で語られたら目も覚めようというもの。いつから気付いていたのか、それともはなから眠ってはいなかったのか、ローレンスは床の上についたスティールの手に自分の手を重ね、上半身を起こした。

「どうして泣いているの」

言われて初めて、自分の頬を涙が伝っていることに気付いた。ポケットからハンカチをと思ったが、重ねられた手を振り払うのも気が引けてしまい、ぱちぱちと瞬きだけした。
「きみの涙は・・・胸が締め付けられそうになるよ。何故だろう・・・」
思案気に眉根を寄せて、ローレンスはゆっくりと指先でスティールの涙をすくった。
「考えなくていいの、思い出さなくていいの・・・あたしが欲しかったのは、きっとカフェテリアでのみたいな楽しい時間だから・・・・・・。だから、また笑って？」
ふわりと、スティールは微笑んだ。涙の跡は消えてはいないが、少しの努力で実現した。
ディーンに話しかけていたその口調のままだったことに本人は気付かず、ローレンスは口元を綻ばせた。
「うん。じゃあきみもまたそんな風に話しかけて？」
「え？やだ、あたしったら」
赤面して手を引こうとするところをぎゅっと握り直されてどうにも身動きできなくなる。
「あ、あの、ローレンス、さん？」
「違う違う」
ふるふると首を振り、さっき言ったでしょと続ける。
「さんは要らないし、きみが呼びたいならディーンと呼べばいい」
「ローレンス・・・？」
頷いて、「とにかくそんなにぎこちなくしているより、さっきみたいなのがいい」と笑う。
「約束。次会った時も、さっき話しかけてくれたみたいに普通にしゃべって」

ああ、そうか。
ぼんやりと推察するスティール。

もしかしたら、ローレンスには『普通に』おしゃべり出来る友達は少ないんじゃないかと。
当たらずとも遠からずではあるが、たった今の状況でいうとローレンスはその意味でスティールにそう言ったわけではないのだが。

ローレンスの胸ポケットで携帯端末が振動した。またアンジェラからの催促であろう。
名残惜しそうに手を離しながら、「きみの端末、貸してくれる？」と言われ、素直にスティールは手渡した。
自分の端末を操作してスティールの方の画面も確認すると、
「僕のプライベートナンバー入れといたから。また会おう」
はい、とスティールに端末を返すと、ゆっくりと靴を履いて立ち上がった。
「会議ばっかりで嫌になるよ」
バイバイ、と手を振って去っていく後ろ姿に慌てて呼びかける。
「ローレンス、またね！」
振り向いたその人がもう一度手を振り、スティールは大きく右腕でバイバイの仕草を返した。

このさよならは、また会うためのさよなら。
だからもう寂しくないよ。

もう、会おうと思えばいつだって・・・とはいかなくても、すぐに会えるんだよね？

「不思議な子だ」
くすくす笑いながら、ローレンスは迎えに来たアンジェラのリニア

カーに乗り込んだ。

どうしてか自分のことを『ディーン』と呼ぶ少女。
話の内容からして、どうやら自分はその人の生まれ変わりだと思われているらしいけれど。

「きみは『生まれ変わり』を信じるかい？」
怪訝そうに顔を盗み見ているアンジェラに問うてみる。
「生まれ変わり・・・私は信じてはいないけれど、文献によると例はいくつか残っているわね。本人しか知りえないような過去の具体的な記憶を持っている人が、稀に生まれると」
綺麗に整えられた爪を顎にあて、やや思案しながらアンジェラが答えた。
「記憶喪失とは違うから、何かのきっかけで思い出したとしてもそれまでの記憶もなくならないんだったよね？」
「ええ、そうね」
頷き、また新しい研究でも始めるのかと興味深そうに青い瞳が煌いた。

だとしたら。
もしもあの少女の言葉の通り、僕が『ディーン』なのだとしたら。
彼女とどんな経緯があったのか、思い出してみるのもおもしろいかもしれない。

「なんだかまた悪巧みしている表情ねぇ」
おお怖い怖い、肩をすくませながらも有能な秘書は楽しそうである。
「失敬な。僕がいつ悪巧みなんてしましたか」
にやりと唇の端をあげるその笑い方は、その他大勢の前ではしない表情であることをアンジェラはようく心得ていた。

では。
全く未知の分野ではあるけれど、新しいお楽しみも出来たことだし。
「今夜こそはゆっくり眠りたい気分なんだけど・・・」
あの少女について想像を巡らせると、なんだか幸せな夢が見られそうだった。

「そうねぇ、会議の後夕食を摂って、集まったデータの集計をして、それからならば」
「データの集計くらい僕じゃなくても出来るでしょ」
「あらあら、珍しく人任せなのね？」
「人じゃなくても機械任せでもいいよ。さっきちょっとだけ転寝したけど、そろそろちゃんと眠りたいから、もう今夜こそは邪魔しないでよ」
「承知いたしました」
にっこりと微笑んで、アンジェラは「では」と付け足した。
「明日にでも私も休暇を頂いてよろしいでしょうか」
「いいんじゃないの？」
理由もなくアンジェラが休暇申請などするのは初めてのことなので、驚いたものの即答するローレンス。
「アンジェラこそ、なんか悪巧みしてるんじゃないの」
肩をすくめて見せる主に、うふふと艶のある笑いを返す美人秘書兼ボディガード。
「たまには若い子を誑かしてみようかと」
うわ、その相手可哀相にと、本気で目を見張ってしまうローレンスだった。

１０（後書き）

ここで一区切り。『誘惑』に続きます。

誘惑

なんとはなしに、図書館の閲覧コーナーで逢瀬を楽しむようになってしまった二人。
この日のスティールは、前回会った時のシャールの不可思議な言動について、ローレンスに相談めいた話をしていた。

「ね、なんか変だよねぇ～」
ずっと一緒にいたい。そういう気持ちはスティールにだってないわけではない。
けれど、あんなに切羽詰った様子で急に具体的な話になるなんて困ってしまう。

「へぇ」
さて、相談されたローレンスの方はといえば。シャールという少年がスティールのことを好きなんだなということが判りはしても、自分もそのような感情を抱いた経験がないためあまり軽はずみなことを言うのは控えている。

今日も図書館の中は二人の貸し切り状態。何の気兼ねもなくカーペットの上に座り込んでおしゃべりに興じる二人は、二面の壁に背を預けて正面からではなく斜めにお互いの顔を視界に納めている状態だった。
「ところで、スティールはいつもシャールとはどんな風にスキンシップしているの？」
接し方といってもピンとこないだろうと、より具体的な言葉で質問するローレンス。
「スキンシップ？っていうと？」

それでも青年が何を尋ねたいのか判らなかったらしく首を傾げる少女。
「例えば…そう、スティングとだったら多分抱きついたりはしないよね？バイクの後ろから腰に手を回すのは別として」
「ああ、そういうことかぁ。うん、それだったらね…ええと」
しばらく考えていたけれど、言葉にするのが上手くいかなかったらしく。
「こんな感じ」
にこっと笑って両手を床について這うようにしてローレンスに近寄ると、そのままガバッと首に手を回した。
「えーと…じゃあ、シャールはその時こんな感じ？」
流石のローレンスも少々意表をつかれたものの、すぐに気を取り直して腰に手を回した。
「そうかもー。よく分かるね、ローレンス」
おいおい、と思いながらも曖昧に相槌を打つと、「それからねぇ」と少女が頬に口付けしてきた。チュッと音を立てて瑞々しい唇が離れ、至近距離から瞳を覗き込む少女。ローレンスは笑顔のまま微動だにしていないけれど、内心またしてもやられた感で溢れていた。
「こうしたらシャールが変な顔して、あたし嫌われたのかと思っちゃったんだけど、何だか違ったみたいで。でもその後シャールの様子変なんだよね～。ローレンスは？やっぱり嫌だった？だったらごめんね？」
嫌なはずがないだろう？
こうして二人きりで会っている状態で、大抵の男ならば下心ありありな筈だ。
そんな時にそう、スティールに判断できない複雑な表情をしたということは。
「その時に本当はシャールがしたかったことならわかるけど」

そっと囁く。
「え？それも分かるの！？なんで？どうして？シャールは一体…」
「いいの？それを僕から知らされても」
深い紫の瞳の奥では、この状況を目一杯楽しもうとしている色がちらほらと見え隠れしている。それはアンジェラでないと気付かない色であったので、スティールはただじっと長い睫毛の奥の魅惑的な瞳を魅入られたように見つめていた。
ごくりと喉が鳴った。
「うぅ…ホントはよくないんだろうけど…知りたい…」
「いいの？」
こくりと少女が頷いて。
「じゃあ、僕も実技で」

ごく自然な動作で、ローレンスの唇がスティールの下唇に触れた。
ふわりと、掠めるように。
嫌がる様子はなくただ目を見開いた少女に、今度はやや首を傾けて瞳を閉じながらきっちりと唇を重ねる。
何かいいたげに開いた隙間から舌を滑り込ませて、歯列に沿って口内を探索し、出会った柔らかな肉に絡めて吸うと、首に回された手がギュッと髪の毛ごと頭を掻き抱いてきた。
「ん、ふっ…」
拒否したいのか離れたくないのか自分でも判らないスティール。
ただ、生まれて初めての丹念な口付けに頭の芯まで蕩けたようになり、何も考えられなくなっていた。
いつの間にかシャツの裾からローレンスの長い指先が中に入り、女の子のものとは異なるやや硬めの骨ばった手の感触が脇腹から背中を撫で上げる。
ぞくぞくとえも言われぬ快感が体を這い上がってきたが、「まって」と息も絶え絶えにようやく言葉が漏れた。かなり小さくて掠れてはいたけれど。

ローレンスの手がぴたりと止まり、最後にもう一度唇を吸ってから顔が離れていった。スティールの両腕がするりとほどけて両脇に垂れる。

「いやだった？」

経験上そうではないと知りながら、少し申し訳なさそうにローレンスが尋ねた。黒くて長い睫毛が揺れている。

「う…ううん。いやじゃない、よ…」

今更ながらにカーッと赤面するスティール。

いやじゃあないけど、でも。

ディーンの記憶がなくて、どうしてローレンスは会って間もないあたしにこんなこと出来るの？

それを口にして良いものかどうか逡巡していると。

ああ、そうか。はたと思い出したように、ローレンスがスティールの手を取った。

「そっか、カフェテリアで言ってたものね。うん、順番が逆になってごめん」

わけも分からず、ほけっとなすがままのスティール。

「僕と付き合ってください」

自分の膝の上に乗った少女の両手をそれぞれの手に乗せ、真剣な表情で言の葉を紡ぐ。

「あ…あの、あたし」

未だに自分でもどうしたいのかわからないままに、それでも自然と出てきた言葉は。

「実はまだちゃんとお付き合いってしたことなくって、だからあの、ローレンスにとっては付き合うって…どういうことなのかな、と…」

お互いに相手の言動には驚かされる日だった。

ローレンスの方も、スティールの意外な言葉に驚いているのだけれどそれは表面化していないだけで。

「このあいだスティングに言ってたじゃない。そういうことはちゃんと付き合っている状態でするべきだって」

だからつまり。

そういう方向で。

「で…」

「で…？」

「でもあのあたしじゃあ、その、吊り合わないっていうか、ローレンスの周りにはもっと素敵な女性がいっぱいいて。あたし本当はディーンに再会するまでにもっとちゃんと女を磨いとく予定だったのに、まだこんなだし、それに記憶ないのにどうしてローレンスがあたしとなんか」

「なんかなんて言わないで。僕はきみだからいいんだ」

確かにここまでの言動全てにローレンスの駆け引きが反映されていることは否めない。ローレンスにとっては、生きていく中での一挙一動がサバイバル。本音も建前も分からなくなるほどに全てが計算された動きで。でもそれでも、確かにこの少女と関わっていたいと心底感じていた。

「僕は、きみがいい」

ここで断られたらどうしよう。

生まれて初めてそう不安になった。

元々自分から相手を選ぶことなどないローレンスが、今初めて欲する相手がこんな年下の少女だとは。

もっと時間を掛けるべきだったかもとも思ったが、これまでのスティールの話や周囲の状況を分析するに〈恋愛対象〉として明確にしておかないといつまで経っても前進できないかもしれないと感じた

のだ。

それで今日話の流れも手伝ってかなり強引なことをしてしまったのだけれど、実は相手が違えばこれはさほど強引なことでもないような気もする。

場所が図書館ではなくてもっとプライベートなところで、そして相手がスティールでなかったならば、ことは最後まで行っていた確率が高い。勿論そんなことにまで気が回るスティールではないので変な勘繰りを入れられなくて良いのだけれど。

「あたし、あたしは…」

親しくなりたいと思っていたし、ディーンが自分のことを恋愛感情で好きだと愛しているという事は分かっていたけれど。それでもやはり理解できていなかったのだと自覚する。

恋焦がれる切ない想いが、まだ実感できない。

何かに追われる様に必死でディーンの転生後の姿を追い求めてきた、その時の気持ちが、恋愛感情に近いものではあるかもしれない。

でも、好きになるかもしれなかったディーンと、ローレンスはやはり別の人で。魂は同じでも人格は別だと段々分かってきて…。

あたしは、ディーンとだったら付き合ってもいいのかな。

ローレンスだから即答できないのかな。

シャールが今みたいにあたしにしたかったのなら、やっぱりシャールもあたしと付き合いたいのかな。

本当に判らない…。

シャールのことはまた考えるにしても、まずは今現在のこの状況をしっかりと見つめて認識して対応することが先決だ。

何処か遠くを見つめていた瞳に光が戻った。

おや、と気付いてローレンスの手に力がこもる。

「あたしね、ディーンに愛しているって言われてとても嬉しかった

の。本当に。そして、探してって言われてこれ以上ないくらい必死になって探したんだ。早く早くって、なんだか毎日気が急いて背中を押されているみたいに。だけど実際こうしてあなたを見つけて、それでどうしたらいいのか、本当に何も判らなくなっちゃって。あたしまだ、あなたの想いに応えられる自信がないよ。けど…」
「けど、それは〈ディーン〉の想いだ。僕の気持ちも考えて？」
うん、と。こくりとスティールは頷く。
「ああ、なんだか上手く言えないけど…」
「うん」
「あたし、ローレンスのことときっと好きなんだなって。だから」
すう、と息を吸い直して。そして息を潜めて聴き入っている青年に告げる。
「まずは付き合ってみてもいいかなあと、思う」
琥珀の瞳が、真摯に深紫の瞳を見つめてその奥まで覗き込んで。重ねた両手が小刻みに震えていた。
ふわりと、ローレンスの口元が緩んだ。
我知らず、柄にもなく緊張していたらしい。こんな不安な思いなど感じたのは何年振りだろうか。
「ありがとう。嬉しいよ」
手の平に載せた少女の手に優しく口付けを落とす。それぞれの指先に、甲に、しるしを残すようにゆっくりと。
そうしたらスティールはまた頬を紅潮させて狼狽した様子を見せた。
「…っ。やだ、なんか…凄く変な感じが…あっ」
悶えるように身を捻り手を引こうとするので、軽く握っていた手を離すとローレンスは再び腰に手を回した。
「や…っ」
自分でも驚いているらしく、パニック気味のスティール。ローレンスの方はしてやったりと別の意味で口元が綻ぶ。

ぐいと抱き寄せると、細い肩は小鳥のように小刻みに震えていた。

「明日もまた話をしよう」

耳元で囁き、その声に反応する体を確かめ、あまり押し過ぎると怖がらせてしまうかなとここいらで引く事にする。

「うん、また…明日…」

まだ赤面したまま頷く少女の髪を手櫛で梳きながら、不思議な充足感に包まれていく。

色々な意味で、毎日を楽しんでいるローレンスだったが、未経験の気持ちだった。

一緒にいるだけでこんなに満たされた気持ちになれるものかと、茫洋と視線を彷徨わせる。そうしてただじっと抱き寄せている間に落ち着きを取り戻したスティールは、撫でてくれる手の平の優しさにうっとりと目を細めた。

美人秘書からのお迎えコールまで後数分。

流石の恋愛音痴少女も目覚め始めた記念すべき夕暮れだった。

揺れる想い

「ねぇ、リルとジルファさんにとって、付き合うってどういうこと？どんな風に自分では定義してる??」
寝る準備万端でベッドに寝転んで、カーテンを開け放った月光の元、スティールは尋ねた。

『は…』
リルフィは瑠璃色の瞳をまん丸に見開いたまま言葉に窮し、ジルファの方は翼で嘴を覆うとくつくつと笑った。
『なんとまぁ、一七歳にしてようやくそんな質問が出るのかとは思ったけれど、私としては君とそういう会話が出来るのも楽しいものだね』
部屋の隅の止まり木から、ふわりとベッドの足元に舞い降りる深い青。
『で、私としての見解だけれど、まぁ一般的な感じかな。男女が〈付き合う〉というのは、お互いに好きあっているか、少なくともどちらか片方がもう片方を好きな状態で、他の友人とはしないようなスキンシップをすることだよ』

「スキンシップ…」
図書館でローレンスもその言葉を使って質問していたことを思い出した。
それでちょっと、それぞれに想像してみることにするスティール。
例えばスティングだと…確かにローレンスの言う通り、まぁ成り行き上背中から腕を回して腰にしがみついたりは、する。
これって抱きつくとは違うよね？

手を握って引かれたりとかはするけど、腕を組んだり肩を組んだりは…多分だけどしたことない。つまり女の子の友達と同じ。キスするなんて想像もしたことないし、そんなの有り得ないって思う。
シャールの場合…抱きつく、普通に。うん。そういえば犬のときってお風呂も入ったことないっけ？流石に大きくなってからはないけど、シャールの体は私が洗ってたなぁ…犬だけど。
同じ部屋で寝起きしてたし、キスっていうか…あれキスなのかな？普通にするよね？スティングだって、姫とキスしてるし～。
あ、犬じゃなくて今のシャールだったら…でも別にかわんないなぁ。一緒にくっついて眠っても、こないだのキスがたとえ唇だったとしても、嫌じゃないし普通な気がする。うん。
お風呂だって入れちゃう気がするなぁ。その時にならないとわかんないけど。
で、ローレンスだと…。あぅ。キス…あんなの恋人同士のキスだよね？映画とか本の中では知ってたけど、ホントに自分がしちゃうとわけわかんなくなるものなんだねっ。皆あんなこと普通にしてるのかなぁ…でもサンディにも聞けないしっ。
急に赤面する少女。完全に意識は別世界に飛んでいってしまっている。
ディーンと初めてキスしたときも、頭が真っ白でわけわかんなくなったよね。でもあの時は〈お守り〉がどうとかって、なんだか普通のキスでもなかったみたいだし、だけど今日のは世間一般でいう恋人同士のキスだよねぇ～っ！
っていうか、なんでローレンスにしろディーンしろ、耳元とかで囁かれただけであんな変な気分になっちゃうんだろ。背中がぞくぞくするっていうか、でも悪寒とも違うし、大体手にキスされただけでもやっぱり変になっちゃうしっ。とにかくなんか違うんだよねーっ。やっぱりかっこ良いからかな？　絶対あたしが隣にいると見劣りすると思うんだけど、でもそれでいうとシャールだってかなりの美人だよ～。目だってぱっちり睫毛長いし、色気とかそういうの、あた

しよりある気がするんだよねっ。

押し黙ってこんなことをぐるぐる考えていたら、同室のものはどうしたのかと心配になりそうなものだけれども…。質問されてその後放置されていたジルファは、布団の上で悶絶していた。ついでにいうと、リルフィも笑うのを堪えすぎて涙目になっている。

『す、すまないのだけどね、頭の中身…も、漏れてる…っ』

一応声に出して笑うのは堪えて、結果お腹をおさえて布団の上を転げ回る羽目になってしまったジルファが、苦しげに息をつきながら言った。

頭の中で想像だけしているつもりが、ぶつぶつと呟いてしまっていたらしい。

「えっ！やだーっ聞かないでよぉ～っ」

『そんなこと言ったって』

嘴を力いっぱい噛み締めたまま、リルフィが言った。

二人の言葉は直接脳に響くので音は要らないのだった。

『でもそうか、学校でローレンスとキスしたんだね？それでさっきの質問が出たわけか』

深呼吸して息を整えるジルファ。

「うん、まぁその…ローレンスが『シャールとはどんなスキンシップしているのか』って聞くからあたしがそれやってみたら、その時シャールはこうしたかったんだよって…て」

ああっ！大事なこと思い出したあ！と転んでいた上半身をカバリとスティールは起こす。

「シャールがあたしにキスしたかったってことはもやっぱりシャールもあたしと付き合いたいんだよね。まだ本人に言われたわけじゃないけど」

『ああまぁそうかもね？』

「でもそういえばあたし、シャールに『いつか家を持ったら一緒に暮らそう』って言われたんだ。その時はそういう意味だと思わなくて、今までみたいに一緒に暮らしたいってことなんだとばっかり思ってたけど」
がくーっと翼を垂らして脱力している二人。

『ねぇスティール、やっぱり今度から界渡りするとき私も一緒にいたほうがいいんじゃないのかしら』
黙って聞いていたリルフィが口を挟んだ。

どうも自分がいないところで、少女のぼけっぷりが大惨事を引き起こしているような気がしてならない。突っ込む人がいないものだから、先日のスティングとの電話のように、素で異性からのアタックを闇に葬ってしまっているに違いない。葬られる男共には多少の同情はするものの、基本的にスティールが無事ならばそれはそれでいいのだけれど、あまりいつまでも子供っぽいのもどうかとは思っているのだ。
もしもローレンスと進展があったとして…その時に困るのはきっと少女だろう。周りの大人たちからしたら、年頃のレディなのだから。シャールと一緒に暮らすという選択肢も、リルフィにとってはあまり嬉しくはない。狭間の界の人間が銀の界で暮らすなど、きっと前例もないし、ましてやシャールは〈銀の君〉の血を引くただ一人の直系だ。その配偶者になり〈ちから〉を得ることで、大切な少女はどうなってしまうだろう。出来るだけ普通の人生を、と望むのは両親だけではないのだった。

確かにこちらよりあちらの方が、私には居心地が良いとも言えるけれど、それとこれとは別問題だわね。

精霊族の住まう環境でもある〈銀の界〉は、〈金の界〉育ちのリル

フィにとっても過ごしやすい空気であることは認めている。
それにあちらでは、窮屈な鳥の姿をしていなくても良いのだ。王妃がいなくなった今、誰に気兼ねすることもなく人型になればよいのだから。
ただし、リルフィの人型の姿は、未だにスティールも見たことがない。驚くだろうけれど、少女ならばすぐに受け入れてくれることだろう、シャールのときのように。

『リルフィが行くなら私もついていって、ついでにまたシャールの特訓でもしようかねぇ』
つらつらと思考中の金色の鳥を見遣りながら、ジルファも参加表明をした。

どうも最近、銀の界の波長の揺らぎが気にはなっていたのだ。
それの理由が、先刻のスティールの話から判明したように思う。
やれやれ、恋の力は偉大だね。もっとも、それに関しては私は何も意見できないけれど。
恋の為に最大の禁忌を犯す寸前だった自身を振り返り…そして、同じく恋の為に一つの世界を崩壊に導こうとした銀の界の統治者たちを思う。
シャールの〈ちから〉自体は、父王には及ぶべくもない。しかし、セーブの仕方も使い方もまだ体得できていない部分が多く、界の安定の為に行使している以外で、おそらくは自分でも気付かぬまま使ってしまっているのだろう。
リルフィもきっと同じ答えを見出しているに違いなかった。
スティールにこうまで興味を示しているローレンスが、未だに記憶を取り戻さない理由を。

二十年分ほどとはいえ、人一人の人生を背負い込むのは、誰にとっても苦痛だ。

ましてそれが辛い記憶であるならば。
だからそれを取り戻すことが良い事であるとは私にも思えない。悪いことだと断言も出来かねるけれど。
しかし、それが自然にではなく、外からのチカラで無理矢理に抑えられているのだとしたら…それは…。
ディーンの魂を、更に傷つけることにはならないのだろうか。
短い期間ではあったが、ペットとして傍らで過ごした記憶を持つジルファ。
優しくて繊細で、けれど確固とした信念のまま行動した青年のことを思う。
シャールも心優しい少年だ。だから意識してそのようにチカラを行使しないだろう。けれど無意識にそうしているのならば、そしてこのまま少女に対する想いが大きくなり歯止めが利かなくなったら。
父王のときの二の舞になるのではないだろうか？
私の杞憂ならばそれでいいが…。

視線を部屋の片隅に向けると、珍しいことにリルフィと目が合った。
いつもは意識的に逸らされるものだが、この時は違っていて、彼女も同様に困惑していることがその様子から感じ取れるのだった。

「そうだね、久し振りに一緒に行こうか、皆で銀の界へ」
思考の淵に沈んでいた二人の耳に、少女の声が届いた。
二人とは違う方向から少年について考えていた少女もまた、それなりの結論を出したらしかった。
『そうしましょ。そうと決まれば、これ以上悩むのは止めて今日はもう眠りなさいな。明日はまた学校なんだから』
リルフィの言葉にうんと頷き、スティールは布団をかぶった。
「おやすみ、ジルファさん、リル」
『『おやすみ』』

じきに安らかの寝息を立て始めた少女に習い、鳥の姿の二人も目を閉じた。

二日月の薄く冷たい光が窓辺を青白く照らしていた。

たったひとりに逢うために　〈前〉（前書き）

少しさかのぼり、ディーンと死別して半年後のスティールの話。シャールからの素敵な誕生日プレゼント。

たったひとりに逢うために　〈前〉

映画館なんて久し振りだった。ましてやペア席なんて指定したのは、初めての経験だ。
視界いっぱいに大迫力で繰り広げられる３Ｄ映像のアクション映画に、本来なら釘付けの状態だっただろうけれど、今はそれよりも隣に腰掛けている人に心臓の音が聞こえやしないかと気もそぞろ。

ペア席は、柔らかめの二人掛けソファとテーブルで構成された完全な個室である。絶妙なアングルで他の座席と視線が合わないよう配置されており、前を向いて視界に入るのはスクリーンのみ。また硝子でカバーされており、映画の音は室内のスピーカーで直接聞くことになるが、中の声も外に漏れないようになっているのだ。
そっと寄り添うように隣でスクリーンに見入っている青年の体温が、服越しに伝わってくる。息をするのさえそっと気遣わないと、全てが伝わってしまうのではないかと変なことにばかり気が要ってしまい、大好きなアクション俳優の映画だというのに、少女はストーリーに入り込むことが出来なかった。

「どうかした？」
派手なアクションシーンが終わり、青年が首を傾げて尋ねた。

ああどうしよう！
それだけで心臓が跳ね上がるような錯覚にとらわれる。
少し長めの漆黒の髪が、さらりと襟を流れ、彼は触れ合うほど近くに置かれていた左手で、少女の右手を取った。
「具合でも？」

こんなにドキドキしているのに指先の冷たいのが気になったのか、わずかに眉をひそめ、彼は顔を寄せてじっと瞳を覗き込んできた。吸い込まれそうな深い闇の色。少しだけ紫の掛かった虹彩。束の間本当に息をすることを忘れてしまった。
ぼーっと上気した頬が暗闇でもばれてしまったのか、更に顔を寄せてあろうことかおでこでこつんなんてされてしまったものだから、硬直したまま気を失ってしまうかと思った。

口をぱくぱくさせて固まってしまった少女に、今度は青年の方が狼狽し、
「ごめん、私があちこち引っ張り回したから疲れたんだね？それとも風邪でもひいたかな」
と不安そうに謝罪した。
「ち、ちがっ・・・」
あうあうとスティールはようやく息を吸い込み、顔の前でぱたぱたと両手を振りながらなんとか平静を取り戻そうと努めた。
それからテーブル脇のコンソールに手を伸ばし、紅茶を注文する。
「飲み物頼むね、一緒でいいかな？」
「勿論君と一緒で」

本当に大丈夫かな、とじっと顔を見たまま、青年は映画を観る事は放棄してスティールに意識を移してしまったようだ。
程なくして、ティーセットがテーブル上の給仕口から現れた。ポットに入った紅茶にたっぷりのミルクポット、輪切りのレモン、カロリーオフの糖分にカップとソーサーとスプーン。何処ぞの喫茶店のようなしつらえだった。一緒に置いてある砂時計から、さらさらと砂が滑り落ちていく。

「ちょっと意識しすぎみたい私」
正直にも程があるが、いつも正直すぎる家族に囲まれているせいで

隠し事の出来ない性質らしく、少女は呟いた。
「意識、というと？」
「つまり・・・あなたのこと」
青年は不思議そうな表情で、やはりまじまじと少女を見つめていた。
「だって学校でもこんなにぴったりくっつくなんてこと滅多にないんだけど、近所の男の子とだったら全然こんな風になったことないのに、おかしいの。ドキドキが止まんなくてそれが聞こえたらどうしようってずっと気になってて映画みるどころじゃなくって。そんなだから手なんか繋いじゃったらもうどうしたらいいか判んない位緊張しちゃって、ついつい息まで止まっちゃったんだもん」

「・・・・・・・・・。」
一瞬言葉を失った青年は、幸せそうに微笑んだ。
「なんだ」
「なんだじゃないよー」
「だって」
青年はもう一度少女の手を取り、自分の胸に押し当てた。
ドキドキと、通常より速い心拍数が伝わってくる。
「ほら、一緒だよ」
「・・・どうして？」
「だって私は君のことが好きで仕方ないんだから」
囁くように言う青年の表情は、心底幸せそうで。
疑うとか、茶化すとか誤魔化すとか、そんなこと絶対にできないような雰囲気で。
どうしよう。

「同じように感じてくれているってことは、少しは希望があるのかな」
そんなこと言われても、まだ自分のことさえわからなくて。
ただ、ずっとずっと会いたかった。

あの時伝えられなかったこと、いっぱいあるような気がして。
それでも、もう二度と会えないと思っていたから、どうしたらいいのか全くわからなくて。
そんな自分がもどかしくて仕方ないまま、こうして時間だけが過ぎてしまっているのに。

あれから半年が過ぎ、リルフィの言った通りスティールが界渡りしてシャールとは月に一回銀の界で会っていた。
銀の界のあの事件後、大半の妖精族・精霊族は金の界に渡ったままだったが、少数だが戻ってくるものたちもいた。水が引いた今、あの静かな森で暮らしているらしい。セートゥルードも、シャールに色々と指南するために残り本当に親身に世話をしてくれているのだそうだ。
友が身を呈して護った命を自分も大切にしようと思ったのかもしれないし、ただのおせっかいなのかもしれない。

こちらの狭間の界は、金や銀と違い機械と科学が発達した世界である。魔法の類は見当たらないがそれに該当する科学力をシャールはあちらの発展の手がかりにしたいと思っているらしい。
それが良いことか悪いことかはまだ判らないが、〈君〉という絶対であり至高の存在が消えてしまったことで、銀の界は大きな危機に瀕している。
恐怖政治を強いていた王妃が突然いなくなり、跡継ぎもいない。大臣等の補佐役も王妃がことごとく廃止してしまっていたため、統治者が不在なのだ。
いきなり与えられた自由に、住民たちはみな戸惑いおののき、開放

感と不安とで妙な騒ぎが起き始めているらしいとも・・・。
元々家族だった上に、シャールの人としての意識は十一歳当時のままさほど成長していないので、二人の間には恋とか愛とかそういった感情はまだ発生していないに等しい。例え傍目には十七歳と十六歳のれっきとした青春真っ盛りの年齢であっても。

〈界の存続〉という大きなくくりで見ればではあるが、銀の界もかなり平穏を取り戻し、しばらくならシャールが界を離れても大丈夫そうだという話になり、では次の逢瀬はスティールの誕生日に狭間の界でと言う事に決め、
「とびっきりのプレゼントを用意するからね」
シャールは、少し伸びた銀色のくせ毛を風になびかせながら、意味有り気に微笑んだ。

「あんまり無理しないでね」
いつも銀の界の存続と復興のためだけに走り回っている姿を見て、スティールは心を痛めていた。
シャールにはもう自分の身一つしかないのだ。血縁者は全員死に絶え、不安定な界を存続させるために彼はこの界を離れることは叶わず、昔のようにスティールと共に暮らすことは出来ない。
いつかはもしかしたらスティールの方が銀の界で暮らすこともあるかもしれないが、それはまだまだ先の話だ。

シャールが犬の姿だった頃、リルフィも一緒に三人でよく夜明けと日没を黙って眺めていた。
家から歩いて十分ほどの土手。芝生の上を二十メートルほど滑って遊んだり、下の整地されていない草原で追いかけっこして遊んだりもしたっけ。

十七歳の誕生日を迎える朝、まだ肌寒い初夏の空気の中、闇が薄れ朱と青の混じる微妙な色合いの空を見上げながら、ゆっくりと土手沿いの道路を歩いていく。
たまに早朝出勤者の乗る小型のリニアカーが道路を滑ってゆくが、居住区のはずれであるこの道を通るものは少なく静かなものである。
今日はリルフィもジルファも抜きだよと念を押されたので、不満そうなリルフィを半ば無理矢理ジルファに押し付けて家を出てきた。

この狭間の界では、生き物全てが生体認識のチップを埋め込まれている。それにより現在地点などは家庭でもすぐにチェックできるし体調に変化があればそれも判るので、いざとなれば文字通り飛んでくるだろうけれど。
「本当にあっちを抜けてきて大丈夫なのかな・・・」
若干心配なところもあるが、懐かしい景色を噛み締めるように合流予定地点まで殊更のんびりと歩を進めている。
今日は何をして遊ぼうかな？
誕生日がたまたま休日で良かった。学校で皆からプレゼントはもらえないけれど、それよりもシャールと二人で遊んだほうが楽しいに決まっているし、考えてみたら人の姿のシャールとこちらで遊ぶのは初めてなんだから、遊園地に行ったり買い物をしたり、犬だと今まで出来なかった事をいっぱいいっぱいしよう。
期待にはちきれそうな胸を弾ませて、予定していた地点に辿り着いた。

あ、先客がいたのか～・・・。
明けの明星を見つめているらしき男性の後姿があった。
道路からわずかに下りた辺りに腰を下ろし、川の向こうの地平線を眺めている。
ここ、シャールと私のとっときの場所なんだけどなぁ。

いくら後姿でも、薄暗くて世界が茜色でも、シャールを見間違うはずもなく、スティールはこっそりと溜息をついた。
男性がゆっくりと立ち上がった。身長はシャールと同じくらいらしい。
もしかして今の溜息が聞こえちゃったかしらとスティールは動揺して薄手のカーディガンの前をかき合せた。
そして、振り向いたその男性と視線が合う。
朝焼けで紅を帯びた黒髪がふわりと風になびき、未だ幼さの残るシャールとは違い少し骨ばった顎のラインは細くて、でも表情はこれ以上ないくらいにふわりと優しくて。
「スティール」
記憶に残るそのままの声で呼ばれて、時が止まったかと思った。
会いたくて、逢いたくて。
あなたにどうやって謝ればいいのかわからなくて。
どうやっても感謝しきれなくて。
「ディーン・・・！！」
気が付いたら走り出していた。

たったひとりに逢うために　〈後〉

斜面にたっているときに予想外のタックルを受けたら誰でもそうなるように、飛びつかれた男性ーーーディーンはバランスを崩し、しっかりとスティールを抱きとめたまま二人はもんどりうって芝生の上を転がり落ちて行った。
下の草地まで転がり止ったときには、長い髪に草を沢山絡めてはいたものの、広い胸に抱え込まれていたスティールは全くの無傷で、体の下に横たわっているディーンの腕の力が緩むとガバリと体を起こしてまじまじとその顔を覗き込んだ。
「・・・夢？じゃないよね？」
地面についていた両手で、そっと頬を包み込むように触った。確かにぬくもりがある。徐々に冷たくなっていったあの時とは違い、脈拍を感じる。生きている、その証。
「ああ、生きているよ。一応ね」
愛おしそうに見上げてくる、漆黒の切れ長の瞳。
「一応って」
詳しく聞きたかったが、涙がぽたぽたとこぼれおちてきた。
「どうして」
その涙を拭うよりも、今はこのぬくもりを感じていたくて。
「なんでっ」
命を感じていたくて。
「どうしてっ」
ディーンの顔から両手を離す事が出来ない。
その涙をそのまま胸で受け止めながら、スティールの背にそっと添えられていた両手を下ろし彼女の両手にそれぞれ重ねた。
「うん。ごめんね、哀しい思いをさせて」

スティールが少し落ち着くのを待ち、二人は斜面に並んで腰を下ろした。
地面に横たわる青年に馬乗りになって号泣している少女、通りがかりに誰かが見ていたらさぞかし奇異な光景に見えたことだろう。少なくとも、あれドールさんちのお嬢さんじゃない？といぶかるようなご近所さんには見咎められずに済んだようだ。何人かジョギング中の人が土手の上を駆けていったが、視界に入らなかったかそのまま足を止めずに走り去ったのも幸いだった。

「綺麗な世界だね」
もう随分と青く晴れてきた川向こうを眺めながら、ディーンが感嘆の声を上げた。
「そうだね。一番綺麗な時間だよ」
涙の跡を拭いながら、スティールもあけぼのの空を見やった。
「でも、銀の界だって綺麗だよ」
「うん。ありがとう」
しみじみと、隣の青年を見つめる。
先ほどまでは取り乱していて気付かなかったが、多少の違和感があった。
何だろう・・・。

あ！
「ディーン、ちょっと立って」
言われて素直に腰を上げた青年を見上げて、それからもう一度その胸に腕を回してみた。
「え、と・・・スティール？？」
どぎまぎとされるがままのディーンの鼓動は早鐘のよう。傍目には、少女の方が一方的に抱きついているようにしか見えない。
「んー・・・やっぱおかしい・・・」

むむむと唸りながら、スティールは体を離した。
「ディーン、以前と体格違うような気がするんだけど」
「なんだ、それが気になっていたのか」
合点がいき、ほっと息をついたディーンだったが、抱きついてそれに気が付くって年頃の女の子としてどうなのとここでは誰も突っ込んではくれない。
「前はもっと背が高かったよねぇ？私そんなに伸びていないはずなんだけど」
銀の界でいつも見上げていたし、最後はその遺体をずっと抱きしめていたので、体格を感覚で認識してしまっていたらしい。
「ああ、うん、まぁね」
ディーンは曖昧に頷いた。
「実は、私が君と一緒に過ごせるのは、日没までなんだ」
「え？今日だけってこと？また来月も会えるんじゃないの？？」
死んだはずのディーンが、雰囲気は違えど生きていることには頓着せず、スティールは驚きの声を上げた。
「本当に最後の一日なんだよ」
噛み締めるように伝えながら、ディーンは微笑んだ。

その後はもう目まぐるしい一日だった。
とにかく少しでも街での暮らしを味わってもらおうと、商店街でのショッピングに体感型ゲームセンターにテーマパークと、銀の界になさそうなところばかり連れ回したのはスティールの方だ。
何しろディーンときたら、「君がいるところなら何処でも」なーんて人なので。
実際問題、最初の土手にずーっと座って黙ったまま一日経ったとしても、ディーンは満足だったに違いない。
少しくらい身長が低くなっているとはいえ、彼の容貌の素晴らしさは欠片ほどにも損なわれること無く、すれ違う女性陣の羨望と嫉妬

の混じった視線はかなりのものだった。但し、生憎とそれに気付くほどの心のゆとりも無く、あったとしてもやはりちらりとも感じなかったかもしれない天然ボケなカップルだったのではあるが。
商店街といっても、実際に衣類などの物品はそんなに並んではいない。布地等を確認するための見本は置いてあるが、モニターに映った姿に希望の服を試着させることが出来、実物を着なくても自分にぴったりのサイズを注文することが可能だ。
それが面白くていろいろ試着して遊んだ。ディーンが着ていた服は一応こちらの世界でも通用する程度の無難なシャツとスラックスだったが、スティールの小遣いで買える程度のアンサンブルに着替えてもらった。
流行の関係ない質素なデザインではあるが、本人も気に入ったらしくとても喜んでいた。
そして、冒頭の映画館の状況にいたったわけである。

「本当に、きみと再会できて嬉しいよ。このまま時が止まっても悔いはない」
ソファで隣に腰掛けた美麗な青年にそう言われたら、あなたならどうしますか？
なんて呑気に自問している場合じゃないし。
一人で突っ込みを入れてみたりするほど、心乱れているスティール。
砂時計の砂は、とっくに全て落ちてしまっている。
取り敢えず、もっと平静になろうと、紅茶を二つのカップに注ぎ、片方の茶器をディーンに渡した。
もう二人とも映画を鑑賞するどころの心境ではないので、ＢＧＭ程度にボリュームを絞り静かにカップを口元に運んだ。

「じきに日が落ちるね・・・」
一杯飲み干してから、スティールはぼそりと漏らした。

本当に大事なことはまだ何一つ話してもらっていない。別れなんて来なくていい。事実を認めたくなくて、ただがむしゃらに楽しい時間だけを求めてしまった。
けれどももう、タイムリミットは近い。
「うん。まずは今の私の状態だけれど」
ディーンの方も、飲み干して茶器をテーブルに戻してから口を開いた。
「この体は、シャールのものを借りているに過ぎない。私は、事実あの時生命活動が止まってしまった」
体ごとスティールの方に向き、切なげに目を細めて囁くように説明を続ける。
「魂といい意識体という・・・憑依しているといえばいいのかな？但し、現在のシャールの意識はあちらの界にあるけれど。そしてその体に過去の私の容姿を見せる様に力を借りているんだ。だから実際の体格はシャールのもので、きみが感じた違和感はその通りなんだ」
どうりで、感じは違えども安心できる胸だったはずだと、スティールは納得した。

「あの時、シャールが金の界のものたちの導きで力を発揮したとき・・・実はあの水面下でもいろいろとあってね」
「あの毒の水の中で？？」
ディーンが中和させた時点で毒ではなくなったけれど、スティールはそう表現した。
頷き、状況説明は続く。
「父王は、銀の界で最高の力の持ち主だ。だから、本当はシャールの母君に刺されたくらいで命を落とすはずはない。あの時二人で沈んだのは、あくまで二人が一緒にいること・・・つまり母君が望む《あってはならないこと》の清算である〈死〉を受け入れたからに過ぎない。

だから、本当の死が訪れるまでの時間に、いろいろとやってくれちゃってね・・・元々そうするつもりだったのかもしれないし、最後だけ正気を取り戻して罪悪感が湧いたのかもしれない」
そう。シャールの母親であるリーディアは、一度死んだ自分の蘇りを拒んだ。シャールとの穏やかな生活を営むという幸せな未来も毅然と突っぱねて、愛した人の過ちを正すために〈死〉という選択をしたのだ。それは少なからず、狂気に苛まれたフレデリック王にも影響を及ぼしたのである。

「いろいろと？」
今回のこともそのいろいろの内ならば、そのことに関してだけはちょっぴり感謝しても良いかもしれない。
「うん・・・まぁ・・・〈世界の理〉にギリギリ引っ掛からないように何だかいろいろな理屈をこねてね。
あれだけ身勝手なことをした割には、最後はそれなりに筋を通した風だったよ」
困った人だよ、と息をつき、ディーンは少女の髪に手を触れた。
初めて会ったときも驚いたけれど、今度は恥ずかしいだけでなく、ぞくりと首筋が痺れるような感覚に襲われてスティールはもじもじと膝をこすり合わせた。
「私が今日此処に来れたのは、シャールのお陰だ。今まで色々と迷ったけれど、ようやく決心が付いたよ」

どんな決心なんだろう。

二人はお互いの瞳を覗き込み、瞬きすら惜しむように見つめ合っていた。
「父が、私たちの転生を願ったんだ」
呟かれた言葉が意味を伴ってスティールの体に浸透するまでしばしの時間が掛かった。

転生って、転生って確か蘇るってこととはちょっと違うよね？
「〈世界の理〉に突っぱねられない程度に、父が条件を提示したよ。記憶を持ったままゼロから転生する。但し、人以外の寿命の短い生き物になる。
記憶を失い人として転生する。姿は生前のままに成長できるけれど、これから生まれる命になる。
どちらも、きみに出逢える確率は低い。だから私は今までずっと迷っていた・・・・・・」
すんなりと伸びた指が、脇まで伸ばしている紅茶色の髪をからめてはすくう。
「きみに逢えないならば、記憶など残る意味はない。けれど、出逢ったらまた私は必ずきみを好きになるだろう。ならばその可能性に賭けてみてもいい。何よりも同じ時間を過ごしたいよ」
きっとこれ以降にもこれ以上の殺し文句を言われることはないだろう。
心臓を鷲掴みにされたような気がして、両手をぎゅっと握り胸を押さえた。
「今までに我がままを言った記憶はないんだけど、一生分の我がままを通すことにした。
私は、赤子からこの時間軸をやり直さない。狭間の界の時間軸を遡り、きみと同じときを私と判る姿で過ごしてみせる。出逢うまで記憶を失っていても、取り戻すように努力する。きっと魂に刻み付けたまま転生してみせる。だから」
髪を弄んでいた左手でそのまま肩を引き寄せ、ディーンはスティールの左耳に唇を寄せた。

「私を探して欲しい」

くらりと、目眩に似た感覚。
息を呑み、スティールは一度ギュッと目をつぶってからゆっくりと瞬いた。

「私を、見つけて欲しい・・・」
シャールより少しだけ低いテノールが、噛み締めるように耳元で願いを紡ぐ。

「・・・どうやって」
この世界の何処かも判らなくても？
何十億人も要る中からたった一人だけを？
「どうやってでも」
くすりと唇が微笑んだ。微かに耳朶をかすった感触に、つい身じろぎしてしまう。
それに気付いたディーンが、そのまま軽く耳朶を噛んだ。
「はぅっ」
勿論まだ誰にもそんな行為はされたことが無くて、でも知識だけはしっかり持っているあたりが年頃の女の子。肩を抱かれていなかったら、ソファから飛び上がっていたかもしれないが、生憎まだ青年は腕を緩めるつもりはないらしく、更に右腕を腰に回してきた。
抗う気持ちは湧いて来なかったが、どうしたらよいのかも判らない。
相手がエリックだったならば「おいおいお嬢ちゃん色気ねぇなぁ」くらいは言われたかもしれないが、いくら普段のお付き合いが森の仲間たちだったとしても、二十歳過ぎのしかも元王子ですこぶる付きの美青年が男女の色事を未経験という筈も無く。
しかも片思いでも躊躇なし、いろんな意味でマイペースを貫いている放蕩元王子。少女が戸惑いつつも自分に好感を抱いていることはしっかりと認識していて。

所在無げに二人の体の間で拳のままの両手は、青年の体を押しのける様子もその背に回される様子もなく、ただ青年の鼓動はしっかりとその両手から伝わっていた。

「スティール」
スクリーンにエンドロールとＮＧ画像が流れ始め、スピーカーからは終わりを感じさせる雰囲気の曲が流れてきた。
ディーンは名残惜しそうにゆっくりと体を離し、再び正面からしっかりと目を合わせた。
「愛している」
プライバシー硝子で遮られていなかったら、席を立ちかけた誰もが動きを止めたであろうに違いない心からの告白。黒檀のような長めの前髪の奥からまっすぐに自分に向けられている真摯な眼差しと言葉。

「全身全霊を掛けて、今度は自分の体できみを抱きしめるよ。だから」
必ず、また逢おう。

カップル席の一畳強のブースの中で、空間が歪み始めた。

「ディーン！」
ゆるりとほどかれていく腕。その手に自分の指を絡ませ、スティールは思わず叫んでいた。
「あたし、絶対に探し出してみせるからっ。必ず、見つけるから！
それで、その時までにもっともっと素敵な女性になっとくから。ディーンがあたしにくれる想い、返せるかどうかはまだわかんないけど、でも」
既に体の裏半分は時空の狭間にある青年に、今伝えられる言葉を懸命に探す。

「あたしだって、ディーンのこと、ちゃんと好きだからね」
その「好き」がシャールに向けられる「好き」と同じなのか違うのか。
大切なものに順番も優劣もつけられない幼さのまま精一杯伝えたい想いは。
「ありがとう」
果たしてどう受け止められたのか判らないまま、ディーンは幸せそうに微笑んで。
最後に指先がふっと歪みに飲み込まれて、界渡りの名残として空気をわずかに震えさせたまま、ブースの中にはスティール一人だけが残された。

館内に明かりがともり、ブースの硝子が自動的に解除されてようやく我に返る。どうやら最後の一人らしく、入れ替えのため退出を促すアナウンスに背中を押されるようにして、スティールは映画館を後にした。

真っ白な意識のままどうやって辿り着いたのか判らないが、自分の部屋に入った途端に金色と海の青の鳥が、何故か部屋の対角線上に設置された止まり木からそれぞれに『おかえり』と声を掛けてきた。
そのすぐ後に、
『何があったの！？まさか痴漢でも出たとか！ああだから私も行くってあれほど言ったのにーっ』
と金色の鳥が喚く。
「え？あれ？」
頬を伝う涙は、カーディガンのインのシャツをしとどに濡らしていた。
泣きながら歩いてきたことに気付いていなかったのだ。

リルフィはさかんにスティールを案じる言葉を掛けながらその肩に舞い降り、ジルファは首を傾げて見守っている。
「大丈夫だよ、リル。あのね、今日ね、とっても楽しかったよ」
ごしごしと袖でぬぐって、二人に向けて微笑むと、ひとまず安心してくれたらしく、リルフィも口を噤み次の言葉を待った。

いまこうしている間にも、この世界の何処かで彼は生きている。
そんな幸せな結末、いえ、未来？現在？想像もしたことがなかったけれど。
いつかきっと、出逢うよ。
待っていてね。

「あのね、ちょっと手伝って欲しいんだけど」
この後の二人の驚いた顔もちょっと楽しみだけど、もっともっと楽しみな出来事が待っている。
この世界の何処かで。
必ず出逢う。
たったひとりに逢うために、転生を選んだあなたと。

あなたにあいたくて

芝生のように丈の短い常緑草が遥か地平線まで地面を覆っている。その上を銀色の綿毛がふわふわと舞い、心地よい風がそれらを運んでいく。

首を巡らせれば、昼なお暗い鬱蒼とした森やところどころ崩れてはいるが堅牢な城壁に囲まれた都市も見える。かつては〈銀の君〉と呼ばれた男が眠っていた森と、その妻が治めていた城塞都市の名残である。ある日を境に王族全員が姿を消し、一時期は暴動もあったが、今は何とか平穏を取り戻しつつある自治都市なのだけれど、過去のような息詰まる緊張感もなく、のどかな空気に包まれている。

ラフなパンツスタイルに薄手の丈の短い上着を羽織った少年が、その草原に寝転んでいた。

緩くウェーブした銀色の髪を風にまかせ、仰向けになり澄んだ青空を見上げている。その瞳も空と同じくらい青く澄み、何かしら期待しているように口元には柔らかな笑みが浮かんでいる。

少年の近くの空気が、不自然に振動したかと思うと、何もない空間にぽっと人影が現れた。

リュックサックを背負った紅茶色の髪の少女である。

「シャール！久し振りーっ」

少女はそのままの勢いで、少年の首に噛り付いた。

「元気だった？二ヶ月も会えないなんて」

シャールの方も寝転んだままの姿勢で、傍にある少女の頭に手を回し、くしゃくしゃと髪を撫でた。

「元気だよ。ちゃんと生活してるよ。寂しかったけど、喜んでもらえたでしょ？」

大きな瞳をくるりと動かして、それでどうだった？と耳元で尋ねる。

「それよ！」
ガバリと体を起こすと、スティールは両腕を少年の顔の両脇について、じいっとその顔に見入った。
手の平で頬に触れてみても、やっぱりこれがシャールだなぁという感触しかない。一ヶ月前は、やや幼いとはいえディーンの骨格だったのに・・・。
しかしこの体勢、やはり前の月と同じように傍から見たら変な光景である。やっぱり誰も突っ込んではくれないが。

「うーん。やっぱりシャールはシャールだぁ・・・。でもなんだか大人っぽくなったよね？ちょっと会わなかっただけなのに」
少年から青年へと成長しつつあるシャールは、この二ヶ月でかなり面変わりしたように見える。小さな子供ほどではなくとも、男性は急に大きくなったりするものだが、シャールも今がその時期なのだろう。少なくとも外見上は、スティールより一つ年上の男なのだから。

「あーっもう、なんでもいいやっ。とにかくありがとうシャール」
ぱああっと輝くような笑顔を満面に浮かべ、スティールはもう一度体を沈めて彼の首に手を回した。
「どういたしまして～。二人に喜んでもらえて良かった」
シャールの方も、彼女の頬に顔を寄せて、すりすりと頭をこすりつけた。
「まだ犬気分抜けてないね～シャールったらもう」
笑いながらスティールもすりすりと返し、そのまま二人はゴロゴロと草の上を転がって笑いあった。

月に一度の逢瀬は、大体こんな感じで過ぎて行く。
都市や村に出向いて観光させてもらったりもするのだけれど、やは

り二人で森や草原を散歩したり、こうしてのんびりとじゃれあったりする方が性に合っているらしいのだ。
普段はシャールは生きていく糧を得るための仕事に忙しいし、スティールも学生だからそれなりに勉学に勤しんでいたりする。その息抜きのようなものだ。
それにしても・・・一つ年を重ね十八と十七歳になった青春真っ只中の男女の姿・・・には見えないような気もしたりする。

「でもね～なかなかディーン見つからないんだぁ・・・」
シャールの隣に膝を立てて座り、キュロットの下に覗く膝小僧を抱えてスティールは溜息をついた。
「狭間の界だって、連邦だけでも広いし、もしもちっちゃな島国なんかにいたら、見つけるの大変だよね」
学校あるし、何より遠くに行く軍資金もないしねぇと深々と溜息が続く。

んー。と唸りながら、シャールも体を起こして同じように膝を軽く曲げて座った。
「根拠はないんだけど」
ふ、と首を曲げてスティールを見遣る。
「それでもいつか逢えるよ。《縁》っていうのはとても強い絆だと思う。そして何より、二人ともとてもとても強く願っているから」

それが世界で一番大きな力になる。
なんだか説得力のある言葉だった。

「いつか、かぁ」
それまでに素敵なレディになってディーンを驚かせようとか、考えたりしたけれど・・・もしかしておばあちゃんになるまで逢えなかったらどうするの？みたいな。嫌ーな考えも浮かんでは脳の何処か

に引っ掛かって消えてくれない。

むむむ、と唸っていると、駄目押しのように、シャールがきりりと表情を引き締めて、

「大丈夫、僕も手伝うよ」

と請け負った。

「手伝うってどうやって？」

不思議そうに問うてみるが、それに対しては、ただ漠然としたイメージしかないから説明できないとかわされた。

「・・・ん、そっか。シャールも手伝ってくれるんなら心強いね」

うんうん、と頷きながらそれでも不安は拭いきれない。

「それでさ、スティール。暮らしも少し落ち着いてきたし、会う回数もう少し増やしてもいいかな～と思うんだけど」

「そうなんだ？それが出来るならそうしたいよ」

いいながら、あーでもそうしたらディーン捜す時間減るかなーとちらりと考えてしまう。

その思いはシャールに伝わってしまったらしい。

「ごめん、向こうで僕も一緒に探せれば一番いいんだけど・・・」

しゅんと意気消沈した様子は、大きな白い犬が耳と尻尾を垂らしてしょんぼりしている姿を彷彿とさせる。

「でもさ、僕だって出来るだけスティールと一緒にいたいんだよ」

切れ長のディーンの漆黒の瞳とは百八十度も違うような、くりくりとした大きな青い瞳に見つめられて、困りつつも可愛いな～っとぎゅうっと抱きしめたくなってしまう。

「あたしだって」

昔よくしていた様に、またしても首に抱きついてしまう。どうも悩んでいるときや寂しいときはそうするのが習い性になってしまっているらしい。姿はもう大型犬ではないというのに、だ。

もしも近日中にスティールとディーンが出逢ったとしても、やはりシャールとの時間はこれ以上増えないだろう。そう思うと、ちょっとしまったかなぁやらなきゃ良かったかな、なんて嫌な考えが頭をよぎったりするのだ。
そんな自分が嫌で仕方なくて、でもスティールの喜ぶ顔が見たいのも本音で、どうしていいか判らなくなったりしている。
犬の姿のままなら、こんな風に変な悩みを持たなくて済んだのだろうか。
あの時、母親の能力の期限が切れて封印が解けさえしなければ、あのまま犬の姿のまま、少女の傍で幸せな一生を過ごすことができたのだろうか。
そうしたら、銀の界は消滅してしまっていたかもしれないけれど、少なくとも自分たちが生きている間は世界は均衡を保っていただろうし、何事も感じずに過ごせたのでは・・・。

そんな「もしも」の世界を思い描いても、やるせないだけだけれども。
そんな「もしも」があったとしても、では今からでもそうできるとしてそちらを選ぶかと問われれば、答えは「否」である。

「あのね、スティール」
首に腕を回したままくつろいでいる少女の背に手を回そうとして、リュックサックが邪魔なことに気付き「下ろしたら？」と伝える。
「あ、そうだ、シャールに渡そうと思って」
スティールはリュックサックを下ろすと、いそいそと中から本を数冊取り出した。
犬のときに得た知識も消えてはいないらしく、シャールは狭間の界の文字の読み書きも出来るのだ。
書籍は機械工学など、シャールが興味を持っている分野の物だった。

勿論こちらの世界では手に入らない。
「わぁ、ありがとう！」
嬉しそうに受け取り、パラパラと中を確認する少年を見て、渡した少女も満足げだ。

「こんなタイミングで言うのも変だけど・・・」
パタンとページを閉じ、脇に積み上げてからシャールはスティールに向き直った。
「大好きだよ、スティール」
「うん、あたしもシャールのこと大好きだよ」
間髪いれずに応じる少女の顔は、にこにこにっこりと・・・なんでそんな当たり前のこと今更言うの？みたいな感じで、何の含みもない。
「うー・・・」
「？どしたの？」
ちょっと困ったような表情のシャールを見て、首を傾げる。
「うん・・・それはそうだった分かってるし、信じてるけど・・・」
「んん？」

天真爛漫の塊のような普段の少年の様子とは違う、それに今度はスティールの方が戸惑ってしまう。
少年少女といっても、重ねて強調するが、二人とも十八と十七歳であるからして、もうじき大人と呼ばれる年齢である。
「んー。その、僕は出来ればずっと一緒にいたいんだけど」
伸ばしてくくったら尻尾みたいだねと言われて、何となく切らずに放置している襟足が、肩に当たってあらぬ方向にはねている。その辺りを片手で触りながら、僅かに首を傾げ少女の瞳を覗き込んだ。
「今はまだ確かに無理だけど、僕がちゃんと自分の力だけで生きていけるようになって、家も持って・・・そうしたら、スティールは僕と一緒に暮らしてくれる？」

これはちょっと不意打ちだったらしく、ぽかんと口を開けて少女は目を見張った。大きな琥珀色の瞳が更に更に大きく見える。

「・・・そうだね、流石にそれはまだ考えていなかった、かも」

搾り出すように、呟き。

「あたし、まだまだまだ子供だって思ってたから・・・。学校も卒業しなくちゃとは思っていても、じゃあ卒業したらどんな仕事をするとか、ちゃんと考えていなかったし・・・・・・」

唇と顎に指を当てて、思案しながら言った。

「こっちも好きだけど、あっちの世界も好きだしなぁ。今のまま、行き来しているのじゃ駄目なのかな？」

うん、と頷いてシャールは申し訳なさそうに目礼した。

「ごめん、急にこんなこと言って。勿論そんなすぐにってことでもないし、少なくともスティールが卒業した後のことになるけど、でも、でもさ・・・」

すがるように、空の蒼が琥珀に迫る。

「ディーンに逢えたら、もうこちらには来る気がなくなるんじゃない？」

う、とスティールは返す言葉がなかった。

それは、そうかもしれない。

漠然とではなく、確信に近い気持ちがある。

それでも、それでもうシャールと会えなくなっても良いのかと言えば、それは絶対に嫌なのだ。

幼い頃からずっと傍にいるのが当たり前で、いつもいつでも一緒にいた存在。

好きとか嫌いとか、そんな言葉では表現できなくて。

ただ、当たり前のように常に自分とともにあるものだと信じていた。

今だって、ここは異世界だと、自分だけでは来る事すら出来ない場

所だと理屈では分かっていても、シャールに招いてもらうかリルフィにお願いしなければ来られない場所だと分かってはいても、ちゃんと解ってはいなかったのではないか。
例えばもう二度と会いたくないとシャールに言われれば、自分から会いに来ることは出来ない場所なのだと。

そう思い至った途端、ふにゃあ、と少女の顔が崩れた。
ぽろぽろと、透明の雫が両目から零れ落ちる。
「ス、スティール??」
まさか泣くだなんて思ってもみなかったシャールは、おろおろと手を振った。思わず犬のように頬を舐めようとしてハタと気が付き、自分のシャツの袖をぐいと引っ張りそれで頬を拭うため腕を伸ばす。

「なんで、そんな意地悪言うのよぅ」
えぐえぐと嗚咽を堪えながら、スティールはその腕を両手で握り締めた。
「あたし、ディーンには今度こそ幸せになって欲しいし、家族のぬくもりとか、友達と他愛ない会話とか、普通の子供だったらいっぱい受けて育っているはずの愛情を知ってほしいの。そんでもって、その輪の中にあたしも入りたいって思ってる。でも、それとこれとは別じゃない？シャールはあたしの大事な家族なのに・・・なのに・・・どうして来る気がなくなるなんて思うの？」

泣かせたかったわけじゃない。
でも、欲しかった答えも、もらえそうには、ない。
「ごめん。そうじゃないんだよ、そうじゃないんだ」
ふるふると首を振り、シャールは自分の腕を握り締めている手に、こつんと額をつけた。

実質のシャールの精神年齢は、人間では十二歳程度。犬の姿になっ

てからしばらくして、自我が消えてしまったから。
けれど、此処数ヶ月の目まぐるしい経験で、一足飛びに成長しているのは外見だけではないのだ。
今までは漠然とした家族愛だったものが、嫉妬を備えた恋愛感情に育ちつつあることを自覚しているのだった。
それでも、少女には幸せになって欲しい。
自分ひとりの我侭な独占欲で、ここに留め置くわけには行かないことは十分に承知しているし、両親も友達もいるあちらの世界を捨てることなど出来ないと、理解しているのだ。

それなのに、どうして僕は・・・！

「ごめん、さっきのは、なしにして」
無理矢理に、唇の端を持ち上げて微笑む。
「今度は一週間後に会おう？」
顔を上げたときには、もういつもの屈託のない笑みに戻っていた。
不可解そうに首をひねったスティールだったが、シャールがそういうのなら・・・とこちらも強引に納得したようで。
「そういえば、ヤツカの食堂で新作料理が出来たんだよ。お腹空いたから食べに行こう」
腕を握っていた手をとり繋ぎなおしてから、二人は腰を上げた。

はたして、スティールがそのほのかな恋心に気付くのはいつなのか。
まだ誰にもわからない。

Days 1

賑わっている図書館でも、専門書のコーナーではそれなりに厳粛な気分になるものだが、この学園の図書館は全館がセピア色に包まれており、何処か懐かしいような誰もが落ち着けるような不思議な雰囲気に包まれている。

数十メートルも上に積み上げられた書棚とそれらに収まっている書籍たち。棚と棚の間の通路は一メートル程しかなく行きかうには気遣いが必要とされるが、ここでまだ誰かとすれ違うということがなかった。通い始めて十年以上経つというのに。

スティールは、深海魚にでもなった気分で、ゆっくりと閲覧コーナーに向けて歩を進めていく。

朝からびっしりと授業が詰まっている高等部に比べて大学部は比較的時間にゆとりがあるのだろう、いつもローレンスの方が先に来てはカーペットに座りぼーっとしていたり本に目を通していたりする。昨日の突然の事態で「お付き合い」とやらをすることになってしまったわけだけれども、それがどういうことなのか今ひとつピンと来ないまま、すぐにでも会いたい気持ちと会ったらどういう反応をしたら良いのかと迷う気持ちの狭間で、心なし歩が鈍っているのだ。

通路が途切れ、書棚の陰からスティールはひょこっと顔だけ覗かせて閲覧コーナーを窺った。

果たして当の青年はといえば、いつかの時のようにまた仰向けに寝転び転寝に興じているらしかった。

額縁に収まれば天使の絵かと見まごうばかりのその姿に、恍惚と見入ってしまう。

天窓から差し込む二筋の光に柔らかく照らされて、白皙の美貌に漆黒の髪が彩りを添える。他の学生と同じとは思えないほどに着こなされたベージュのジャケットが、今は

赤いカーペットの上に放置されて、ローレンスはボタンを胸の半ばまで外したシャツの姿で寛いでいる。
もしかしたら自宅よりも寛いでいるかもしれないのだが、そこまではスティールには判断できない。ただ、この図書館をローレンスがとても気に入っているという事だけは痛いほど感じられた。そして何故か寂しくなるのだ。
そっと足音を忍ばせて、カーペットコーナーに上がると、自分も上着を脱いで軽く畳んで隅に置いた。
もうすぐ本格的な冬がやってくるけれど、空調の効いた館内では着ていてもなくてもどちらでもよいという微妙な温度設定になっている。ただ、寝ている間は肌寒く感じるのではないか風邪でも引かないかと少し心配になった。
しばらく考えてから少女はローレンスの上着を手に取り、体に掛けようとそろりとにじりよった。刹那、
「捕まえた」
肩からぐいと抱きこまれ、囁き声は耳元で聞こえた。
「ひゃうっ」
変な声を上げてスティールは青年の体の上に全体重を預ける格好になっていた。自分の顔のすぐ傍に青年の顔があるのが判るのだけれど、そちらには目を向けられない。自分でも赤面しているのがはっきりと判った。
「あああの、重いでしょ、えーと…その」
腕の中に青年の上着を抱えたまま、シャツ一枚を通して顔や手に体温が伝わってくる。以前ならそのことに対しては安堵感しか抱かなかったいうのに、どうしてこんなにどぎまぎしてしまうのか。
「あのね」
ローレンスは苦笑しながらまた耳元で囁く。柔らかなハイバリトン。
「誰も見ていないんだから、これくらいスキンシップさせて」
スキンシップ…そっか、これもスキンシップかぁ。

そこで納得するスティール。
そういえば、シャールともこうだし、それなら普通なんだね？
ここにリルフィは勿論いないので、相変わらず誰も突っ込みを入れてはくれないのだった。

規則的な胸の音を聞いていると、次第にスティールも落ち着いてきた。それを見計らったようにローレンスの手の平が少女の顔を包み、そっと視線が合うように向けさせてくる。
「会いたかったよ」
「…うん、あたしも」
それには素直に返答できる。会いたい気持ちに変わりはない。ただ、どうすればいいのか判っていないだけで。
さらりと青年の大きな手が少女の髪を撫でる。心地良いその手の平の動き。
「ねぇ、こないだもここで寝ていたけど、おうちであまり眠れないの？」
躊躇いがちにスティールは尋ねた。
「ああ、ちょっと睡眠時間足りない時期はこうなっちゃうかな。参ったよ、本当は人前で眠りたくはないんだけど、ここは居心地良すぎて」
複雑な表情のスティールを安心させるように柔らかく微笑む。
「大丈夫、ちょっと仕事が忙しいだけだから」
「仕事…」
束の間考えて、おずおずと切り出す。
「あの、それなら講義が終わったらあたしのこと待っていないで帰って少しでも寝た方がいいんじゃ」
「まさか」
眉をひそめて哀しげな表情になるローレンス。
「きみと会えなくなるなら睡眠不足で死んだっていいよ」
見開いた後に細められた深い紫の瞳。その瞳を見つめたままのステ

ィールの目にじわりと涙が浮かぶ。
「やだ、冗談でも死ぬなんて言わないで」
そうだった、この少女は自分の前世の男性と死に別れているのだ。
ローレンスは迂闊な己の言葉を悔いて、自責する。
「ごめん、僕が悪かった」
もう一度、両手で少女の頬を包み込む。
こくりと頷いて、瞬きした両目からぽたぽたと雫が降って来た。

何故か少女の泣き顔が懐かしい。
泣かせたいわけではないのに、泣き顔ばかりが印象的で。
本当はいつも笑っていて欲しいのに、どうして。

目の前で女性に泣かれることなどいくらでもあった。それら全ては胸に響かない日常の出来事だ。
出会って間もない少女の泣き顔を見るのは二度目。
一度目は同じように眠った振りをしている自分の傍らで、〈ディーン〉に向けて話しかけて涙を流していた。けれども今回は明らかに自分のせいで泣かせてしまった。そのことがローレンスの胸を締め付ける。

「ごめん」
もう一度謝罪して、体を起こしながら胸に少女の頭を抱き寄せた。
「泣かないで、僕も苦しい…」
「うん、あたしこそ、泣いてばかりで、ごめんね。なんかいつもかっこ悪いな、くしゃくしゃの顔で」
指で頬を拭いながら、スティールはばつが悪そうに言った。
「スティールのことが気になって仕方ないんだ。だから毎日でも会いたいし、出来るだけ長く一緒にいたい。これからどんどん好きになりそうな予感がしてる」
素朴で実直な言葉がスティールの胸に届く。

「放課後に会えないなら一体いつ会えばいいんだい？」

ああ、そうか…。

心の片隅で気に掛けていて、実は今日ローレンスに言おうと思っていたことがあったのだ。

けれど、この状況で口にして良いものかどうか、流石のスティールも逡巡した。

「そのことなんだけど」

迷いつつも、放っておくわけにもいかず口を開いた。

「実はあたし、今週ずっとクラブ活動さぼっててて…その、来週は毎日とは行かなくても出ようかなぁと」

ローレンスの方は呆然とせずにいられようか。

「あの、だから曜日を決めて…ね。またここで、その…週末は必ず来るから、他の日もちょっとサボるし」

やや焦り気味でスティールが言葉を続ける。そして返す言葉もないローレンスをちらりと見上げた。

「あの……ローレンス？」

今までは当然女性側が勝手に傍に来ていたので、自分の過密スケジュールにもさして疑問は抱いていなかったローレンスだが、いざ誰か一人と頻繁に会おうとするとそれがいかに難しいことか。講義の合間にも処理しなければならない業務をこなし、夕方の数時間を捻出するために睡眠時間も削って。それなのに、その夕方にも会えないといわれたら自分はどうすればいいのか。

尋ねなくても、週末の夜に外泊などもってのほかなのは自明の理。

そして休日は〈シャール〉と早朝から会っている…らしいのだけれど。

2

唇を軽く開けたまま呆然としているローレンスに、スティールの方も戸惑ってしまう。

「…駄目？」

元々約束して此処に集っているわけではなかったけれど。こうして毎日会っていると愛しさが募るのがわかっていて…それを今更会う間隔を延ばさなければならないなんて酷すぎる。

そしてハタと気付く。

付き合おうと言い出したのはローレンス自身。こうまで気にかかる女性ならば、とことん深く付き合ってみようと決めた。けれどそれは自分の一方的な思いで、少女は自分のことを〈ディーン〉だと思うから近付いてきただけだ。それでもローレンス自身にも好感情があるから付き合いを了承してくれただけで、まだ〈好き〉という感情は互いに発展途上。そして本来ならば友人として終わっていたかもしれない関係を、恋愛関係に変えようと決めたのは自分。ここでくじけていては、きっとこれから先もやっていけないに違いない。想われる一方の受身の立場でいたからこそ、今回のケースはいろいろと新鮮な気付きが多い。好意を逆手に相手を弄んでいたツケが回ってきたのかもしれないと、不意にそう思った。

知らず苦笑が漏れる。

「どうかした？」

黙ったきりの青年に対応出来ないで不安げな少女。普段口数の多い人間に囲まれていると、こういうときにどうしてよいか判らないのだった。それでも少女を抱きしめる腕は緩んでいないので、体を離そうにも離れられない。

「…そうか」
ようやく聞こえたのはそんな呟き。
「ローレンス？」
「うん」
ぐいと後頭部を持ち上げられて、上からは天使の美貌が被さってくる。渇き気味の唇を潤すかのようについばむように何度も口付けを重ね、舌を絡めては吸われ、スティールはぎゅうとローレンスの腕を掴んだ。
長い口付けの終わりに軽くついばむのはこの青年の癖なのか。しかし今日はそのまま唇がスティールの耳元に寄せられ、舌先が外耳から進入しようとした。

「ん…やっ。」
ぞくりと肌が泡立ち、吐息とともに漏れる声。
至近距離の淫らな音にぞくぞくと背中を駆け上がってくる何か未体験の感覚。
柔らかな舌先は耳朶とその裏もゆっくりと堪能し、腕の中で悶える少女を無視して最後にきつく耳の穴を吸い上げてから離れていった。
軽く息が上がっている少女が無意識にとろんと目を潤ませて青年を見上げた。

ああ、このまま連れて帰ることが出来たらどんなにか。
本気で思ってしまうが、出来ないことは判っている。そういう遊び相手ではないのだ。

「あの…い、今の…は？」
はふ、と息をつきながら脱力してローレンスの胸に体を預けるスティール。
「スキンシップ」
耳元でわざと軽く応えて。

これからは何でもスキンシップの一言で済ませてしまいそうな雰囲気だけれども、それで納得してしまうスティールにも困ったもので。会える時間が少ないならば、それなりに密度の濃い時間を。友人として他愛のない会話をするよりも、もっと親密になれるように仕向けたらよい。

ローレンスの決心には全く気付かないスティールだったけれど、先刻の件は了解なのかなとなんとなく納得して、
「えと、じゃあ水曜日と土曜日で…いい？」
「きみがそういうならば仕方ないね」
「なんかその言い方ひっかかる～っ。あたしだって毎日でも会えたらいいけど、物理的に無理っていうか」
「休日にデートは出来ないの？」

外で会うのは立場上かなり難しいと判っていて、そして少女の行動パターンも知っていてそうもち掛けてみる。見ず知らずの、しかし頻繁に話題に上る〈シャール〉に嫉妬しているのだと自分でも解っているのだ。
もしも休日にゆっくり会えるなら、会えないほかの日に死に物狂いで仕事を片付けるだろう。

「休日は…だって…」
案の定スティールは言い淀んだ。
しかしよく考えてみたら、休日の丸一日早朝から夕暮れまでを丸々シャールと過ごしているわけで。それはスティール本人にとっても心地よい時間で長く感じられるわけではないけれど、それに比べてローレンスといられる時間はとても短いようにも思う。

「妬けちゃうなあ」
悩んでいる様子を感じてローレンスは苦笑した。

「僕がスティールの一番になりたいんだよ」
「ほぇ？い、一番？？」
何とも間の抜けた返事に、ローレンスはどうしようもなくなってしまう。そこら辺も説明が必要ならしい。
「そう、一番。シャールとも誰ともさっきみたいなスキンシップはしないでね？」
「え」
かあぁーっとようやく赤面して。これでようやっと理解したのだろうか。
「スティールが困るだろうから、他人には秘密だけど…僕が彼氏なんだから、他の人とはしちゃ駄目。」
念の為言葉を添えて。
スティールの方は、湯でも沸かせそうなほどにかっかと顔を火照らせている。
「彼氏っ」
「彼氏でしょ？昨日付き合おうって、うんって返事してくれたじゃないか」
「あーうん、勿論そうなんだけどっ。なんか言葉にすると恥ずかしいっていうか、照れくさいって言うか…あーそっか、そうなんだぁ～っ」
こうまであからさまな態度と言葉で伝えてようやく認識してくれたとは。
言って良かったと、心からローレンスは思った。

3

「ところで、そろそろ出てきてくれたらいいんだけど。アンジェラ」
不意にローレンスが呼びかけて、驚いたのはスティール一人。
「やはり気付かれていましたか」
苦笑しながら美人秘書が書棚の陰から姿を現す。くっついているのが恥ずかしくて慌ててスティールは離れようとしたのだけれど、ローレンスは腕の中から出してくれない。

「すみません、あまりにも微笑ましかったものですから」
肩を竦めて、
「それにローレンス様の本気も見たかったし」
にやりと含みのある笑みを浮かべられて、少女はどうにも居たたまれない。穴があったら入りたいとはこんな心境のことか。

「時間はまだいいだろう？」
ちらりと腕時計を確認してローレンスが問うた。
「はい、今日は問題ないです。私の個人的な興味です」
パンプスは脱がずに、アンジェラはすっとカーペットに腰を下ろした。優雅に膝頭を揃えたまま。何ともない仕草なのに、スティールは感心してしまった。
「ごめんなさいね、お嬢ちゃん。それと先日はありがとう、あなたにはまだ直接お礼を言っていなかったわね」
端末を返却するついでにスティングには会っているが、スティールには会っていなかったのだ。
「い、いいえっ。とんでもないです」
いい加減離して欲しいなーと思いながらもふるふると首を振るスティール。ローレンスは秘書の前では遠慮するつもりはないらしい。
常に人目にさらされて生活しているとこうなってしまうのだろうか。

「問題ないなら席を外して欲しいんだけど」
なにか続きがあるのだろうか。ローレンスが口を挟む。
いつから垣間見られていたのか、そしていつからそれに気付いていたのか。全く遠慮のない上司と部下である。

「あら～いちゃいちゃしたいのは良いんですけれど、私が席を外してももう無理そうですよ？」
それを知らせるためにわざと入ってきたのか、すぐに入り口が開閉する気配がした。つかつかと革靴の音が近付いてくるのが判り、今度はローレンスも腕を緩めてくれたのでスティールは広い胸から顔を離して座り直した。
一旦別の方向へと向かった来館者は、足を止めることもなく今度はこちらに向かってやってくる。その姿が見えたとき、うへえとスティールは顔を顰めた。

「やあ」
ひょっこり覗いた顔を認めていち早くローレンスが声を掛けた。
「あ、こ、こんにちは。一緒に居たんだ…」
驚き顔で閲覧コーナーに現れたのはスティングだった。様子からしてスティールを探していたらしい。
この週スティールは全く調理室にはおらず、サンドラに尋ねたら図書館に通っているという。流石に週末になったので一体何をやっているのかと確かめに来たところだった。

しかしいざ探し当ててみれば、ローレンスと一緒にかなり寛いだ様子でしかも親しげにくっついて座っている。スティールは胸から顔を離して距離を取ったつもりでも、彼女の基準と外野の視線はまた違ったものになる。少なくともスティングにとっては、ランチ以来少女が青年と交流があるとは思ってもみないことだったのだ。

「もしかしてあたしのこと探してたの？」
なんとなく後ろめたい気分でスティールは少年を見上げた。とはいえ、その後ろめたさの理由は判っていない。
「ああ、まぁな…」
スティングの方も居心地悪そうだ。見てはならないものを見てしまったような、それでいていいところに来たような。しかもこうして立った状態だと、腰掛けているアンジェラの胸元が丸見えでついつい目が行ってしまう。本能とは恐ろしいものである。

「今日のサンディのオレンジケーキ、美味かったぞ」
何を言えばいいのか迷いついつい軽口を叩いてしまう。
「そりゃそうでしょうとも。あたしだったらどうせ焦がしてるわよ～。って、そんなこと言いにわざわざここに来たの？」
案の定むうっと口を引き結ぶスティール。
「クラブさぼりすぎだろ」
「わかってるわよ～。来週からはちゃんと行きますー。もう、なんでスティングにあたしの行動管理されなきゃならないわけ？」
ますますむっとした少女に内心焦りながらも、
「幼馴染みとしての義務だ！お前が不真面目にしてたらオレだっておばさんに顔向け出来ないだろ」
売り言葉に買い言葉でどんどんエスカレートしてしまう。
「スティングに不真面目だなんて言われたくないもん！」

ぐぬぬぬぬ、と睨みあう二人に、すっと腰を上げたアンジェラが割って入る。
「まあまあ、いいじゃないのたまには。毎日勉強とクラブ活動に明け暮れなくても、他にも色々楽しみはあるじゃない」
スティングの方に体をぐいと寄せてくるので、思わず一歩退いてしまう少年。
「ねぇぼうや？」

艶やかな唇が艶然と微笑みかけ、ボリュームを抑えて低く語りかける。
「私のカラダ、気に入ってくれたでしょ？そんな固いことといわないの」
ごくりとスティングの喉が鳴る。やはり視線はついつい胸元にいってしまう自分が情けない。
うふ、とアンジェラは首を傾げて人差し指で少年の首筋を撫でた。
「別のところが硬いのは大歓迎だけどね」
うわこんなときに言わなくても！と何故か赤面して慌てた様子のスティングに怒りを収めた少女は首を捻っている。
隣ではローレンスがくすくすと笑っているが、アンジェラとスティングの間に何かあったのだろうか。

少し思案して、ここで会ったのも一つのきっかけだと決心する。いつかは言わなければ隠し通せる相手でもない。
「あのね、スティング」
アンジェラにからかわれて狼狽しているスティングにスティールの爆弾発言が投下された。

「あたし、ローレンスとお付き合いしてるの」
ぴたりと動きを止めたスティングが、今度こそきっちりと秘書から視線を外して驚愕の眼差しを向けた。

4

「……は？」
何拍か置いてようやく出たのは気の抜けた声だけで。
恥ずかしそうに頬を染めながら、しかし生真面目に少年の目をしっかりと見つめているところをみると、冗談でもなんでもないらしい。
支えるように少女の腰に当てられた青年の手の平にも気付いてしまった。
「隠しても仕方ないからスティングにだけは言っておくね」
「だけって、そんなところで信頼されても」
へたへたと腰が砕けそうだった。気付いたアンジェラに促されて、スティングもカーペットに腰を下ろした。

「信頼してるよ。ただ、他の人には当面秘密にしておいて欲しい。僕は声を大にして広めてもいい気分だけど、彼女に迷惑が掛かるから」
ローレンスが話に加わった。
青年の立場を考えると、世間体より何よりマスコミによる騒動やら他の生徒からの風当たりやら色々と考えられる。今まで来るもの拒まずでいたのを知っている元の学園の生徒たちならしばらくは静観してくれるかもしれないが、こちらの学園ではまだローレンスの人となりはそれほど知られていない。ステディな関係だと知られると何が起こるか判らないのだ。

「って…じゃあもしかしてローレンスさんからこいつに申し込んだとか？まさか…っ！
こいつなんてアンジェラさんに比べたらペチャパイだしちんくしゃで天然ボケで恋愛っていう言葉からは一番程遠いというか」

言葉の途中で少女の両手の親指が喉仏に添えられた。
「当たってるかもしれないけど腹立つ〜！！」
目が半分据わっていた。
「Cカップあるから標準だよ？」
さらりと笑顔でローレンスが告げ、スティールは思わず手を離して自分の体を抱き締めた。
「ええええっ！なんでサイズがっ」
「えっこいつBでしょ」
スパーンと後頭部をはたかれるスティング。

「ちゃんと測ったらCだと思うよ？今度僕が開発した形状記憶ブラプレゼントするね。アンジェラも着けているけど、最初だけちゃんと他の人に支えてもらって綺麗な形憶えさせたら、肩紐なしで下から支えてくれるんだ。縫い目もないし評判いいんだよ」
「ええ、今も着けているけど、何も着けてないみたいに体にフィットしてそれなのにしっかりリフトアップしてくれる優れものよぉ。もうすぐ市場に出す予定」
すぐに営業トークになってしまうのがある意味絶妙のコンビネーションだった。

「支えてもらうんだ？」
今まで特に気にしていなかったので適当につけていたスティールは今ひとつ理解していない様子だ。
「僕が着けてあげるから大丈夫」
にっこり笑うローレンス。
「え？」
「ダメダメっ！お母さんに着けてもらえーっ！」
何故ソコまで必死になる？スティング。
それにしてもどんどん話がずれていっているような気がして、ステ

ィングは今度はスティールの方を向いた。
「お前こそ、こないだ『ディーンはシャールと同じくらい好き』って言ってたじゃねえか。そのディーンとやらはいいのか」
質問というより念押しするような口調だった。

「だって…」
一気に空気が凪いだ。
「スティングにちゃんと説明してなくて誤解させてたみたいでごめんね。ディーンはもういないの、亡くなったの。シャールとあたしを助けて、あたしの腕の中で…息を引き取ったのよ…」
少年は息を呑んだ。

勝手にシャールの新しい飼い主だと思い込んでいたけれど、そんな重い事情があったなんて考えもしなかったし、そう悟らせるような態度をスティールは取ったことがない。
ただ、ある時期を境に急に大人びて綺麗になってきた。
まさか死に別れていたとは。

涙を流すのを必死で耐えた少女は、まっすぐにスティングを見つめた。
「信じてはもらえないだろうから軽々しく口に出来なかったけど、ディーンは転生してローレンスとして生まれ変わった。記憶がなくても、あたしには判るの。ローレンスはディーンよ」

スティングは本気で返答に困った。今までも突拍子のない事を言う少女だったが、ここまで奇想天外なことを言い出したのは流石に初めてだった。
「でもそれって変じゃねえ？転生したなら、まだ赤ちゃんか子供だろ？」
「時間軸は関係ないって、遡るからって、あたしと同じ時を生きる

って約束してくれたの」
「で、でもさ、そんなのすぐには信じられないっていうか」
あんたはそれでいいのかと、スティングの瞳がローレンスに問い掛けた。

「僕はね、正直まだ半信半疑なんだよ、それについてはね」
青年の瞳は穏やかで、隠しきれない少女への好意が秘められていて。
「でも、前世なんか関係なく僕自身がスティールを気に入っている、そのことは事実で変えようがない。全てひっくるめてスティールを好きなんだから、何も問題はないだろう？」
秘書は興味深そうに三人の様子を見守っている。
「僕が今後ディーンの記憶を取り戻すまで、事の真偽は判りようがない。〈ディーン〉が本当に僕の前世だったとしてもそうでなくても、スティールがそうだと感じるならそれでいい。僕がローレンス・シュバルツだというのも変えようがない事実で、いつか僕自身を〈ディーン〉より好きになればいい」
後半の言葉は少女に向けられていた。
スティールの方は、青年の言葉をゆっくりと胸の内で噛み締めていて、きちんと理解するまでに時間は掛かりそうだったけれど。

「そっか」
幼馴染みという立場の少年からは、もう何も言うべき言葉はなかった。
以前に告白してさらりと流されて。
その後に自分は『シャールの次に好き』と言われた。
それならば『シャールと同じくらい好き』な〈ディーン〉であるローレンスに到底勝ち目はない。
自分の〈好き〉が軽く流されたのに、会って間もない青年が一体どんな言葉を掛けて恋愛音痴の少女に恋愛相手として認識させたのかは気になるところではあったけれど、聞いたところで自分の傷口に

塩を塗りこむだけだろうから。

はぁーっ。大きく溜め息をついて、腰掛ける際に曲げていた膝の間に頭を垂れる。

何もかもが突然で、良く知っていた筈の少女がまるで別人のように大人びて見えた。こんなにずっと近くにいて…いたはず、なのに。いつの間にかそんな大きな事件が起こっていて、その時に甘えてもくれなければ心配もさせてもらえなくて、一人で立ち直っていたらしい。こんなにも強かっただろうか、スティールは…。

決定的な失恋をしたことよりも、そのことの方が哀しかった。きっと誰にも相談できずに小さな胸を痛めていたのだろうけれど、信頼に足る存在だと認識してもらえなかった当時の自分も不甲斐無い。

今日になってようやく信頼されて打ち明けてくれて、それはそれで嬉しいけれど、それでも自分が情けなくて、スティールのことを恨んでしまいそうで胸の中がざわざわと苦しい。

そして、それを見守るスティールにはその胸の内は推し量りようもなく、ただ、普段煩いくらいに軽口ばかり叩いている幼馴染みが押し黙って項垂れていることに驚いていた。

「あの～、スティング？どうかした？」

男女の機微を多少なりとも理解しているローレンスとアンジェラは苦い吐息をついた。

「なんでもねえよっ！」

がばっと顔を上げ、「はいはいわかりましたよっ」と立ち上がる。あちこちはねさせている明るい茶色の髪をがしがしと掻き回して、「今日聞いたことは他言しない。約束する。んじゃーオレ帰るわ」そういい置いて、その間顔を見ることもせず、そしてもう振り返りもしないで足早に館外に立ち去ってしまった。

「なんか、スティング怒ってる…？かな」
心細そうにスティールはローレンスを見遣った。
「いや怒っているわけじゃないだろうけどね、まぁ長い付き合いの彼なりにいろいろと思うところはあるんだと思うよ」
そっと伸ばされた腕が、再び少女を抱き寄せた。
「きみは普段通りに接していたらいいよ」
「そうかな？やっぱりあたしの言っていること、普通は信じられないことだよね…」
うん、仕方ないんだけどね…そう呟きながらも寂しそうな表情は隠しようがない。
「僕は信じているよ。話の内容は破天荒だけど、それを信じているきみを信じてるから、だから安心して、きみは僕だけを見ていたらいい」
「そ、そんな風に言われても～っ」
スティールは口をぱくぱくさせて赤面している。
「私はそんな自信満々のローレンス様に一生ついて行きますわ」
すぐ傍からは美人秘書の合の手が入る。
「勿論アンジェラもずっと僕の元にいればいい」
爽やかに笑いながら、何処までが本気で何処からかは少女を安心させるための軽口なのか。

閉館十分前の音楽が鳴り始めた。
今日はアンジェラも同席しているため肩を並べて歩いてもさして問題はないだろうということで、三人は駐車スペースまで一緒に歩いた。
別れ際に、
「それじゃ、明日はくれぐれもシャールとはほどほどに」
ローレンスはきっちりと念を押してスティールのリニアカーを見送った。
案外嫉妬深いタイプなのかもしれなかった。

きみのためにしたかったこと　1

虹彩がみるみる金色に染まっていった。
ごお、と風が唸る。つい先刻までの晴天がまるで嘘だったかのように、山の向こうから風に乗ってやってきた分厚い雲に覆われ、辺りは瞬く間に黒くなった。
『〈君〉の力が暴走したのか』
呆然とジルファが呟き、風に飛ばされぬように少女の肩に舞い上がってきた。
「シャール！　やめてっ！　しっかりしてっ」
風圧に負けて閉じてしまいそうな両目を腕で庇いながら、スティールは少年に近付き、その肩を掴んでしっかりと目を合わせた。
草原に咲き乱れていた花も綿毛も散り散りに吹き飛んでいく。もう片方の肩に止まったリルフィも厳しい表情だ。
「どうして？　スティールも、僕から離れるの？　僕を…捨てるの？」
最早瞳孔も判らないほどに金色に輝く瞳が、眼前の少女をぼんやりと見据えて呟いた。縋るように。
「そんなことあるわけないでしょ？　あたしは今までもこれからも、ずっとずっとシャールの味方だよ。毎日は傍には居られなくても、大好きだから」
だからお願い、もうやめて、ちゃんとあたしの話を聴いて。
今日初めて、ぎゅう、とスティールはシャールを抱き締めた。
あたしはここにいるよ。だから落ち着いて。そう願いを込めて。

休日の朝は特に早起きなスティール。約束通り今回はジルファと

リルフィも一緒に、いつもの河原にやってきて結節点から〈銀の界〉へと界を渡った。
移動しながら、ジルファの表情は冴えない。
『やはりな…相当揺らいでいる』
『そうね、ちょっとマズイかも』
それについてはリルフィも異論はないようで、二人して重々しい吐息をついた。
いつも通りにバスケットを下げたスティールの歩も、いつもほど軽やかとはいかないようで、昨夜何事か考えていたからその関係かしらとリルフィはそれも心配していた。
移動時間は体感にして数瞬で終わる。ぽん、と草原に躍り出たスティールは、立ったまま空を見上げていた銀糸の髪の少年に歩み寄った。
「おはよう、シャール」
にっこりといつも通りの満面の笑みで、しかし両手で握ったバスケットの持ち手を緩める気配はなかった。
「おはよう」
いつもなら言葉より先に抱擁されるのに、意表を突かれたシャールは目をぱちくりさせていたのだけれど。少年の中でも、抱き付かれなくて安堵する思いと常とは違う行動を訝しく思うのとごちゃ混ぜで複雑な心境だった。
スティールはといえば昨日ローレンスに言われた『ほどほどに』スキンシップするということが難しくて、取り敢えず抱きつくのはよそうという殊勝な心がけだったのだけれど。
「今日はジルファさんとリルフィも一緒なんだね」
首を傾げる少年の上を、青い鳥が旋回した。
『ちょっと気になることがあるものでね。スティールと適当に遊んだ後でいいから、少し私にも付き合ってくれないかい？』
尋ねているようでいて、有無を言わせぬ言葉の強さだったので、シャールは表情を固くして頷いた。

『なにそんなに緊張することはないさ。訓練のおさらいだよ』
「わかりました」
もう一度こくりと頷いて、頬を緩めた。
「あのねシャール、今日のは自信作だよっ」
場を和ませるためにわざとのタイミングなのか、少女はぐいとバスケットを少年の胸元に押し付けた。
「林檎のパンケーキ」
起きてすぐにそれを焼いて両親の朝食用にとテーブルに並べているところを見ていたリルフィとジルファはちらちらと視線を交わして苦笑した。

これって小さな子供でも作れるもの、なんだけどねぇ。

いやいや焦がさなかっただけでも僥倖だよ？　なんといっても生地を入れる前に薄切り林檎を焼く時点で以前は黒焦げにしていたからね？

藤の籠を開けるとふんわりと甘酸っぱい香りが漂った。
「わあ、本当だね。とても綺麗にキツネ色に焼きあがってるよ」
朝食がまだだったからと、その場に腰を下ろしてシャールは食べ始めた。
よかったぁ～とかいっぱい食べてね、とか声を掛けながらいつもより少し間を開けてスティールも草の上に座って見守った。
二羽の鳥も草の上に降りて足の上に体を載せて寛いだ体勢をとった。
スティールは今週学校であった出来事などをおもしろおかしくシャールに語り、シャールもそれに適当に相槌を打って笑い合っていたのだが…
「それでね、あたしシャールにもちゃんと言っておかなくちゃと思って」

急に真剣な眼差しをしたスティールに少年の心臓が大きく跳ね上がる。
「な、なにかな」
食べ終えた両手で服の上のパン屑を払い落としながら、気を引き締めた様子だ。
「あのね、あたし今ローレンスとお付き合いをしてるの」
「お付き合いって」
ずっとスティールと一緒にいただけのシャールならば、その言葉の意味も良く判らなかっただろう。けれど、〈狭間〉から〈銀〉に移り住んだとはいえ、社会人として生活していれば…。
「まさか、ディーンの記憶が戻ったの？」
唇の震えを悟られてはならない。
僕が心の中で願っていることなど、最愛の少女に知られてはならない。
ううん、と首を振ってスティールは説明した。
「ローレンスの方から、あたしと付き合いたいって。ディーンのことを知っていて、そういう事情もひっくるめてあたしのことが好きだからって」
あああ、今こんな状況のときにそんなことシャールに言うなんて。
そんな馬鹿正直なところが少女らしいのだけれど、鳥たちは目を見張った。
「だから、あたしもローレンスのこと好きだし、お付き合いしてもいいかなって」
その時、突風が吹き荒れた。

「シャール、お願い、あたしの話最後まで聴いて」
呼び掛けても、シャールの心には届いていないのか。
「どうして…僕のこと、見捨てるの？　嫌だよ、行かないで、スティール」
金色に輝く瞳は、瞬きすらも忘れたかのように大きく見開かれていて。
怖い。
スティールは、生まれて初めてシャールに対して恐怖を感じてしまった。
初めて人の姿のシャールと相対したときにもそんな感情は生まれてこなかったというのに、そう感じてしまった。そしてそれを敏感に感じ取ったシャールの心も更に固く閉ざされていく。
「シャール…っ」
もう何を口にしても、言葉では伝わらないのだろうか。スティールは抱き締める腕に力を込め、リルフィとジルファは巧みにバランスを取りながら、肩から落ちないようにしていた。
「シャール、どうしたらあたしのこと信じてくれるの？　大切な家族のままじゃ、駄目なの？」
真実以外に、スティールが口に出来る言葉はない。
「ずっとずっと、シャールが駄目って来るなっていうまで、毎週此処に来るから。それじゃあ駄目なの？　シャールはあたしにどうして欲しいの？」
その答えは、シャールの中でははっきりしているのだ。
ただ、少女が〈狭間の界〉の住人で、自分が〈銀の界〉の君の血

を引く唯一の者であるがゆえに、未来永劫叶うことのないであろう願いなことも理解していて。
それでも、願ってしまう。夢見てしまう。
抑えきれない気持ちが、力を伴い暴走して。
『いけない、こんな使い方をしていたら、ディーンの二の舞になるわよ』
リルフィが警告した。
天候を操るのは自然の摂理に逆らうもっとも危険な使い方だ。雲を少し動かして限られた地域を晴天にするくらいならば問題ないが、遠方から無理矢理雨雲を呼び嵐を作るなど以ての外である。
それでも、まだ少女には『お願い』されていないため、リルフィには何も出来ない。ジルファも勿論だ。〈銀の界〉が滅亡するかもしれないという緊急事態だったため、以前にはその体を通して〈金の君〉の力を行使したけれど、今回はそれほど切羽詰っていないため、全てはスティールに委ねられている。

さあ、どうする？　スティール。

無言の問いに、少女の右手が閃いた。
ぱしんと軽い音と共に「ごめん」と謝って。
シャールは目を瞬かせると、そっと左手で頬を押さえた。ほんのり薄紅色に染まった頬。初めて誰かに叩かれたのだろう、何が起こったのか判っていない様子だったけれど、その両目が僅かに正気を取り戻した。
「シャール、あたし、ずっとずーっと好きだよ？　だから…そんな哀しいこと言わないで。シャールと誰か他の人なんて、比べられないんだよ？」
スティールの目には涙がにじんでいた。
そしてそっとシャールの頬に唇を寄せた。右に、左に、そっと労わるように優しく。

「お願い」
その声が伝わったのか、シャールの目蓋が落ちた。
ぱたりと風が止み、暗雲はまだ頭上にあるものの、雲は支配から逃れゆっくりと山の方に移動を始めたようだ。
そしてがくりとシャールの体から力が抜けて、少女の方へ倒れこんだ。
咄嗟にリルフィとジルファは舞い上がったものの、スティールにも支えきれず一緒に草の上に横倒しに倒れる。
スティールはすぐに両手をついて体を起こしたが、シャールの方は動く様子がない。完全に意識を失ってしまったようだった。
「シャール？　どうしたの、シャール！」
肩を揺する少女にジルファが声を掛ける。
『問題ないよ。力の使い過ぎを防ぐために無意識に意識を手放したんだろう。あとはちょっと疲労のせい、かな』
ふわりと今度は地面に舞い降りて。
『やれやれ、それにしてもこの子もまだ放っておくわけにはいかないようだね』
翼を竦めると、お嬢ちゃんちょっと失礼するよとスティールにウインクした。

『金の界を統べる御方は偉大なり。その血を分け与えられし我ジルファード・コンクラウスが伏して願い奉る。今ひと時真実の姿を我に与えたまえ』
瞬きするほどの間、ジルファは金色の光に包まれた。
そして、気付いたときには長い金糸の髪を腰まで垂らした細面の男性が目の前に立っていたのだ。
煌く緑の瞳が、スティールにウインクを寄越し、爽やかな肉声が耳に届いた。
「やあ、この姿では初めまして？　鳥の姿のままだと彼を運ぶことも出来ないからちょっとだけ失礼するよ」

『あーもうあんたって…』
空に舞ったままのリルフィは盛大な溜め息をついた。
「じ、ジルファさん、とっても美形〜っ！」
大きく口を開けて、少女は素直に賞賛し、まんざらでもなさそうにジルファは微笑んだ。身長はローレンスと同じくらいだろう、結構高い。細い顎とすっと通った鼻梁が鋭利な印象を与えているが、表情が人間臭くて万人に好かれそうな顔立ちだ。
『そうねー顔だけはイイかもねー』
棒読みでリルフィが呟いている。
「リルは？　元の姿にならないの？　美人なんだろうなぁ」
きらきらと瞳を輝かせて見上げられて、リルフィはたじろいだ。
「そうとも、そりゃあ美人だよ！」
満面の笑顔でジルファが頷いている。
『いやあよ、たまたま〈金の界〉で会った時以外に、こいつと人型で同席なんかするもんですか』
「「ええーっ」」
二人とも至極不満そうな声。
『あーやだ。何言われてもぜったいお断りっ』
ばさりと大きく羽ばたくと、
『それじゃあ私は一足お先に下宿先に行ってるわね』
とさっさと町の方へ飛んでいってしまった。
「ほんとにリルってば、ジルファさんには冷たいね…」
ぼそりと申し訳なさそうにスティールは見遣った。
青年姿のジルファは「いつものことだよ」と歯牙にもかけない様子で、よいしょとシャールを背負った。

2

なんだろう、体が重い。
ゆるりと目蓋を持ち上げると、見慣れた木目の天井が視界いっぱいに広がっていた。相当遅い時刻なのか、室内も窓の外も暗い。ただ、ベッドサイドのテーブルに置かれたランタンの仄暗い灯火と、窓から差し込む薄い月光だけが光源となり、ここがシャールの間借りしている自室であると知らせていた。
全てが夢の中の出来事であったかのように、記憶は曖昧だった。
しかし、一番思い出したくないことだけは、はっきりと憶えていて、その事実だけが胸をえぐりきりきりと痛む。

一番無くしたくないものを奪われた痛み。

スティールがずっと僕を呼んでいた。
もう、僕なんて要らないくせに。どうしてそんなに必死な顔で呼ぶの？
捨てるなら、どうしてそんな哀しそうな辛そうな顔をするの？

皆、あの後どうしたのかな、流石にもう帰ったかな。どうやら丸一日過ぎてしまったらしいし…。
体を起こそうとしてようやく、左手に温もりがあることに気付いた。視線を送ると、床に座り込んだ紅茶色の髪の少女がシャールの手を握ったまま浅い寝息を立てていた。
「どうして…」
掠れた声が漏れた。
「ん…シャール？　目が覚めたの？」
眠りが浅かったのか、すぐに少女が応じた。顔を上げて、自分の手をシャールの額に当てて、熱がないことを確認する。

「良かった〜。身動き一つしないでずっと気を失っているから、どうしようかと思っちゃった。運んでくれたのはジルファさんだよ。後でシャールからもお礼を言ってね？」
心から嬉しそうに笑うから、つられて少し唇の端が持ち上がってしまう。
「ジルファさんに会ったらびっくりするよ〜！　今ね元の姿に戻っているから。あ、言わないでびっくりさせたら良かった！　失敗失敗」
えへへ、と照れ笑いして。

あの時、僕のことを怖いと思ったでしょ？
どうしてそんな、何もなかったみたいに笑うの？

「……どうして帰らなかったの」
月の位置からして、深夜より少し手前くらいだろう。
こんなに遅くまで家に帰らずにここにいたのは勿論あの時以来で。所謂無断外泊になってしまうのではないだろうか。
心配してしまう自分も自分で。
もう他の男性のものになってしまった少女のことなど、心配したくないと思うのに。
「あんな状態のシャールを放っていけるわけがないでしょ」
半ば憤然とスティールは答えた。
ねぇ、今ならちゃんと聴いてくれる？　あたしの話。
曇りのないまっすぐな瞳で見つめられて、シャールは目で頷いてから体を起こした。重くてけだるいので、クッションを背に当ててベッドの頭に凭れ掛かり話を聴く体勢を整えた。
それを確認して、スティールはベッドに腰掛けてシャールと目の高さを合わせた。
「あのね、あたしは確かにローレンスとお付き合いすることにした

けど、だからってどうしてシャールをないがしろにしたりすると思うの？　前にシャールが言ってくれたね、一緒に暮らそうって。あたしは、即答できなかったし、今でもそれに対しては出来るとも出来ないとも返事が出来ないよ。
逆に…もしも、もしもだけど、そんなこと言わないだろうケド、ローレンスに今そう言われてもあたしには返事が出来ないよ。
だから、誰か一人だけ選んで大事にして他の人のことはもう捨ててしまうとか、そういうことじゃないんだよ。
犬の姿のときもそうだったじゃない。学校ではスティングや他の友達と遊んで、キャンプで何日も家を空けるときもあったし、そんなときもシャールはずっと家で待っていてくれたよね。
あたしには、お父さんもお母さんもそしてシャールも……皆大切な家族なの。他の誰とも比べられないの。だから、そのことだけは、絶対に忘れないで。
シャールのお母さんが命がけでシャールを護ったみたいに、あたしもシャールを護るよ。だって…こんなに愛しているから」

胸の奥がじわりと熱を帯びて。目の前の少女は目を潤ませながら、切々と語っていてその内容はこの上もなく暖かくて。
それでもまだ、どうして胸が苦しくて痛いの？

「あは、なんか他に上手い言葉がみつからないや。何度でも言うよ、あたしはシャールが好き。誰とも比べられないし、比べたくなんかない。」
今度こそ本当に伝わっていて欲しいと願いながら、指先で眦を押さえてスティールはシャールの表情を窺った。

「ありがとう」
今はそれしか言えない。
今はそうやって自分を納得させるしかないのかもしれない。

もやもやはずっと胸の奥でわだかまっていて、ふとした拍子にまた表面に出て来てしまうだろう。けれどもそれは解消されることのない不満なのだ、きっと。

スティールの方もシャールにきちんと伝わったとは思えていないようで、不安げに柳眉を寄せた。でももういくら探しても、自分の中にはこれ以上の言葉が見つからない。

うん、と気持ちを切り替えるようにスティールは両手でぱしんと膝を叩いて立ち上がった。

「お腹、空いたよね？　晩御飯のスープ温めなおしてくるね」

木の扉を開けて、足音を忍ばせて出て行ってしまった。

しばらく閉じたままの扉を見つめていると、またゆっくりと内側に開いた。

「失礼するよ」

どちらかというと冷たい月光を、きらきらと暖かい光に変えて、長身の青年が入ってきた。ゆとりのあるシャーリングの入った純白の上下の衣に、金と赤の刺繍が入った腰布を巻いた男性は、一目でジルファであると判明して、シャールはのろのろと頭を下げた。

「ご迷惑をお掛けしました」

言葉ほどには謝罪の心がない声だったが、ジルファはまるで気にしていない様子で笑みを浮かべて近寄ってきた。

「調子はどうだい？」

「だるいけど…他は別に」

普段よりも言葉少なに、そして口調も固くなっている。自分でも判っていたけれど、愛想笑いも出来なかったし、したいと思わなかった。

あれほどまでに笑みを絶やさずここまでがんばり続けてきた少年の変わりように、ジルファも胸を突かれた。あの虹の下でスティールと抱き合って泣いて、それ以降はまた涙も苦しい顔も見せなかっ

たシャールが、今日のあの言葉だけでどうしてこうも変貌してしまったのか。
いや、勿論ここまでくるにはいろいろと段階があったはずで、それは少女との会話の端々に出てきた二人だけの邂逅の場で積み重ねられてきたのだろう。
ここまで頑なな態度を取られると、本当は少しショックで。それでも今のスティールの内心を思い遣ると己の出来る事はしなければと、ベッド脇に立ったままジルファは毅然とシャールを見下ろした。
「きみはスティールが好きなんじゃなかったのかい？」
どういう意図か図りかねて、唇を引き結んだままシャールは青年を見上げた。　まっすぐな金糸の髪が闇の中に輝く。それ自体が光源であるかのように。

「少なくとも〈狭間〉からこちらに移って来た時のきみは、あの娘の幸せを願って、自分の危険を顧みずに生きていた。そしてあの娘も、自分のあれこれなど全て放り出して、きみに会う為だけにここにやってきた。けれど」
眼光が鋭く少年を射抜いた。
「今のきみは、あの娘の気持ちなどまるでお構いなしだ。自分だけを見て欲しい、傍にいて欲しい、そうでないならば壊れてしまってもいい。」
意識を手放すのがあと数瞬遅かったならば、シャールがスティールに手を掛けようとしていたことを〈金の界〉の青年は気付いていたのだ。
「そうしたらきみは、間違いなく父王の後を追っていただろう。」
きみは再びあの娘の命を奪うつもりだったのかい？と。それは言葉にはせずに、瞳で告げる。
「あの娘は、本当にきみのことを心から案じている。きみの母親のように。それは無償の愛情だ。ねぇシャール、同じだと思わないかい？　お母さんは、〈銀の君〉を愛していたけれど、その愛するも

のを切り捨てて自分の命を捨てても、きみの安全を優先した。そして最後には二人で旅立って行った。きみはあの時に、お母さんを恨んだりはしなかったはずだ。」
「あの時と…今は違います。母とスティールも全然違います」
シャールは、ぎゅうっと掛け布を握り締め、強引に視線を外してその手を見つめた。
「僕は…それでもやはり、僕の傍に居ないことがこんなにも辛いなんて、思っていなくて。もう以前の僕には戻れない」
「そうかい」
ふーっと大きく息を吐いて。
「私事だけれどね、私は、そりゃあリルフィに好かれたいと思っているよ？　けれど、私が彼女を好きだという事さえ伝わっていれば後は運を天に任せる気持ちだね。
彼女が私を好きになれば最高だ。だけど他の誰かと結婚したりしても、それで私が彼女を思う気持ちに変わりはない。幸せになってくれたら、それでいいと思う。それが私の手ではなくて、他の誰かの手で与えられるものでも、彼女自身が掴み取ったものでも。」
一拍置いて、やや軽い口調に変わる。
「まぁね、仮に結婚したとしてもだよ、離婚するかもしれないしその時にようやく私の良さに気が付くかもしれない。ましてや学生同士のお付き合いなんてねぇ。早い人は数日で別れたりくっついたりするものじゃないか。そんなに悲観的になるような出来事でもないよ？」
ははは、と空を吹きぬける風のように軽やかに笑って。
「なんにしろ、私はしばらくここに残って、今日出来なかった訓練のおさらいをしたいと思っているから、明日の仕事が済んだらよろしくね」
頑なになっていた心が、ほんのちょっぴり軽くなったような気がした。
確かに自分はひどく重大なことのように受け止めていたけれど、

周囲の大人たちから見たらそれほど大したことではないのかもしれない。
一服の清涼剤のように、ジルファの言葉と声が黒いもやもやを薄めてくれた。
「わかりました。あの、ほんとにごめんなさい。僕、皆に迷惑を掛けていますね」
見上げた瞳に、先程までの陰りはなくて。全てが解消されたわけではないけれど、これからまた己の中でよく考えて折り合いを付けられるだけの光明は見出せそうだった。
「遠慮しないで、落ち込みそうなときはきみからも私を呼んでごらん。何しろ暇人だからね、いつでも駆けつけるよ」
ひらひらと手を振って、身幅だけ開いた戸口をすり抜けるように青年は出て行った。

ふう、と溜め息をついて、それから何かを考えるゆとりもなく今度はスティールが手盆で木の椀と水の入った焼き物のカップを持って、器用に足で扉を開けて入ってきた。
「えへへー、はしたなくて失礼」
照れ笑いをしながら、でも両手が塞がってるから仕方ないよね、と自己弁護している。
はい、どうぞと差し出された椀を受け取る。両の手の平がほんわりと温かい。

スティールはテーブルにカップを置くと、またベッドの縁に腰掛けて窓の外に目を遣った。
月は中天に差し掛かっていた。明日の授業は辛いだろうなと思った。更に、与えられた課題には手もつけていない。ズル休みしたい衝動に駆られるが、そんなことは母が許してくれないだろう。現実は厳しいのだ。
勿論こうしている今も現実に違いないのだけれど、少女の暮らし

は〈狭間〉が基盤であり、どうしても〈銀〉にいる間は物語の中の登場人物になっているような気がしてならないのだ。

具の少ないスープを啜りながら、シャールは唇を尖らせている少女を眺めていた。不思議なもので、胃が満たされていくと気持ちも和いで行く。

隣接している界は、太陽と月も共有している。時間軸は異なることもあるが、今は少なくとも〈銀〉と〈狭間〉は同じ時を刻んでいた。

「明日…ていうか、今日になるけど、学校大丈夫なの？」

飲み終えて空になった椀をテーブルに置いて、シャールは尋ねた。

平静の口調に戻ったのを感じて、スティールは嬉しくなる。

「居眠りしないようにがんばるよー。シャールが寝ている間にね、一応大急ぎで界渡りして、河原から家に電話だけはしてきたの。シャールが急病で倒れたから、意識が戻るまではついているからって。だから、もう少ししたら帰るね。」

「うん。こんな時間まで残ってくれてありがとう」

うっすらと微笑を浮かべるシャールを見て、うずうずと抱きつきたい衝動に駆られ…スティールは必死に耐えた。

代わりに、ううん、と首を振り、布団の上のシャールの両手を握った。

「忘れないで、シャール。あたしはいつでもあなたの事心配してる。界を隔てていても、何かあったらすぐに駆けつけるし、傍にいるから。生活は一緒に出来なくても、いつでも会えるよ。そうでしょ？」

もっともあたし一人だと界渡り出来ないんだけどね～と困ったように笑いながら。

「ねえシャール。あたしにはまだ本当の恋愛が解らない。だから、シャールがあたしに求めているものがどんな感情なのかも理解できないけど…そしてこれから先に同じ気持ちを抱けるかも判らないよ。それでも、十年間一緒に暮らした事実とその間に育まれた愛情は確

かに今ここに…あたしの中にもシャールの中にもあるよね…」
少女らしい言葉にシャールは苦笑する。

求めていたものは、永遠に得られないとしても。
僕が幸せだった頃の確かな記憶と変わらない愛がここにあるのだと、こうしてずっとずっと伝えていてくれたのに。
僕がきみにあげたかったものは、もうずっと前からきみの中にあったというのに。

「僕はただきみに幸せになって欲しいだけなのに」
「あたしはシャールが居てくれて、ずっと幸せだったよ？　そして今も」
「僕が傍で幸せにしたかったのに」
「誰の力でもなく、あたし自身があたしを幸せにする。だからシャールも、自分をまず幸せにして」

僕の幸せは…きみの傍でなくても見つかるんだろうか。
『幸せになってくれたら、それでいいと思う』
ジルファさんのように、そう言い切れるときが、いつか来るんだろうか。

皆一緒に幸せになれるなら、世界はどんなにか優しいものになるだろう。
誰かの願いが叶えば、誰かの願いは叶えられない。
そんな理を知っていて、嫌になるくらい思い知って、それでも僕はまだ諦められなくて、あがき続けるかもしれない。これからも。
それでもそんな自分を丸ごと包み込んでくれる相手がいることは、それだけで幸せなことなんじゃないかと思う。

「シャール、泣いているの？」

瞬きした瞬間に、生温かいものが頬を伝った。
「ごめんね、シャール。」
スティールの方こそ大きな琥珀の瞳から涙を溢れさせて。
「謝るのは僕の方なのに…」
流れる涙が、心の中のもやもやとわだかまりを融かしていく。
そろそろ帰りましょうとリルフィが呼びにくるまで、二人は手を取り合ったまま静かに涙を流していた。見詰め合ったまま。

2（後書き）

シャール視点のちょっとシリアスな話でした。
次でまた学園に戻ります。そしてついにスティングがある行動に出ます〜

ただそばにいさせて　1

界渡りしてとぼとぼと歩いて帰宅すると、両親は寝ないで待っていてスティールを迎えてくれた。叱られるのを覚悟して神妙な表情でただいまと告げた娘を二人はおかえりと言いながら、ぎゅっと抱き締めて。

「シャール、意識が回復したよ」

ただそれだけの報告で、二人は笑顔で頷いて「少しでも寝ておきなさい」と説明を求めなかったから、嘘をついているわけではないけれど二人に真実を告げられない罪悪感に涙が零れそうになる。

自室に戻ると精一杯集中して課題を終わらせて、ようやくベッドに入った頃にはもう空が白み始めていた。

すっきりしない頭で翌朝登校準備をしていると、約束していないのにスティングのバイクが玄関前に停まった気配がした。

「スティール、お迎えよ～っ」

階下から母親の呼ばわる声がして、「はーい」と応えて首を捻りながらも鞄とヘルメットを抱えて階段を下りて外に出る。

まだ時間に余裕があり少し待たされるつもりだったのか、スティングはエンジンを止めてバイクから降りて待っていた。

「よぉ」

「おはよ。どしたの？　今日約束してなかったよね」

「ああ…うん。帰りにちょっと付き合ってもらおうと思って。だから乗ってけよ」

「買い物か何か？　うん、別にいいけど…」

昨日のどたばたですっかり週末のスティングの態度のことなど忘れてしまっているスティールと、何かいいたげなスティングの視線が絡む。

「おまえ、なんか目がはれぼったい」
「ぬー。なんて失礼なっ！　あんまり寝てないから仕方ないんだいっ」
正直に告げられ憤慨するスティール。
「今度はなんで夜更かししてるんだよ？」
「シャールが昨日の朝倒れちゃって…ずっと付いていたんだけど、意識が戻ったのが夜中でね。急いで戻ってきたけど、あんまり寝てないんだ」
目頭を押さえたりパチパチと瞬きをしながら説明をして、隠すようにスティールはヘルメットを被った。
「そっかー。まあ、シャールももうそこそこ年だしな」
頷いて納得したかのように、スティングもヘルメットを装着してバイクに跨った。
「まだうちにきて十一年しか経ってないもん！」
不本意そうに返しながら、ここでも真実は告げられず沢山の言葉を飲み込んでスティールは少年の後ろに跨ったのだった。

途中でうつらうつらしながらも何とか放課後までやり過ごしたスティールは、調理室でクラブのメンバーと打ち合わせをしていた。
調理クラブといっても毎日調理していると大変お金が掛かってしまうので、レシピを決めたり手順を予習したり、または前回作ったものの反省会など、実習ではない日の方が多い。
今日は翌日のレシピのおさらいをして、残りの時間でめいめいにおしゃべりに興じているところだった。
いつも一緒に調理するサンドラにこつを教えてもらい、それをレシピにメモ書きしていると、話題を変えるタイミングを計っていたのかサンドラがスティールの顔を覗きこむようにして声を潜めて口を開いた。
「あのね、実はあたしね、昨日スティングとデートしたの。」
丁度文字を書き終えた瞬間だったスティールは、息を呑んでサン

ドラと目を合わせた。
「映画観たりお茶したり…まぁ、普段皆といるときとそう変わらないんだけど、二人っきりで遊んだの。」
大きな青い瞳がキラキラと輝いていて、頬はほんのりと紅潮している。
「ほんとに！　良かった、お付き合いすることになったんだ！」
おめでとう～っと言いながらスティールはぎゅうっとサンドラに抱きついた。
「ありがとう」
ひとしきり控えめな声で二人で喜びを分かち合った後、ふとスティールは思い出した。
「あれ？　でも何か今日帰りにあたしに付き合えとかなんとか言ってたんだけど…」
正直者な上に、ついつい声に出してしまうスティール。しかしそれはサンドラも承知していることらしく、別段驚いた様子も見せずに頷いた。
「スティングの気持ち、茶化さないで聴いてあげてね。私はずっと前からスティングが好きだけど、いつかは…私のこと好きになって欲しいけど…でも今はようやく一歩前進できたから、それでいいの。一人の女の子としてちゃんと見てもらえるから。だから、スティールもスティングのことちゃんと考えて、ね？」
「ちゃんと考えるって…なにを？？」
サンドラの口にした言葉の意味を量りかねて、スティールの頭の中は疑問符が飛び交っていた。
隣に腰掛けて顔だけ向き合っているサンドラは、それに対しては曖昧な笑みで答えた。
うーと唸りながら、あ、あたしもこのタイミング逃さないほうがいいかも、とスティールも口を開いた。
「あのね…あたしも内緒話…なんだけど」
え、とサンドラが目を見開いて再び顔を寄せてきた。

「あたしもつい最近ローレンスとお付き合い始めたんだ～」
サンドラは叫びだしそうな口を自分の両手でしっかりと押さえ込んで、更に更にまん丸になった目でスティールを見つめた。
本当についこの間まで恋の話すらしなかった少女に、まさか年上で有名人の彼氏が出来るとは誰も予想だにしていなかったに違いない。
「…信じられないだろうけど、ホントだよ？」
俯き加減にちらりと上目遣いにサンドラを見上げるスティール。
サンドラは手を離すと、大きく深呼吸して気持ちを落ち着けようとしていた。
そうしながら、周囲の生徒たちが会話に気付いていないことを確認する。
「ローレンスが内緒にしていた方がいいって言うから、黙っててごめんね。」
一般の生徒が知れば瞬く間に学園全体に、そして世界中に知れ渡り大変な騒動になるやも知れないことをスティールはまだ理解していない。サンドラの方がその影響力の大きさを瞬時に悟り、絶対に口外してはならないことだと認識したくらいだ。
「あ、当たり前よっ。良かった～誰にも聞こえなかったみたいで…」
こそこそと椅子を引き寄せて、サンドラはぴったりとスティールに体を寄せた。カールした黒髪と紅茶色の髪が絡むほどの距離で。
「あのね、この学園内ではまだ噂聞かないけど、ローレンスさんって前の学園ではかなり沢山の恋人がいたみたいなんだけど…知ってた？」
「え、そうなんだ？」
ゴシップに疎いスティールはきょとんとサンドラを見つめ、
「あーでもあれだけカッコいいんだから、居て当たり前だよね」
と繰り返し頷いている。
サンドラの情報は雑誌やインターネットからのものだったが、信憑性のないことを口にしたりはしない。ごく普通のことのように、

当然のこととして周囲にも受け取られていたネタだからこそ、スティールに告げたのではあったが。
けれどそういう恋人たちは別段隠したりする存在ではなかったらしい。
それなのにスティールには、秘密にして置くようにと告げた。
そのことが意味するものは…。
「あの、もしかしてローレンスさんから申し込まれたの？」
半ば確認の為、念の為にと尋ねると、
「そうだよ～えー、なんで判るの？」
赤面したスティールが肯定した。
やっぱり、と思いながら、サンドラは嫌な汗が噴き出してくるのを感じた。
「もう、スティールったら。もっと自覚して！　絶対絶対誰にも知られないようにしなくちゃ駄目だよ？　少なくともあっちが卒業するまでは」
「そ、そうかな」
そのあまりの迫力にスティールは目を白黒させてたじろいだ。
もしも何処かから情報が漏れたら、それが嘘でも真実でも確認の為に記者たちがわんさか押しかけてくるだろう。流石に学園内には入れないだろうけれど、学園内でも新聞部や写真部の餌食になることは想像に難くない。そしてそれ以外の生徒たちの反応も凄いことになるだろう。自宅だって最早寛げる場所ではなくなるはずだ。
なんてったって、相手は世界のシルバー・シュバルツ・コーポレーションの時期社長なのだから。けれどもそこのところがスティールにはどうもピンと来ていないらしい。
元々グラビアなどの情報から入ったわけではなく、ディーンを見つけたらたまたま有名人だったのだから、仕方がない点もあるかもしれない。それに〈銀の界〉にいたときにもディーンは王子らしさというのはその立ち居振る舞いからしか感じられず、特に着飾っていたわけでも横柄にしていたわけでも供の者を連れていたわけでも

ないので、やはり身分格差というものは感じていなかったのだろう。
しかし『有名』ということにかけては、ディーンよりローレンスの方がいろいろな観点から上手を行っている。王子たる者の顔を知る立場の者は少ないが、この世界では何しろ情報網が発達しているので、何かきっかけさえあればすぐさま世界中に映像が流れてしまうのだ。せめてもっと普通の見目形であれば、そうまで騒がれることはないのかもしれないけれど。

大きく溜め息をついて、サンドラはポンポンとスティールの肩を叩いた。
「スティールも前途多難みたいね…。」
「うう。なんかよく判んないけど…サンディがそう思うんならそうなのかなぁ？　ローレンスは、普通の人なのに変だね？」
見慣れてしまっているが為に、手が届かぬ雲の上の人とは感じられず、スティールにとっては綺麗で格好良くて傍に居るのが心地よい人、という括りになってしまっているのだ。
「きっとローレンスさんも、スティールのそういうところに惹かれたんだと思うよ。」
サンドラは苦笑した。
「あう。わ、解んないけどっ、そうなのかなぁ」
顔を真っ赤にして照れまくっているスティールの様子なんて初めてで。サンドラは、改めてスティングの恋路も多難なことを知った。
あれほど恋愛に無頓着だったスティールが、ローレンスのことはきちんと異性として意識していて、また好意を寄せてもいる。出遅れたというだけでは済まされない大きなハンデだった。

2

待ち合わせの刻限が迫り、サンドラは改めてスティールの両手を握り締めて言った。
「今日、どんな話だったか…明日教えて欲しいの。もしもそれが私にとって良くないと判断するような内容でも、隠さずに教えて欲しいの。」
「え？」
「お願い。」
その時は何のことだか解らずに、スティールはサンドラと別れていつもの待ち合わせ場所に向かった。

スティングがバイクを止めたのは、昔シャールも一緒に転げまわって遊んだ土手だった。そしてこの〈狭間の世界〉にディーンがシャールの体を借りて現れた場所でもある。
無言のまま二人は斜面に腰を下ろして、束の間夕日が落ちていく様子を眺めていた。それだけで、何故か胸が締め付けられるのは…やはり『ディーン』の人格と会話した最後のときを思い出すからかもしれない。
「日が…暮れちゃうよ」
ずっと神妙な顔で黙りこくっているスティングに耐えかねて、スティールの方から話し掛けた。
普通にしていても赤っぽい少年の髪が夕日を浴びて真っ赤に燃えているように映る。精悍な横顔が右隣にいる少女の方を向いた。
「お前さ、隠してること、全部話せよ。ここなら誰も聞いてねえし。」
眦の吊り上がった橡色の瞳がひしとスティールを見つめていて、いつもの冗談では済ませるつもりはないことを告げていた。
「か、隠してるって…。」

「だから、もう隠すな。いきなりシャールがいなくなって、お前がそんなに普通に暮らせるはずないだろ？　ディーンとやらの件も、ちゃんと最初から…話してくれよ。信じるから。」
琥珀色の瞳が大きく見開かれて、明らかに動揺の色が見られた。

嘘なんて、一番嫌いで。
それでも、あまりにもこの世界の現実とは掛け離れた出来事だったために誰にも言えずにいたことを、やはり長年の付き合いで何かを感じたのか、幼馴染みの　少年は正直に話せと言って来た。
それでも、真実を本当に信じてもらえるのか。
親しい人に真実を嘘だと思われるのがもっともっと辛くて耐えられそうもなくて、ひた隠しにしてきたのに。

「長くなる、よ」
ぽつりと前置きして、生真面目にスティングが頷くのを確認してから、シャールのこと、リルフィのこと…そしてこの世界のほかにさまざまな世界があること、沈んでいく夕日を前にかいつまんで説明したのだった。

「というわけで…今あたしが会いに行っているのは、人間のシャールなんだよね」
そう締めくくって、スティールは口を噤んだ。
すっかり日は落ちてしまい、街灯の薄明かりと川面に反射した月明かりだけが二人の周囲を淡く照らしている。
「あー、なるほど。」
立てた膝に顎を載せてしばらく考えていたスティングが、ようやく口を開いた。話の途中には珍しく一切の口を挟まず、ああとかそれでとか簡単な相槌だけ打って静かに聴き入っていたのだ。
なんだか釈然としていなかった部分の帳尻が合った気がした。

十年以上経っていきなり引き取られていったシャールについても、恩人だと言っていたディーンについても、これでようやくスティングの中で納得がいくような場所に収まったようだった。

「なるほどなー。そんで多分、いや間違いなくシャールはスティールのこと好きだろ？」

くしゃくしゃと髪を掻き回して、やや呆れたような視線を投げて寄越す。

「は？　え？　なんでいきなりそんな感想？」

ぱくぱくと魚のように口を開閉させるスティール。

「物心ついたときからずっと一緒にいて、実は他の世界の住人だと判ったからはいさようなら～なんて、オレだったら納得できないね。その〈銀の界〉の存続なんて知ったことかよ。こっちに戻ってきて前みたいに、そんでもって人間のままお前の傍にいたいと思うさ」

「そんな無責任な～っ。」

「無責任で結構。たった一人の子供に世界の命運背負わせるなんて、そんな世界壊れたっていいじゃんかよ。そんなもん、背負わせるのおかしいって。」

「そんなこと言ったって…世界のバランスが崩れたら、こっちの世界もどうなるか判らないって…。」

「それでも多分、この世界はオレたちが生きている間は変わらない。それくらいの猶予はあるだろ？」

「あるかもしれないけど…でも。」

なんと反論すれば良いのか判らなくて、スティールは両手を組んで鼻と口を覆った。

「感情だけなら、そう思うのが普通だと思う。けどシャールはそっちに残ることを選んだ。この世界の全ての命の重みを一身に背負ってさ…そんなの、お前のこと好きだからに決まってるだろ。一人だったら、投げ出して逃げ出して何とか自分ひとりだけ生きる時間と場所があれば、それでいいじゃんか。」

そう、なのか。
そこまで思い至らなかった自分に驚愕する。
当たり前のようにそのことを指摘するスティングにも驚いたけれど、そんな事は誰も言わなかったしシャールも示さなかった。
それはそうだろう、自分に為に犠牲になるだなどと、当の本人に言うはずがないのだから。

「オレが言わなきゃお前は一生気付かない。それがシャールも本懐だったろうけど、でもオレはそんなの許さねぇ。シャールもオレも、多分お前には家族のように兄弟のようにしか認識されていないからな。思っていること、一番判るのは…オレしかいないだろ？」
自嘲気味に微笑んで、真剣なままの瞳でひたとスティールを見つめて。
「シャールが言えないならオレが言ってやる。オレは、お前のこと家族だなんて思ってねぇよ。お前は女で、オレの好きな女だ。」
スティールが何か言う暇もなく、意外に筋肉質な腕が少女を抱き締めていた。
「ホントはずっと、こうしたかった」
僅かな明かりが少年の顔で遮られて、噛み付くようにキスをされた。唇を舐められて開くように促されても、スティールはぎゅっと奥歯を噛み締めてスティングを拒絶した。
諦めてようやく唇が遠ざかり、スティールは手の甲でぐいと口元を拭ってスティングの胸を思い切り押して自分は後じさった。
「ひどい！　スティングの馬鹿っ！　サンディと付き合ってるんでしょ？」
きつく睨まれて、予想していたとはいえスティングの方もやはりショックは受けているようだ。
「付き合ってるよ。サンディは、オレがお前のコト好きなのも知ってるし、それでもいいから付き合ってくれって。」

スティールはあからさまに眉間に皺を寄せて、信じられないと呟く。
けれど、そう言われてみたら今日のサンドラの言動にも色々と意味があったのだと、だからこそ明日教えて欲しいと乞われたのではないか。
「お前だって、オレと似たようなもんだぜ？」
意地悪くスティングが唇の端を上げる。
「お前は、ディーンの面影をローレンスさんに求めてる。比べてる、いつだって。二人は別人だって解ってない。だろ？」
「ちゃんと解ってるよ！　あたしはローレンスのこと、ちゃんと解ってる、ディーンはもういないんだからっ」
我慢していた涙が、はらはらと大きな両目から零れ落ちた。
声に出して言ってしまうと、自分でも驚くほどに哀しくなった。
ディーンはもういない、その事実をその場にいなかった人物にも突きつけられて。
「そうかよ。ならいいけど？」
少女の涙にも動じず、そろそろ帰ろうかとスティングはバイクに向かった。
「あたし、歩いて帰るから。」
〈銀の界〉でのことなど、幼馴染みがすんなり受け入れてくれたのは確かに嬉しかったけれど、その後の話の展開で甚だしく気分を害したスティールは、後ろに乗ることを固辞した。歩いて帰宅しても、散歩で済ませられる距離だし、今は一緒に居たくなかった。
「じゃあお先に」
むうと口をへの字にしてその姿が遠ざかるのを見送って、自分でも確たる意思のないまま携帯端末を取り出してローレンスを呼び出していた。
『やあ。』
画面ににこやかな青年の笑顔が映り、引き結んでいた唇が震えてまた涙が頬を伝い落ちた。

「ローレンス……」
『え、ちょっと、スティールっ。どうしたの？　今何処？　すぐ行くからっ』
　これ以上はないくらい慌てた表情に変わり、その後ろではさまざまな人々が叫んでいた。
『なりませぬ、若っ』『取り敢えずこの議題が終わるまでは』『そんな無理が通りますか！』初老の男性からアンジェラと思しき声まで入り乱れて、今が何か大事な仕事の最中なことだけはスティールにも判断できた。
「ごめんね、またね」
　謝るだけ謝ると、制止する声を無視して一方的に通話を切った。

3

涙が後から後から溢れてきた。もう夕食の時間だ。父親は今日は出張で不在だけれど、母親はきっと手料理を並べたテーブルの前で娘の心配をしている頃だろう。

そう思っても、どうしてか涙が止まらない。

一番傍にいて、同じ体験をしてきた自分が気付かなかったシャールの想い。一緒に暮らそうとずっと一緒にいたいと言われて、安易に返事が出来なくて、結局は断ったも同然の返答をしてしまった自分にも腹が立つし、サンドラと付き合いながら、そしてスティールがローレンスと付き合っているのを知りながら強引にキスしてきたスティングにも腹が立つ。

あたしがここでこうして普通の生活を送れるのも…全てシャールのお陰で。そんなことすら、あたしは考えもしないで、ただ毎日が楽しくて。

シャールの好意を『家族』っていう言葉で誤魔化して、あたしはシャールの本気から逃げているだけかもしれない…。

それでも先日シャールに伝えたことがスティールにとってはこれ以上にないくらい真実で。

自分の立っている場所がガラガラと崩れ去っていくような、危うい感覚に嵌って行く。

一人きりになってみて、夜風の寒さに体が震えた。いつまでもここに座っていても仕方がない。腰を上げてスカートに付いた草を払うと、鞄を両手で胸に抱き締めて、スティールは家路に着いた。

涙は乾いていても、くしゃくしゃになった顔は隠しようもない。

出迎えて心配そうに尋ねる母親に、スティングと喧嘩しただけだから心配しないでと告げると、
「高校生になっても喧嘩するほど仲がいいなんてねぇ…。まぁほどほどにね？　どっちが悪くてもちゃんと仲直りしなさいよ。」
と自分と同じくらいの背の娘の頭を優しく撫でた。
仲直りなんて、出来るだろうか。
他のことならともかく、キスについてはすぐに許してはいけない気がする。
一旦自室に上がり、物問いたげなリルフィに「話は後で」と告げて一緒に夕食を取った。

入浴も済ませてさあいつでも寝られるぞという態勢にまで持ってきて、うずうずと落ち着きのない様子だったリルフィに、ようやくスティールは今日の出来事を語った。
案の定リルフィはすんなり伸びた鶏冠を逆立てて、目を吊り上げて怒りを露わにした。
『あんのクソガキーっ！　今度見掛けたら絶対髪の毛むしってやるから！！』
あはは、と乾いた笑いで、そうされてもも文句は言えないだろうと暗に同意する。
ぷりぷりと様々な悪態をつきながらも、リルフィはスティールの心配がやはり先に立ってしまうらしく。
『でも、それで泣いてたんじゃないでしょ？　あんな自己中心的な猪突猛進な男の言葉なんて気にしちゃ駄目よ。シャールは自分で望んであちらに残ったの。あんたのことも護りたいだろうけど、他の沢山の人や生き物を護るためにね。それは確かに人一人の肩には重過ぎる枷かもしれない。でもね、シャールだけじゃない、同じ理を抱える世界で同じ責を負った人がいる。誰かがしなくちゃいけないことなのよ。感情だけでは世界は治められないの。治めたくなんてなくても、それを全て捨て去って逃げて隠れたって、そんな自分を

本人が許せない。たとえ周りが許してくれても、許せるはずがない。そういう生まれなのよ。不公平だと思うかもしれない。けれど世界はそんなに公平には出来ていないのよ。』

〈金の界〉の〈君〉は、悠久ともいえる長い年月、一つの世界をずっと一人で治め支えてきた。その事を考えるならば、シャールの役目は今始まったばかりと言ってもいいだろう。

誰もが望んで得たわけではない〈ちから〉そして〈役目〉。

誰か一人が世界の命運を決めなくても良いように、現在の〈狭間〉ほどに血が薄れるまでは、あとどれくらいの時を必要とするのだろうか。

そして全ての世界がそうなったときに、それが本当に公平で安全な世界を作るのだろうか。それとも〈銀〉のように崩壊への道を進むのだろうか。

「でも、シャールが可哀相だよ。何かもっとあたしに出来ることないのかな」

思案気にスティールが問うた。

『同情なら何もしちゃ駄目よ。今まで通り毎週末には二人でピクニック。日頃のストレスを発散させてあげる、それだけで十分なの。』

大きく羽を広げて、リルフィが答えた。

「でも」

『じゃああんた、シャールが願うこと叶えてあげられるの？　こっちの生活捨ててあっちの世界に住んでシャールと結婚して、子供沢山産んであげるの？』

「結婚？　子供？？」

ひええーっとスティールは両手を頬に当てた。

『そうよ、だってそれがシャールの願いでしょ。ああホントこんなこと私の口から言いたくはなかったんだけど仕方ないわっ』

怒ったように、呆れたように…リルフィは言った。

「なんでそんなこと解るのよぅ」
『解るわよ、あんな眼で全て語ってますって純粋な子供、他にそうそういるもんですか。気付いてなかったのたはあんだだけかもね。』
「あうー。リルがいつになく厳しい気がするんですけど」
『私はあんたが一番大事だから、変なことぐちゃぐちゃ考えてドツボにはまって欲しくないだけよ！　とにかくね、出来る事と出来ない事があるの。出来もしないこと延々と悩んで考えて自分に嘘ついて実行なんてされたくないし、普通に楽しく生活していればいいのっ。』
「えぇ～っ。そうなのかなぁ。それって変じゃない？」
『変じゃない！　何処が変なのか指摘してみなさいよ。』
「うう…。」
『出来ないでしょ？　だから私の方が正しいんだから、もう悩まないっ。はいおしまい！』
そういうと、早く寝なさいと言わんばかりに勝手に明かりを消してしまった。

きっとリルフィの言っていることも正しいのだろう。そう感じはしても、それで納得して忘れてしまってはいけないことのような気がする。
知らなかった気付かずにいた今までのスティールではなく、もっときちんと受け止めて理解したうえで幸せを掴まなければならない。出来れば皆が幸せになればいい。願いが全ては叶わなくても、いつか幸せになれたらいい。

勉強机の上に置いてある携帯端末が振動した。木目のある机上で僅かに跳ねるように、ブブブブブと音が響く。
深夜とまではいかないが、健康的な生活を送るものならばそろそ

ろ就寝する時間だ。
何か緊急の用だろうかと手に取ると、パネルにローレンスの心配そうな顔が映った。
『遅くなってごめん。』
「あ、あたしこそ、何だか忙しいときに電話しちゃって。」
『そんなのいいんだよ。それより、窓開けてくれる？』
「窓？」
もう夜風はかなり冷たい。当然のごとく、最近閉めっぱなしにしたままのベッド脇の大きな窓に寄って行くと、鍵を開けてよいしょとガラス戸をスライドさせた。
一番に薄い月が目に入り、目線を下にやると家の脇の路上で黒いコート姿の男性が手を振っていた。
「えっ」
『ちょっと窓から離れててね』
端末から再びローレンスの声が聞こえ、言われた通りに身を引いた途端にふわりと風が動いてベッドの上にどさりと青年が腰を着いた。
「こんばんは」
いそいそと革靴を脱ぎながら、青年はにこりと笑顔を向けて、床に靴を置くと入ってきた窓を慎重に閉めた。
「あ、あの…ここ、二階……。」
いつの間にやらリルフィは定位置の止まり木に戻って、愉快そうに二人を眺めていた。そんなことにも気付く余裕はなく、スティールは自分のベッドに腰掛けているローレンスを凝視していた。
「驚かせてごめんね。反重力装置の応用でね、ちょっとだけ靴に細工してあるんだ」
唇の端を綻ばせて、ローレンスもスティールの表情を窺っている。暗がりの中でもまだうっすらと残る涙の名残に気付かれてしまったかもしれない。反射的に手で顔を隠そうとしたときにぐいと腰を手繰り寄せられて、スティールはローレンスの胸に倒れこんだ。

僅かにあがる悲鳴も全て胸に抱きこんで、ローレンスの長い腕が細い腰に巻きついたままその大きな手の平は脇腹を撫で上げている。
薄い布切れ一枚の夜着を通して体温が伝わってきて、緩やかな愛撫にスティールは安心したように体を預けた。
『不法侵入の上に何だかいかがわしいことしようとしてるのかしら』
後ろではリルフィが呟いているが、勿論青年には普通の鳥のさえずりにしか聞こえていないはずだ。
ちらりとそちらを見遣ると流れるようなウインクをして、
「えーと、リルフィ？　寝ていていいからね。」
とのたまうローレンスには流石に降参したようで。リルフィはそれきり口を噤んでしまった。
「スティール、訊いてもいい？」
その胸に抱かれることに随分慣らされてしまった少女は、おどおどと顔を上げた。
「何があったの？　どうしてそんな跡が残るくらい泣いてたんだい」
先程の強引な論法で半分くらいは納得していたスティールだったけれど、そう言われてまた顔が崩れそうになる。
「ごめんなさい、ローレンス。ごめんなさい…。」
「どうして？　僕は何も謝るようなことはされていないよ」
「だってきっとあたし、ローレンスに酷いことしてるんだ…。」
スティングには大きな啖呵を切ったものの、ときたま面影を追っていること、そしてディーンだったらと比べていることは否定できない事実だったから。
「きみは何も酷いことなんてしていない。僕がそう言うんだから…何も気に病む必要はない。誰かに何か言われた？」
誰かといっても、現在この関係を知っているのはスティングとアンジェラだけなので、自ずと犯人は判ってしまうのだったけれど。
びくりと少女の肩が反応して、やはりスティングと何かあったのだとローレンスは察した。
「ごめんなさい、あたし…あたし…あの、」

どうしても次の言葉が出てこない様子で、今にも涙が溢れそうな瞳が正視に耐えかねて逃げようとする。
「もう泣かないで」
降るように、ローレンスの唇がスティールの額に落ちた。
「何も言わなくていいから」
眦を。左にも、右にも。そして鼻先、両頬。宥めるように、静かにそっと優しく舞い降りて。
それから唇へと。

どうしてこんなに安心してしまうの。
何も不安なことなんてないって言ってくれているみたい。

真綿にくるまれて眠っているみたいに、安心できる腕の中で。
訳もわからずもやもやと蟠っていた気持ちが解されて、溶かされて、霧散していく。

しっとりとそして熱く求められて、重ねた唇の隙間から堪えきれない喘ぎが漏れる。
上衣の裾から進入した手の平が、素肌の上を撫でて。その時々に、僅かに声が上がってしまう。
「…あ…ぅ、やっ……んっ。」
意味を成さない言葉が零れ落ちて、体の奥がじんと熱くなっていくのに頭の中は真っ白で。

キス。ローレンスのキスは、こんなに気持ちいい、のに。
スティングにされて、恐怖と怒りと嫌悪感と、そんなものしか感じられなかったのは…何故？

いつもより長い口付けもやがて啄むような軽いものに変わり、そっと顔が離れていく。

とろりと熱を含んだ瞳で見上げれば、深紫の奥にもちらちらと何かが潜んでいる。
「駄目だ…僕の抑えが効かなくなる。」
ましてやこんな暗い部屋で布団の上では。
よくぞここまできて手を止められたとリルフィは少し驚いていたりした。
ローレンスはそのままスティールを布団に入れると、自分はその手を握って床に座った。
「眠るまでここにいるから、ゆっくり休んで忘れるといい。」
「うん…。」
半ば閉じかけた目で、傍らの青年を見つめて、握っていないほうの手でそっと頭を撫でてくることに安堵して、しばらくして目蓋が落ちた。
それでもローレンスはしばらく頭を撫で続けて、握った手から完全に力が抜けたのを確認してからその手を布団の中に入れてやった。
「おやすみ、良い夢を。」
ちゅっともう一度軽くキスを残して、立ち上がる。
『子守させているみたいで悪いわね。あんたが前世とそんなに人格が違っていないって、ようく解ったわ。』
チチチ、とリルフィが独り言のように鳴いた。
「ええと…流石に外からは窓が閉められない…よねぇ。さて、どうしたものか。」
こちらも独り言のように呟くローレンス。さして困っているようでもなさそうだったけれど、ここは一つ助け舟を出すことにした。
止まり木から窓枠へとリルフィは舞い降りて、嘴と足を使って器用に窓を開けて見せる。気密性はかなり高いが、従来の樹脂サッシより開閉はアルミに近い容易さを持つガラス戸がすんなりとスライドするさまを見て、ローレンスは笑顔を見せた。
「もしかして、閉めるのは任せてくれってことかい？」
大きく頭を上下させ、リルフィは嘴を戸外へと向けた。

『早くしないと寒いじゃないの。』
「じゃあお言葉に甘えて。さよなら、またね。」
革靴を履いた青年が、ひらりと夜空に舞った。コートが翻り、その姿はまるで大きな黒い鳥のようだ。
感慨に浸ることもなく静かにそして素早く窓を閉めると、路上では青年がこちらに向けてひらひらと手を振っていた。

やがてその姿がリニアカーに乗り込み遠ざかるのを見守りながら、リルフィも不思議な安堵感に包まれていた。
愛しくて大切な少女を、同じように大切にしてくれている青年が、前世と姿は同じでも記憶がなければ別人だと思っていて、それがリルフィにとっては不安の種だった。
けれどやはり根本では同じなのかと、成長過程で多少は違ってくるだろうけれど、以前の記憶などなくても大事なものを大切に扱うところは変わっていなくて。

取り敢えず一安心、といったところですか。
あー、こんな日にあいつがいなくて本当に良かった！

ジルファが知れば悔しがるであろう事を想像しては悦に入り、リルフィはそのまま少女の枕元で眠りに落ちた。

揺るがない想いをきみに　1

翌朝は快晴だった。雲一つない青空の下を、いろいろと考え事をしながらスティールは学園に向かった。今日は勿論自分のリニアカー乗車である。省スペースをポイントにしている通学用リニアカーは全くの箱型で可愛げも何もないけれど、自動操縦になっているので座ってぼーっとしているだけでいつの間にか着いてしまうのが楽チンだった。

「おっはよーっ！」

いつものようにドアの開閉と同時に挨拶をして教室に入ると、室内にいたクラスメイトたちから口々に反応があり、窓際の後ろから二番目の席ではサンドラがひらひらと手を振りながら「おはよ」と挨拶を返してくれた。

腰掛けている席の机に浅く体重を預けているのはビクトリアだった。もう部活動の朝錬は終わったらしく、きりりと引き締まった細面の口元を綻ばせサンドラと談笑していたようだ。短くカットされた赤い髪の毛が、朝日を浴びてキラキラと透けて輝いている。

その目線の下では、今日もきつくカールした黒髪をサイドだけ結い上げてサンドラは可愛らしく肩を竦めていた。

スティールの席はサンドラと同じ列の一番前である。取り敢えず鞄を置いてから、サンドラの席におずおずと歩み寄った。

「おはよう？」

その様子を訝しく思ったのか、ビクトリアが変なイントネーションで挨拶してきた。

「お、おはよっ」

声だけは元気にビクトリアに返したものの、サンドラには遠慮がちに近寄って行く。

「あのね、昨日のこと…なんだけども。」

「あ、うん。」

「クラブの後で、話すね。」
「わかった。ありがとう！」
普通のことのようににこやかに応えるサンドラ。
昨日から考えていて、やはり言いにくいけれど本当の事をそのまま話さなければと、スティールは気持ちを固めた。
その時、スティールにもビクトリアにも明らかにそれと判るようにサンドラの表情が明るくなった。
スティングが登校して来たのだ。

「うっす。」
スティングの席はサンドラの隣の列の最後尾であり、つまりサンドラにとっては斜め後ろのご近所さんだ。
サンドラはこれ以上ないくらいにこやかに、そしてビクトリアはいかにも面倒くさそうに挨拶を返し、スティールは…。
「スティング！　歯を食いしばれ！」
大声ではないが威勢よく言うと、体重を掛けて振り向きざまエルボードロップを叩き込んだのだった。
いきなりそんなことを言われても鞄を机の横に掛けて椅子を引こうとしていたスティングは、不意を撃たれてもろに腹のど真ん中に攻撃を受けて後じさった。
言葉もなく目の端に涙さえにじませて咳き込む少年と、唖然とするクラスメイトたち。
「これで昨日のことは水に流してあげる！　あたし、本当に怒ってるんだからねっ！」
スティングの前に仁王立ちで傲然と言い放つと、笑いながらその背をビクトリアがぽんぽん叩いた。
「何があったか知らないが、朝から痛快だなっ。」
愉快そうなビクトリアの隣では、サンドラがスティールとスティングを見比べてオロオロしていた。
「だ、大丈夫？　スティング…。」

「いいって、そいつは殺したって死なん。」
「でも、リア、痛そうだよ～。」
「ごめん、サンディ。わけは後で話すから。」
スティールはサンドラにだけ詫びを入れると、再びスティングに向き直った。
スティングの方は、痛そうな素振りを見せながらもその視線を受け止めた。
「これで、なかったことにするから…。じゃあ。」
束の間苦い表情をしたものの、スティールは無理矢理に笑顔を作り、自分の席に戻った。その背を見つめていたスティングは、自分を心配気に見守るサンドラに微笑して軽く頷くと椅子に座ったのだった。

何となく気まずい空気は残ったものの、努力していつも通りに過ごしているうちにランチの時間になった。
風も少なく日差しが暖かかったので、中庭の芝生で弁当を食べることになり、購買に向かったスティングは放っておいて取り敢えず女子三人で先に食べ始めることにする。
この学園は敷地内に半円を描くように各学部を含む建物があり、外観はレンガ造り風になっている。材質はシャトルに使われているような、汚れや衝撃に強いもので耐久性は比べ物にならない。そして円の内側に共用の建物がぽつぽつと点在し、武道館は高等部の近く、図書館は大学部の近く、と建物により学部からの距離が全く異なるのだ。
カフェテリアは高等部と大学部の建物の境目にあり、これは本館の中ということになる。それ以下の年齢では圧倒的に弁当の割合が高いからかもしれない。食育の観点から、週に一度は生徒が自分で弁当を作るのが課題になっているのだ。

そして、その半円の内側で各建物との間に、こちらは本物の石とレンガで舗装された通路があり、それ以外の場所に豊かに葉を広げる木々と芝生が広がっているのである。それらを総称して中庭と呼び、生徒たちはめいめい自由時間を寛いで過ごしている。敷地がかなり広いのと本館の屋上にも植樹された休憩スペースがあるため、会話やスペースを気にすることなく広々と利用できるのだった。
芝の上に長座して膝の上に弁当箱を広げておかずを突きながら、スティールはチラチラとサンドラを窺った。
「あのさ、朝はその～驚かせてごめんね？」
んん？　とサンドイッチを頬張りながらサンドラがスティールを見遣り、首を傾げた。
「なんか顔見たら反射的に手が出ちゃって。」
「ああ！」
ごくんと飲み込んでから、
「スティングのことかぁ。」
と頷いた。
「その気持ちは良く解るぞ。」
隣では自分の弁当を食べながらビクトリアがしたり顔でスティールに同意している。
「なんかずっと抱え込んでるの性に合わなくて、今丁度本人いないし…簡単に説明してもいい？」
フォークを握り締めたままもじもじとサンドラとビクトリアを見比べた。
「私が聴いても構わないのか？」
ビクトリアはサンドラを気遣う様子を見せた。
「勿論。リアには隠さなくていいよ。」
サンドラが笑顔で頷き、スティールに話を促した。
弁当箱のオムレツをぐさぐさとフォークで突きながら、スティールは口を開いた。
「あのね、昨日帰り道でスティングとはいろいろ話したんだけど、

まぁその中でも私のプライベートな事は置いといて…。スティングがね…私のこと好きだって言って、いきなり抱きしめてキスしてくるからさ……びっくりしちゃって。」
俯き加減に話しながらちらりと窺うと、サンドラは「あぁ…。」と何故か納得した表情をし、ビクトリアは「あんのケダモノめが！！」と拳を握り締めて切れ長の目を光らせていた。
「それでね、リアにも今だから言うけど…あたし、ローレンスとお付き合いしててそのことスティングも知っているのにって。それですんごく腹立って。で、昨日は泣くしか出来なかったから、今日殴ってみた。」
「うむ。スティールは正しい。」
ビクトリアは頷きながら、そっと手を伸ばしてスティールの背中を叩いた。
「一発で良かったのか？　もっとボコボコにしてやった方がいいと思うが。」
「いやー、あたしは良くてもサンディが…ね？」
え、とサンドラは二人を見比べてから、困ったように微笑んだ。
「むぅ。確かに、あんな男でもサンディにとっては想い人だからな。どうしてあんなヤツが良いのかは理解できないが、私はサンディの味方だ！」
そんじょそこらの男子よりずっと男前なビクトリアは、少し残念そうに嘆息した。
「しかし…スティールもなかなか難しそうな相手を選んだものだなぁ。確かに性格はスティングより良さそうだが。」
「うーん…難しい、のかなぁ？　サンディにも言われたけど、なんかぴんと来なくて。申し込んできたの彼だし…。」
無残な形になったオムレツをフォークに載せて、ようやく食事を再開する。
「ほほぅ。」
ビクトリアは眉を上げてサンドラに視線を移し、二人は無言で頷

きあった。
そうして何となく三人ともが弁当に意識を移したとき、あ！とサンドラが自分の手提げをまさぐりＡ四サイズの液晶パネルを取り出した。授業のノート代わりにも使っている有機液晶パネルだ。タッチセンサーでテレビ放送画面に切り替えると、二人にも見える位置に斜めに立てて置いた。
なになに？　と不思議そうにスティールとビクトリアが画面を注視すると、丁度番組が始まったところだった。
大陸でも一、二を争うと言われている美人の司会者が、毎日いろいろな有名人と談話する娯楽番組だ。『有名人のここだけの話！』と銘打っているだけあり、毎回視聴者にとっては新鮮でちょっとした秘密の暴露があったりするので、視聴率はかなり高いらしい。勿論普段スティールたちが目にすることはないのではあるが、芸能好きの生徒たちはこのようにして昼休みに観覧するのが常であるようだ。
ロングのプラチナブロンドを少し残し大半をアップに結い上げた司会者が、本日のゲストを紹介し、その人物が大写しになる。
『こんにちは。』
画面越しに微笑む青年を見て、スティールは咀嚼途中だったブロッコリーをそのまま飲み込みそうになった。
『お久し振りです、ミスター。相変わらず素敵ですねぇ。』
三十代で独身の司会者が、本気でうっとりと青年に見惚れ、小さな丸テーブル越しに一人用のソファに腰掛けたローレンスの方に行きたくて堪らないらしく腰を浮かせるようにして話し掛けている。
『貴女も相変わらず美しいですよ。』
お世辞とは判っていても、その微笑を向けられては頬を染めずにはいられない。しかし、カメラの近くで合図でもあったのか、司会者は仕事内容を思い出して口元を引き締めた。
番組はコマーシャルを除くと二十分ほどの生放送である。いつまでも見惚れて時間の浪費をするわけにはいかないのだ。

『ミスターシュバルツといえば、最近はあまり女性の噂をきかないのですが、もしかして本命の女性でも出来ましたか？！　出演が決まってからこちら、是非その話題を振ってくれとリクエストが殺到していまして！』
『ええ、実は・・・まだ片思いなんですが、意中の女性がいますよ。』
訊かれる事は想定していたのか、淀みなくしかしややはにかんだ表情でローレンスは頷いた。
『片思いですか！　そんなことありえるんですか？』
今度こそ本当に腰を浮かせて勢い込んで司会者が問うた。
『だって彼女は、僕と出会うまで僕のこと知らなかったくらいですからね。』
サンドラとビクトリアが、ちらっとスティールに目をやった。
『まあぁーーっ！　深窓のご令嬢なんですね！』
司会者は別の意味に解釈したようである。
『もう寝ても冷めても彼女のことしか考えられなくて。』
演技なのか本当なのか、いかにも大切な人のことを思い出している様子で、ローレンスは視線を宙に彷徨わせた。
『なんて羨ましい方なんでしょうか！今頃局の電話は鳴りっぱなしですよ。』
『でもまだデートにも誘えなくて・・・。』
『んまぁぁ～！　ミスターらしくないですねっ。』
『だってあなた方がこうやって大騒ぎするから、彼女に迷惑が掛かるじゃないですか。多分この番組も観ていないと思うけれど、本当にここだけの話ですよ。もう、そっとしておいてくださいね。これ以上突っ込んで訊かれても黙秘しますから。』
手を顔の前に上げて女性を制し、ローレンスは断言した。
コマーシャルが始まり、二人に凝視されてスティールはかあぁっと赤面した。
「あれってやっぱり、」

「ここにいる女子のこと、だろうなぁ。」
「いやー、その、まぁ…なんというか…そうなの？」
恥ずかしすぎて顔から火が出そうだった。スティールは誤魔化すように次々と食べ続ける。
「それにしても～デート、まだなんだ…？」
気の毒そうにサンドラが首を傾げた。
「ん、やっぱり忙しいし…外だと人目が…やっぱり。」
もごもごと応えながら、ふとディーンといろいろなことをしようと計画を立てていた時期もあったと思い出した。
シャールの体を借りてこの世界で遊んだときは、短時間でいろいろなところを引っ張りまわしたけれど、そういえばローレンスとはしていないなと気付く。
実際の所スティールさえ休日を空けていれば、ローレンスは何が何でも仕事を片付けて出掛けるはずなのだけれど、肝心の少女はなかなか踏ん切りが付かないのだった。

本当は、ローレンスに対してもシャールを口実に逃げているのかもしれない。
もっと素敵な女性になって、彼の隣を並んで歩いても、誰に何を言われても気にならないならば…。
デートなんて本当はいつだって出来るはずなのに。
普段表には出さないけれど、臆病な自分がこっそりと顔を出す。
あの司会者くらい美人で大人の女性ならば、自信を持って堂々と肩を並べて街を歩けるに違いないのに。
二人きりの時には気にもならないことが、ふと世間の彼に対する反応を見たときに、頭から重くのしかかってくるのだった。

コマーシャルが終わり画面に二人が映る。
話題はＳＳＣの新しい商品の話に変わっていた。
ぼんやりとそれを眺めながら、急に元気のなくなったスティール

は黙々と食事を続ける。
そこへようやくパンや飲み物を抱えたスティングが到着した。
「遅いぞ。もう私は食べ終えたからな。」
ビクトリアは座ったままスティングを見上げて、片付け始めている。
「ここに座ったら。」
頬を染めて嬉しそうにサンドラがビクトリアと反対隣を示すと、スティングはそこに腰を下ろした。
「たまたまカフェテリアでテレビついてるの見ちゃってさ…。て、ここでも見てたんじゃん！」
「あ、うん。番組表でゲスト出演するって知ってたから、スティールに見せてあげようと思って。」
「へー。」
ちらりと視線を投げかけるも、当のスティールはスティングのことは気付いてもいないのかぼんやりと番組を観ていた。
「おぉい、オレの分のおかずくれよ。てか、勝手にもらうけど～。」
「…うん…。」
膝の上とは別の弁当箱を、勝手知ったるなんとやらで手に取りさっさと食べ始める。上の空で生返事をした分だけましかもしれないが、しばらくそんなスティールはそっとしておいて、三人で他愛ない話をしながら食事を済ませた。

2

放課後、調理室でサンドラと共に生キャラメルを作りながらも、やはりスティールは精彩に欠けていた。弱火でとろとろとかき混ぜながら、普段ならどうでもいい話に興じすぎて煮立ててしまったりするのだけれど、今日は心ここにあらずでうっかり手が止まることもしばしばだった。

「スティール、そろそろいいんじゃない？」

サンドラに声を掛けられて、横に用意しておいた冷水の器にぽたっとキャラメル液を垂らす。指に付かない程度にすぐ固まったので、頃合ヨシとみて火を止めてバットに慎重に移し変えた。そのまま冷凍庫でしばらく寝かせるので、洗い物をしてから椅子に座って一息つく。

「どうしたの？　あの番組の途中から元気なくなっちゃったね。」

隣のスツールに腰掛けて、サンドラが顔を覗き込んだ。

「あー…うん。なんか色々考えちゃって…。」

はぁと溜め息をつきながら応じるスティール。

「色々って？　彼のことで？」

「ん…。」

「不安なの？　彼がモテるから？」

「ううん、そういうの以前の問題というか、あたしに自信がないから…。そりゃ嬉しいし、あたしも好きだし…。うん、多分好きなんだけど……。

段々自信なくなってきたよ。」

がくーっと肩を落としている様子を見て、数年来の付き合いであるサンドラは目を見張った。

天真爛漫を絵に描いたようなスティールは、結構天然ボケなところが多いけれど、失敗をものともせずに前進するタイプの人間である。今回もきっと当たって砕けろ的に付き合い始めたのだろうけれ

ど、ここにきて珍しくも周囲の評価が気になり始めたということらしい。
サンドラは、そんな少女の背をさするように撫でた。
「スティールは十分女の子らしくて可愛いよ？　何より彼があなたを選んだことの方が大事だと思うけどなぁ。」

魂に記憶を抱いて転生することが可能なのか。
そしてそれは成功したのか。
記憶がないままに二人は出逢い、そして彼自身が少女を選んだ。

そんなことはサンドラは露ほども知らなくても、その言葉はスティールの胸に沁み込んだ。

「私には、彼の様子は…恋しているように見えたよ。画面越しだけどね。恋というよりもっと深いものがあるというか…不思議だね、まだ出会って間もないのにね。」
さすさすと、じんわり背中から伝わるぬくもり。
「スティールだって、テレビ観るまでは不安なんて感じなかったんでしょ？　二人でいるときはそんなもの感じないんでしょ？」
「うん…。」
こくりと頷いて。
「あたし、本当に世間知らずだなぁって思った。なんとなーく有名人って判ってたけど、一般的な視聴者とかファンの反応なんて解ってなかったし…なんか怖いっていうかね。
うん、やっぱり怖いのかな？」
小首を傾げながら、自分自身に問うているかのようだ。
「もっと普通の人なら良かったのに…。」
ごく一般家庭の生まれ同士だったならば。
出会う確率も低かったかもしれないけれど、こんな風に不安は感じなかったのに。きっと。

くすりとサンドラの唇が動いた。
「スティールらしい～殆どの人は彼が普通じゃないから好きなんだよ？」
容姿端麗頭脳明晰でお金持ちで。それなりの地位も持っている二十代の青年。
それだからこそ人目を引き、肩書きや見目形を目的に近寄る輩の方が圧倒的に多いだろうに。
「何も要らないのに。有名人じゃないローレンスの傍にいたいな。」
両手の指を組んで吐息をつく少女は、きっととても珍しい人種で。
それだからこそ、人の内面を見抜く能力に長けた青年が選んだのかもしれないとサンドラは推察している。きっとビクトリアも。
「…そうだね、それがスティールなんだもんねぇ。」
そんな少女の友人であることが誇らしく、この微笑ましい恋路を応援したくなる。
「あ、そろそろ固まったかな？」
冷凍庫からバットを取り出してキャラメルを切り分けパラフィン紙に包んでいると、いつものごとく計っていたかのようにスティングが現れたのだった。

珍しく二人にも褒められて自分でも満足のいく仕上がりになった生キャラメルを保冷袋に入れて、スティールは自分のリニアカーで帰途に着いた。一人きりの空間になり、家に着くまでの時間に電話でも掛けてみようかという気持ちになる。
自動運転で勝手に家まで走ってくれるので、はっきり言って何もすることがないのだ。
端末を取り出してリニアに装備されている二十インチパネルに接続してからコールすると、待つほどもなくローレンスの笑顔が映し出された。
『クラブ活動お疲れ様。』

「おつかれさま～。」
釣られて微笑んで、ほっと安心する自分がいる。
「今大丈夫？　お仕事中じゃない？」
『自宅で作業中だから大丈夫だよ。』
「そっか…。あのね、今日のお昼…テレビで…。」
恥ずかしそうにもごもごと言い淀む少女に、やや驚いて青年が応じる。
『あー、観てたんだ？　てっきり観てないだろうと思ってたんだけど。』
ローレンスの方も照れ笑いを浮かべながら、左手でくしゃりと前髪をかき上げた。
「うん、いつもは観ないしあたしも知らなかったんだけど、サンディが気を利かせてくれてね～。で、その…あれって…やっぱり、あたし？なのかなぁ。」
『当たり前じゃないか！』
今にも画面から飛び出してきそうな勢いでローレンスが言った。
『僕は会社の宣伝の為にリップサービスはするけど、芸能人じゃないんだから嘘を電波に乗せたりしないよ。きみ一人にしかこんな気持ちを抱いたことはない。』
液晶越しにじっと見つめられて、スティールはぼうっと見惚れつつも赤面してしまう。
『きみだけだよ。僕が自分から申し込んだのは。』
紫に縁取られた黒曜石のような瞳に吸い込まれそうになる。
「そそそうなんだ…。えと、嬉しい、です。」
どもりながらも何とか気持ちを伝えて。
やはり二人きりだと不安よりも嬉しい気持ちが先に立つことに気付く。
『良かった…。』
向こう側では、ローレンスもほっと微笑を浮かべていた。
『明日は会えるね。』

待ち遠しいよと、囁くその声に胸が締め付けられる。
「うん。あたしも会いたいな。」
正直に言っただけなのに、それだけでローレンスもとびきりの笑顔になるから。
こんなあたしでも、誰かを幸せな気持ちに出来るんだなって、余計に嬉しくなってしまうよ。
「あのね、今日は生キャラメル作ったんだけど、あたしにしては大成功だったの！　持って行くから、一緒に食べようね。あ、甘いもの、平気かなぁ？」
『あまり食べないけど、スティールが作ったものなら食べたいよ。楽しみだなぁ。』
えへへと照れ笑いしながら、ようやく手製の菓子を食べてもらえることに緊張したりもする。果たして舌が肥えているローレンスを満足させることが出来るのかと。

まずいとはっきり言うのはスティングくらいのもので、シャールもローレンスも、例え塩の塊が入っていたとしても美味しいといって食べてくれる類の人種であることなど…まだスティールは気付いていないのだ。

こうして顔を眺めて話していると、今度はその顔に触れたくなってくる。
どきどきと高鳴る胸に突き動かされるように、スティールはそっと右手の指先をパネルに這わせた。
その様子は、勿論自室にいるローレンスにも伝わっている。
機械のぬくもりを感じてはっと握りこめられる指。
今度はローレンスがそっとパネルに指を伸ばした。
『こんなに近くに見えているのに触れられないなんて。』
「…ん。」
スティールももう一度指を伸ばした。

画面越しに触れ合う指先は、直接交わることはないけれど。その熱も脈拍さえも伝わってくるようで。

昨夜会ったばかりだというのに、どうしてこうも寂しくなるのか…。胸の奥がぎゅっと締め付けられて、息が苦しくなる。

無言で視線を交わす二人の時間は止まったかのようで。

しかし確実に時は動き、リニアカーは日々の仕事を全うして自宅の駐車スペースに滑り込むようにして停車した。

スティールは、はふ、と息をつき、名残惜しそうに手を引っ込めた。

「うちに着いちゃった。…じゃあ、また明日。」

『うん、また明日ね。』

ローレンスも手を引いて微笑んで、バイバイと手を振った。

また明日、と気軽に交わせる約束がどれほど欲しかったものか。

その幸せを噛み締めていたいと、真摯に願う。

この気持ちがうまく伝わりますようにともう一度微笑み返してから、そっと終了ボタンを押した。

3

翌朝も天気は上々、刷毛で掃いたような筋雲がうっすらと浮かぶ中、またしっかりと保冷した状態で生キャラメルを鞄に仕舞い登校するスティール。うっかりすると妄想ワールドに入り込んでしまいがちな自分を窘めてなんとか授業を受け、放課後になるや駆け足で図書館に向かった。

入り口でＩＤをかざすのももどかしく思いながら、今度は少しペースを落として息を整えながらいつもの閲覧コーナーに向かう。まだ弾んでいる息のまま書棚の影から顔を出すと、壁に背を預けて右膝を立てて座っていたローレンスが、スティールに向けて左に振り返った。

「スティール。」

柔らかく呼ばれて、今にもその胸に跳び付きたい衝動をぐっと堪える。

「こ…こんにちは。」

上手く言葉が紡げなくて、息を整えようと足を止めた少女を青年が振り仰ぐ。

会いたかったの。

今は、あなたに触れたいよ。

視線と視線が絡まる。やや不思議そうに見上げていたローレンスがふわりと微笑んで、左腕を伸ばした。

「おいで。」

ひらりと手の平を上に招く腕に、誘われるように右手を伸ばしながら前に進み出る。

指先が触れて。革靴を脱ぐ動作ももどかしく、視線を絡めたまま足だけで脱ぎ捨てる。行儀が悪いと頭の片隅では思いながら、今は

そんなこともどうでもいいと思った。
重ねた手の平を握って優しく引かれると、左手に下げていた鞄をそのまま足元に落として、スティールはローレンスの懐にすっぽりと納まってしまった。
途中で反転するように回された右腕が背中に回されて、立てた右膝にもたれるように仰向けに抱かれている。
まだ繋いだままのもう片方の手が指と指を絡めるように握り直されて、そんな柔らかな刺激が体の奥の何かを呼び覚まそうとする。
はぁ、と熱い息を吐きながらもう潤み始めた瞳は隠しようもなくて、それに本人は気付いていないけれど、対する青年は目を細めてその反応を受け止めた。
「嬉しいな…。」
ゆっくりと近付けて左の耳元で囁くと、少女の肩が震えた。
「昨日から、凄く求められている気がするんだけど。」
ぞくぞくと背筋を這い上がる快感に、堪らず目を瞑ってしまう。
気のせいじゃないよね、と囁いて耳の後ろを舌が這い、今度は背筋が仰け反った。
夢中で動かした左手が、ローレンスの頬に触れて、滑らかな肌の上をたどたどしい動きで指先が伝う。
「ローレンス…っ、」
その指先にそっと舌が這わされて、もう何処にも力が入らなくなり、スティールは眦から涙を零さんばかりに青年を見上げた。その時。
「はい、お邪魔さまーっ！」
ズカズカと物怖じしない足音が書棚の向こうから現れ、香色の髪を今日もあちこちにはねさせた少年が、どかっと閲覧コーナーのカーペットに腰を下ろした。
「校内でそんなエロイことしちゃいけません。」
きっぱりと言って図々しく二人の傍に居座る気満々の少年は勿論スティングである。

「な…なな…っ！」
あまりの衝撃に硬直して言葉も出ないスティールは、自分が今どんなポーズなのかも頭から消えている。
そしてそんな少女を離すつもりは毛頭ないローレンスは、面白いゲームが始まったとばかりに唇の端で笑っていた。
気配は消しているが入り口付近で控えているはずのアンジェラが通したからには、何か意図があるのだろう。全くの他人だったら、何か合図があるか、やんわりと遠ざけるように指示してあるからだ。
「普通にスキンシップして親睦を深めているだけなのに、酷い言われようだなぁ。」
わざとらしく溜め息をついて、ローレンスは音を立てて指に口付けをした。
肩を震わせる少女を横目で見ながら、
「いやそれ公衆の面前でやることじゃないから。てゆーか、その座り方がそもそもどうなんだよ…。」
と冷静に突っ込むスティングに対し、
「それは失礼したね。公衆がいるとは思ってもみなかったもので。」
と返すと、
「いやここは公共の場ですからー。」
とすかさずまた返ってくる。
高揚が去り居たたまれなくて身じろぎするスティールを離さないように、手を握り直し、
「でも楽だよね？　このままで。」
と腕の中の少女に問う。
スティールにしてみればお姫様抱っこされているも同然なので、そんなに恥ずかしい格好というわけでもなく…ただそれは誰も見ていなければの話ではあるのだけれど、当人にしてみれば「事情を知っているスティングなら構わないかも？」という程度の認識しかない。
そういうところにローレンスの付け入る隙があるわけで。

体温と鼓動に少女がひどく安堵することを知っていて、わざととっている体勢なのだから。
こくりと頷き、無意識に胸元に頭を摺り寄せるその仕草を…スティングもしっかりと目にしてしまい。
「うわー…っ。」
と驚きと落胆の入り混じった悲鳴が漏れた。
「なんなんだよ、それ。」
勿論人生十七年共に育ってきたスティングでも、そんな表情や仕草は初めてのことで、それが自分に向けられてのものではないことに当然ながら腹が立つのだ。
む、と口を引き結びながらも、スティングはそのまま靴を脱いでカーペットの上に上がりこみ、適当に選んできたらしい本を開いた。
ここは閲覧コーナーであるからして、その行為に対しては文句の言いようがないわけである。
そのまま特に話し掛けてくる様子もないので、このままだと居眠りでもしそうなくらい心地良くなっていたスティールは、そっとローレンスに囁いた。
「キャラメル、食べよ？」
「ああ、うん、そうだったね。」
ふわりと微笑んで左手を解いたローレンスが、少女の鞄を引き寄せた。
スティールは一旦背中を起こしてその中から保冷袋を取り出すと、個包装のパラフィン紙を解いて、当然のようにローレンスの口に入れた。すぐに溶けてしまう滑らかな菓子を嚥下して、「美味しい。こんなの初めて食べたよ。」と賞賛の言葉が紡がれる。
何処から見てもラブラブのカップル、なのだけれど。
「あー、それなー。スティールの人生初の成功例だよなー。」
棒読みで台詞を読んでいるかのごとく、目線は紙に落としたままスティングが突っ込みを入れた。
それは取り敢えず無視して、

「あ、水筒だけど紅茶も持ってきたよ。」
と再び鞄から取り出せば、
「あ、俺も欲しい。」
と腕が伸びてくる。
「あーもう外野は黙ってて！！」
堪りかねてスティールがきつい眼差しを向けると、
「ひでー。なんか扱いに差が有り過ぎるんですけど…！」
と大袈裟に打ちのめされた様子でスティングが泣き真似をした。
当然ながらそんなものには騙される筈のないスティールは、
「あんたに飲ませるために持ってきたんじゃなーい！」
と憤慨する。
まったくもう、憩いのひと時に乱入してくるなんて信じられないよっ。ぷりぷりと怒りながらも熱々の紅茶をカップに注いで、ローレンスに手渡すときにはしっかりと笑顔になっているから、幼馴染みの少年は居たたまれない。それでもこの場を去るわけにはいかないとばかりに、ふんと鼻を鳴らしてページをめくった。
ローレンスの方はといえば、そんな少女の対応に優越感も感じながら、少年との遣り取りもまた面白くてたまらない様子だった。

4

しばらくそうしてお茶の時間を楽しんでから、ふとスティールは真顔になった。

「あたしね、こないだシャールにも、ローレンスとお付き合いしていること話したの。黙ってるの良くないし、あたしはシャールに嘘なんかつきたくないし。」

足に凭れるのをやめて背筋を伸ばした表情は、先刻までの寛いだものとは別人のように強張っていて。付き合いの短いローレンスにも、そして同じ年月を生きてきたスティングにも、それは何かを耐えているときのものだと判った。

軽く頷いて青年が先を促すのを確認し、また口を開く。

「そうしたら、シャールが凄くショックを受けちゃって…その様子が、なんていうか本当にこの世の終わりみたいな、そんな受け止め方なの。あたしの説明もそれ以外の言葉も何一つ届いていなくて…。その時あたし、生まれて初めて…シャールのこと怖いって思っちゃって……。」

思い出してぶるりと肩を震わせ、ローレンスがそっと手を添えた。

「…あんなに大好きだったのに。」

ふるりと首を振る。

「ううん、今でも大好きな気持ちに変わりはないよ。だけど、その好きはシャールが求めているものとは違っていて…そのことを伝えても受け入れてもらえなくて…。怖くて。

でもあたし、シャールになら殺されてもいいって、仕方ないって思う。」

「スティール。」

眉を顰めて、肩に置かれた手の平に力がこもる。

「うん、勿論死にたくなんかないよ。けど、あたしにはシャールの願いは叶えてあげられないって…なんとなく解ってるんだ。不可能

か可能かってことなら可能なんだけど…あたしは、こっちの暮らしを捨てられない。あたし、こっちで生きていく。今までみたいに定期的に会いに行くよ、シャールが望んでくれる限り。何かあったら飛んでいって、シャールを助けたいと思う。でももうきっと…絶対とは言えないけど…シャールが望んでいるような想いは返せない、ような気がするの。」

言いたいことは全て言えたかどうかわからないけれど、今の時点での気付きを告げて、それぞれに黙して聴いていた二人を見遣った。

「はー、シャール真面目すぎっ。付き合ったって別れることもあるって知らねぇのかよ？」

パタンと本を閉じて、スティングがスティールに目を合わせた。

「別れないかもしれないでしょっ。そんな始まったばかりのときに不吉な言葉使わないでよ～！　デリカシーないなぁもうっ。」

いつものように軽口で返しながら、それでも想いを籠めた瞳は真剣なまま。

「ローレンス、ついでにスティングも、」

「ついでにって、」

「あたしを好きになってくれて、ありがとう。」

泣きそうなくらい本気の言葉が、空気を震わせた。

束の間動きを止めたスティングは、困ったように顔を歪めてそれから笑顔になった。

「…なんだよ、それ。」

ローレンスは口元を綻ばせて、無言のままこつんと軽く頭をぶつけてきた。

「あーもうなんだかなぁっ。」

左手でくしゃくしゃと自分の髪を掻き回しながら、どうしていいか判らない様子のスティングに対して、本当はローレンスはキスの嵐を降らせたくて、取り敢えずは我慢している様子だ。

閉館の音楽が流れ始めて、スティングも本日のノルマは達したとばかりに腰を上げた。
はあ、と溜め息をついて、手にした本の背表紙でトントンと自分の肩を叩きながら、片付けを始めたスティールを見下ろす。
「あのさ、オレはシャールと違ってんなに深刻に悩むタチじゃねえし。ついでに多分気も長いから…。お前がローレンスさんに振られて泣いて縋りついて来るまで待ってるから。」
「はぁあ！？」
驚いて目を見張る少女の後ろから、
「そんな日は永久に来ないよ。」
とローレンスが不敵に微笑んだ。
「未来は誰にもわからない、てね。」
スティングも精一杯意地悪く微笑んで見せると、靴を履いて鞄と本を脇に抱えて出口に向かっていった。

「なんだか変な感じになっちゃったね…。」
申し訳なさそうにスティールはローレンスを振り返った。
「いや、これはこれで楽しいというか。」
くすりと口元を緩める青年を不思議そうに眺める。てっきり気分を害したと思ったので、それならそれでいいかと思うけれども。
そして保冷袋をそのまま彼の手に渡した。
「良かったら、おうちで食べてくれるといいなぁ。頭使うお仕事だし、たまには甘いものも必要だよ？」
「じゃあ頂くね。」
受け取って、二人も腰を上げた。
名残惜しげに靴を履きながら、あのぅ、とスティールが口を開いた。
「もし、この後時間があれば…でいいんだけど、」
「うん？」

「い、一緒に日没でも眺めたりなんか…しない、かな？」
上目遣いに恥ずかしそうにしている様子が可愛くて仕方なくて、ローレンスは思わずその場で抱きしめてしまった。
「勿論！」

選んだのはあのシャールとのお気に入りの場所。そう、転生前のディーンがシャールの体を借りて座っていたあの土手だった。
夏の初め、一緒に夜明けを眺めたのと同じ場所で、今度は転生後のローレンスと日没を見ようと昨晩不意に思い立った。
五十メートルほどの緩やかの傾斜の下に広がる草地と川を眼下に、整備された道路から体が隠れる程度に下りた場所に二人並んで腰を下ろす。
乗ってきたリニアは道端に寄せて停めたけれど、元々交通量の少ない道路なので問題はなさそうだった。
もうじき本格的な冬がやってくる。とはいえ、セントラルは比較的温暖な都市なので、たまに雪が降る程度で過ごしやすいのだけれど、日没の時間はもうかなり早くなっていた。
真っ赤に焼けた空は川面にも映り、反射してとても美しい。大きな太陽の上に行くに連れて青い空と夕焼けが混じり紫のグラデーションを作っている。そして更にその上には、輝きの強い星が瞬いていた。
いろいろな要素が交じり合うこの時間が好きで、ついつい足を運んでしまうのだけれど。
「誰かと二人で眺めるのはいいね…。」
丈の短い草の上に膝を抱いて座り、スティールは傍らの青年にそっと頭を凭せ掛けた。
「綺麗だね、本当に…なかなか自分一人ではこんな機会は持てないよ。ありがとう、誘ってくれて。」
その肩に腕を回して、ローレンスが応じた。

何故だろう。ずっと昔にも、同じような光景を見たような気がするのは。

イーストエンドはこちらより更に自然が豊富で、シュバルツ家はかなりの面積を有する庭のある邸宅なので、過去にこのような土手に日没を眺めに出向いたことなど無い筈なのに。

「どうしてっ！」

大粒の涙を零して、自分の胸に縋り付いて来た少女は。

確かにスティールだった。

「僕は…此処に来るのは初めての筈なのに……？」

幻視のように脳をちらりとよぎった顔は、今隣にいる少女のもので。

「どうかした？」

きょとんと見上げてくる少女は泣いてなんかいないのに、また一瞬泣き顔が重なって見えて、瞬きで振り払う。

指先で軽くこめかみを押しながら、もしかしてこれが、と呟いた。

過去の記憶…なのか？

「スティール、以前ここにディーンと来たことが…？」

肩に置いた手を滑らせて、紅茶色の髪に指を絡めて弄ぶ。

「あるよ、一度だけだけど。」

あ、もしかしてよくなかったかなあ？　ごめんなさいあたしそういうこと、良く判ってなくて…。答えてから途端に謝罪してしゅんとしてしまった少女に、ローレンスは頭を預けた。

「そういうのじゃないんだ…大丈夫だよ、ごめんね。なんだかそん

な気がして、訊いてみたくなっただけだから。」
「そうなの。」
ほっと息をついて、そういうことなら…と続ける。
「えーと、だったらね、週末一時限授業が少ないから、良かったら映画でも観に行かない？　」
「え。」
襟元で動いていた指先が止まり、ローレンスは頭を上げるとまじまじとスティールを見つめた。
「確か父も出張だったし…夕食でもいいけど…。あ、やっぱり街中はまずいかな？　バレたら大騒ぎでデートどころじゃないもんねぇ…。」
膝を両腕で抱えたまま、その指先は戸惑いがちにもじもじと動いている。頬が赤いのは、半分沈んだ夕日のせいばかりではなさそうだ。
「行く！　絶対行くっ！」
ごにょごにょと続けそうな言葉を遮り、ローレンスは両手でスティールの肩を掴んでその上半身を自分の方に向けさせた。
「嬉しいよ、まさかこんなに早くデートに誘ってくれるなんて…此処に連れてきてくれただけでも十分満足していたのに。夢みたいだ…。」
長い睫毛の奥の黒曜石のような瞳が、揺らめきながらスティールを映している。　川面に反射した光が僅かに差し込み、闇の色と深紫と紅の混じった世にも美しい瞳が、ただ一人の少女にまっすぐに向けられていて。恥ずかしい気持ちも何処かに忘れてしまったかのように、スティールはうっとりと魅入られていた。
こんなに喜んでくれるのなら、もっと早く誘っておけば良かった…。
あたし、変な心配ばっかりして、ディーンの時には人目なんか全然気にならないほど、彼を楽しませたいってそれだけに一所懸命になっていたのに。どうしてローレンスのこと、もっと気遣えなかっ

たんだろ…。
ローレンスはきっとそんなあたしの迷いも気付いてて…それで待っててくれたんだろうな…。シャールの話とかされて、イヤにならないわけが無いのに。

そのまま、どちらからともなく顔を寄せ合い、唇が重なった。静かに互いの熱を感じながら、スティールも無意識に青年の首筋に手を這わせ求めていることを伝える。

自分に自信がないのはどうしようもなく。すぐにどうにか出来るものでもないから。
目の前の彼が求めてくれているものが全てで、あとは自分が納得できるまでがんばって自己研鑽するしかなくて。
それでもきっと、相手をどれだけ幸せな気分に出来るか、そっちの方が大事なんだと思う。
大事な人が、どんどん増えていって、もしかしてそれが相手を不安にさせることもあるかもしれない。
あたしが出来る精一杯のことは、その人に対して誠実にすること。
お父さんもお母さんも大事で、そしてシャールが、リルが、大事で。スティングも好きだけど、ちょっと違うかな？　そしてディーンと出会って、ローレンスにも惹かれていて。

ようやく、少しだけど解ってきた気がするよ。皆が言っている「好きな人」の意味が。
こうして体のぬくもりを分かち合って、心も体も繋がっていたいと感じることが、そういう意味の「好き」なのかなって。
そんな気持ちは今まで誰にも感じたことが無くて、あたし知らなかったんだ。
どきどきして胸が高鳴っているのに、安心してしまって。あなたのちょっとした　指先の動きや瞬きなんかが、気になってしまうだな

んて。
触れそうなほどの距離のまま唇を僅かに離してローレンスが囁いた。
「こんなに誰かを愛しいと感じたことはないよ…。」
柔らかく見つめる眼差しが、これ以上はないくらいに優しくて。
「…ローレンス、あたし、」
声が、掠れた。

「あたしだって、――――のこと、ちゃんと好きだからね！」
精一杯伸ばした腕で指を絡めて、必死で自分を見つめていた少女が、今目の前にいる。

はっと息を呑んで、また瞬きで幻影を振り払った。

まだはっきりと自分の気持ちに名前を付けられないまま、スティールは大きな瞳を揺らめかせて青年を見つめた。
「あたしは…。」
これが本当に恋愛感情なのか、まだはっきり決まっているわけじゃなくて。そんな曖昧なもので彼をぬか喜びさせてもいいのかと逡巡する。
それを正確に受け取ったローレンスは、もう一度軽く唇を啄み言葉も摘み取った。
「いいんだ、言葉で気持ちにレッテルを貼らなくていい。僕は待っているから…。」
なによりも、こうして瞳で多くを語ってくれて、態度で示してくれている。本人にどれほどの自覚があるのかは判らないけれど、それで十分満足だった。

急がなくていい。ゆっくり歩もう。
そう感じられる幸せが愛おしい。
まだ時間ならたっぷりあるから、焦らなくていいんだと、言葉でも態度でも伝えてくれて…それがとても安心させてくれる。
ああ あたし、この腕の中が好き。
シャールのふかふかの毛皮に埋もれて日向ぼっこしているのとは、また違った安堵感があるの。

つるべ落としのように夕日は急速に沈んでいった。
結局殆どは互いに視線を絡ませていたため、視界の隅にしかその様子は映らなかったけれど、二人にとってはこれ以上ないくらい充実した時間だった。

5

「あまり暗くならないうちに帰ろうか。」
少女の手を取り、ローレンスがゆっくりと腰を上げた。
「そうだね、また映画の時間とか調べて電話するね。」
空いたほうの手でパタパタとスカートを払いながら、スティールは答える。
「待ってる。」
ふわりと微笑むローレンスと別れの挨拶を交わして、見守られながら自分の一人用リニアカーに乗り込んだ。殆ど真四角の外観にとってつけたようなささやかなボンネットが付いている一般的な通学用リニアだ。
去っていく車を見送ってから、ずっと車内で待機していたアンジェラに促されて青年も乗車する。
仕事用には、今で言うロールスルイスのような大型のリニアモーターカーを利用しているのだが、学園では目立ちすぎるので、登下校時は四人乗りタイプの流線型のリニアの後部席にアンジェラと同席するようにしている。但し、硝子は完全防弾性で車体も相当頑丈な素材で作られているオーダーメイドだけれど。
「本当に微笑ましい光景ですこと。」
「ふふ、皮肉なら通じないよ？」
「本心です。」
溜め息と共にリニアを発進させて、アンジェラは隣の主を横目で見遣った。
「スティングを通したのも『微笑ましい』からかい？」
「勿論、それに今日は予想以上の効果もあったようですし…。」
不敵に微笑む年上の部下に笑みを返し、ローレンスは頷いた。
胸の前で腕を組み、少し考える様子を見せる。
「…色々とスティングのお陰かもしれないな、あの子の態度が変わ

ってきたのは。」
「気の毒に、それじゃ当て馬じゃないの。」
くすくすとアンジェラが笑い声を漏らす。
「いいんじゃないの？　何もなければただの幼馴染みのままだったわけだし。僕がカンフルになって彼が荒療治したってところかな。」
左手の甲を顎にあて、プライバシー硝子越しに風景を眺めながら、しみじみと言った。
シティの中央部に近付くに連れて、街灯の数が増えて人工的な明るさに包まれていく。
「シャールとどんな経緯があったか詳しくは知らないけれど…今のところ、僕の方を選んでくれているようだし。それに……。」
珍しく言い淀み思案している主に、アンジェラは物珍しげな視線を投げた。相槌は打たずに次の言葉を待つ。
「それに、どうやら彼女の言っている〈転生〉の話、真実らしいよ。」
アンジェラははっと目を見張った。肩の上で切り揃えられた金の髪もぴくりと跳ねた。
「明らかに体験していない出来事が、声と一緒に目の前に再現されたんだ、今日二回も。恐らく、あの子とディーンの思い出に被る出来事や場所に触発されているんだと思うけれど。」
真実味のないことならば口にしない主である。夢や幻ではないと確信しているからこそ告げたのだろう。
「それはまた…興味深い話ですわね。」
「これからも多分こういう機会があって、徐々に色々と思い出すんじゃないかな。それとも何か大きなきっかけがあれば、一度に全て思い出すのかもしれないし。」
見るともなしに風景を眺めながら思案していた瞳に輝きが戻る。
「どうなるにしろ、面白いね。」
「ええ、私もこれからどうなるのか大変楽しみですわ。」
ふふ、と笑いながら、アンジェラは手元の携帯端末に視線を移し

た。
のんびりするのも良いが、本日のスケジュールが押している。
「ローレンス様、部屋に着き次第オンライン会議を始めたいと思いますので。」
うう、と唸り声で応じながら、ローレンスも気持ちを切り替えた。
とっとと全ての仕事を切り上げて、美味い酒でも飲みながら、もう一度あの子の事を考えるとしよう。

帰宅すると、いつも通り夕食の用意を整えた母親が、翌日の仕込をしながら娘の帰りを待っていた。
一旦自室に上がり部屋着に着替えて手洗いも済ませてから、スティールは食卓に付いた。今日もジルファは銀の界に行ったままなので、リルフィは機嫌良くダイニングテーブルの高さに合わせてしつらえられた自分の止まり木で食事している。
母親が料理好きなこともあり、ダイニングキッチンはリビングとは繋がっているものの、コンロなどが壁際にあり割と独立した形になっている。がらんとした十二畳のリビングを背後に、今日も帰りの遅くなるらしい父親の分を取り置いて母子二人で食事を始めた。
「久し振りにゆっくりしてたのねぇ。」
スープで喉を潤してから、母親が口を開いた。「遅かったのね」とは言わない心遣いが娘には嬉しい。
「うん、ちょっと夕日を見てたの…。」
「そうなの。あそこは絶景よね〜。でもシャールもいないんだし、一人ではちょっと危ないわよ？　いくらここいらが治安が良いって言っても。スティングが一緒なら安心なんだけどねぇ。」
ほう、と心配そうに息をつく母親に、ぴくりと首を上げてリルフィが視線を向ける。
きっと「あいつが一緒の方が危険だっつーの！」とでも言いたい

んだろう。
「あの、えと、実は今日も一人じゃなかったっていうか…っ、」
どもりながら弁当の時のように手元のハンバーグをぐしゃぐしゃに崩すスティール。顔色は既に真っ赤である。
あら、と手を止めて、母親はじっと娘の顔を見つめた。相手がスティングならば、こんな反応はしないだろうことは明白である。
「もしかしてボーイフレンドでも出来た？」
まさかと思いながらも、期待に目を輝かせて身を乗り出す。
「あ、う…うん…あのっまだお父さんには内緒にしてて…？」
恥ずかしそうに肯定するスティール。
「わかったわ。あの人ったら、ホントに何でもかんでも心配してねぇ。女同士の秘密ね？」
私があなたくらいの頃にはね、週末なんかいつもデートの予定でいっぱいだったのよ？とか、ああ娘とこんな会話をするのが夢だったのよ～と喜色満面の母を前に、娘の方があっけに取られてしまう。
「それで、どんな人なの？　同級生なの？　かっこいい？？」
矢継ぎ早に質問してくる母親の視線をかわしてリルフィを盗み見ると、そ知らぬ振りをして食事を続けていた。
「うん、とってもカッコいいよ。あのね、ローレンスっていうの。大学部の人。」
別に隠しても仕方ないので、本当のことを教える。
「まぁそうなの～。なんだか高貴な雰囲気のお名前ねぇ。年上って素敵だわ。ちょっとスティール！　デートに行くならもっとちゃんとした服を揃えなくちゃ！　今度買い物に行きましょ？」
「そ、そうかな？」
今まで洒落っ気のなかったスティールは、母親の指摘に動揺する。
「あ、この週末映画に誘ったんだけど…やっぱり持ってる服じゃダメかな？」
うーん、と娘のクローゼットの品揃えを思い出し、母親は唸った。
「野原で転げまわれるようなカジュアルなのしかないと思うんだけ

ど。あぁやっぱりもっと年頃の女の子が着る可愛いのがいいわね。こないだカタログに載ってたのがいいわ。あれ、この後すぐに注文するから。それならあなたのサイズなら明日にでも届くから大丈夫よ。」

とにかくもう嬉しくて仕方ないらしく、本人よりも楽しんでいる様子の母を見て、スティールは一安心した。

反対されたり叱られたりするとは思っていなかったけれど、親に認められて付き合えるならばそれに越したことはない。

頭の中で色々とデートの格好を考えている母親に向けて時々頷きながら、スティールはばらばらに分解されたハンバーグを口に運んだのだった。

入浴後に全身を映す鏡の前でちょっとウエストの辺りを気にしてみたり。普通の少女ならば何気なくやっているであろうことをようやくしてみせるようになったスティールをリルフィは微笑ましく眺める。

部屋に戻ると、髪を乾かしてから指でくるくるとまとめてアップにしてみたり、俄かにヘアスタイルまで気になるようになってしまったらしい。

「うー。長すぎるとくくるのも大変だなぁ。やっぱりちょっと切ろうかなあ。」

そんなことをぶつぶつと呟きながら、鏡の中の自分に不満顔だ。

「ねぇリル、やっぱりあたし、このままだと子供っぽい？」

鏡の中から目を合わせて、質問が飛ぶ。

『子供っぽいってことはないけど、ちょっと無頓着過ぎただけなんじゃない？　大丈夫よ、素材は良いんだし着飾ればもっと可愛くなるわ。それにその髪、さらさらで素敵じゃない？　私は巻き毛だから羨ましいわよ。』

止まり木から答えると、スティールは目を輝かせて振り向いた。

「リルって巻き毛なんだ！　サンディみたいな感じ？」

『んー、あそこまできつくはないけど、ウェーブの中では割と巻き方がきついかしら。』
以前家に遊びに来たことがある友人の姿を思い出しながら答えると、更に瞳を輝かせてスティールは止まり木ににじり寄って来た。
「うあ～！　リルの本当の姿、見たい見たい～っ！　ねっ、今度界渡りしたときに戻ってよぅ。ジルファさんがいないところでならいいんでしょ？」
期待に満ちた眼差しにたじたじと押される。
『え…まあその…そうだけど…。でもシャールの傍には絶対付いてきてるでしょ？』
「あー…そっかぁ…むう。残念～。けどいつか絶対見せてね？　約束ね？」
ぱっと気持ちを切り替えてじっと見つめられる。リルフィは大事な少女のお願いには、とことん弱い。
『わかったわ。じゃ〈いつか〉ってことで、約束ね？』
渋々頷くと、スティールは両手で万歳して喜んだ。

6

二人にとってはじりじりと長い平日が過ぎて行き、ようやく待ちに待った週末が訪れた。

それまでには予定通りスティールの母親が注文した服やハンドバッグなどの小物も届き、昼休みにサンドラに髪を結ってもらったり放課後にリニアの中で私服に着替えたりして準備万端で待ち合わせ場所のオープンカフェに向かった。リニアカーは制服や荷物と共に有料の駐車場に停めて来ている。

ローレンスは元々午後は講座を受講していないため、自宅から直接来ることになっていた。

そう、今まではスティールに会うためだけにもう一度学園に行っていたわけである。何とも涙ぐましい努力にも、実はまだ当の少女は気付いていなかったりする。勿論仄めかすような態度もとってはいなかったけれど。

近付いていくと、カフェの前の道で足を止めている女性がちらほらと目に入る。少し距離をおいて、連れと会話しながらチラチラと盗み見ている様子だった。

ああ～…もしかしてもうバレてたりして…。

冷や汗を垂らしながら、そっとその先に少女は視線を向けた。

道に面した席の隅で、ぐるりと鍔のある帽子を目深に被り、よく見れば目の大きさが判る程度に色の付いたサングラスを掛けた青年が、優雅に足を組んで新聞を広げながら紅茶を飲んでいた。ハイネックのボタンのないシャツとスラックスは黒。前を留めずに羽織っただけのコートは柔らかそうな素材のオフホワイト。

はっきりと顔が判るわけではないが、一目でローレンスだと判っ

た。
　どうやら盗み見ている女性たちも、誰か判ってというのではなくただ格好良いから声を掛けようか迷っている様子だった。互いに牽制し合っているかのような雰囲気だったのが返って都合が良い。今のうちにさっさとここから退散しなければ。

　すう、と息を吸って覚悟を決めると、スティールは早足でローレンスの席に向かい、一人用のランチセットでも広げればいっぱいになってしまうような小さな丸テーブルのもう一つの座席に腰掛けた。
「お待たせ。」
　約束の時間には十分早目に着いたものの、実際後から来たのだからとそう挨拶した。
　ふっと顔を上げた青年が、満面の笑顔で迎えてくれる。
「やあ。僕が勝手に時間を潰していただけだから…。」
　気にしないでと言いながら、嬉しそうにしげしげと見つめられて、スティールは両手をテーブルの下の膝頭に載せて突っ張りもじもじと頬を染めた。
通りから視線を遮るように背を向けて座ったので、背後から先程の女性たちの声らしきものがボソボソと聞こえて来る。
　なんだー、やっぱりオンナと待ち合わせしてたんじゃない。いこいこ。
　ざわめきが遠退いていき、ほっと肩を下ろす。どうやら少しはここにいても良さそうだった。
　ローレンスは広げていた紙媒体の読み物を畳むと、オーダーを取りに寄って来た店員に渡した。家庭で新聞を取っている人は少ないが、まだまだ紙に印刷された新聞も人気が有るので、このような飲食店では扱っているのである。
　白いシャツに黒いスラックスの制服を着た若いウェイターは、腰に巻いた黒いエプロンのポケットからこれまた紙のオーダー票を取り出して「いらっしゃいませ。」とスティールにお辞儀した。

「あ、ミルクティーを下さい。ブレンドはお任せします。」
「かしこまりました。お水はよろしいですか？」
「要らないです、ありがとう。」
短い遣り取りの間にも、ローレンスは微笑ましげに少女を見つめていた。
今日のスティールは、真新しくて女の子らしい服装に身を包んでいる。制服とパジャマしか見た事のない青年にはとても新鮮に見えるらしい。髪も結っているところは初めてだろう。
オフホワイトのタートルネックは、織り方で縦のラインが入って見えるようになっていて襟元と袖口と裾はフリルのようになっている。膝上丈のスカートはたっぷりとギャザーの入ったマーメイドスタイルで、淡い花柄が全体に織り込まれているのだが、癖のない柄だ。膝から下はタイトなロングブーツでシャツと同系色のオフホワイト。ヒールは五センチほどで歩きやすそうだ。そしてAラインの淡いピンクのコートが、母親が奮発してかなり質の良いものだった。全体的に可愛らしく、しかし幼くは見えないコーディネイトだった。
「あのぅ…変かな？」
未だもじもじと膝の上で手を動かしていたスティールは、所在無げにハンドバッグを膝から背中に回した。それからまだ会計が有ると思い直して膝に戻す。
「とんでもない。可愛すぎて言葉を失っていたところ。」
ゆっくりと微笑むと、やや前屈みになり囁いた。
「僕の為に…？」
途端にスティールはかあっと赤面する。
「そ…そう、です。でもあの、こんな服初めて着たからなんか変な感じでっ、」
青年の顔を直視することが出来ずテーブルに視線を落とし、サイドに少し残していた髪を指で梳いた。
「ありがとう、本当に嬉しいよ？」
そっと伸ばされた手が、髪をいじる指先に触れた。そのまま指先

だけを握りテーブルの上に下ろされると、丁度注文の品が届き音を立てずに茶器が並べられて金額を告げられた。
スティールがハンドバッグを開くより先に、ローレンスが空いているほうの手でウェイターに携帯端末を示した。心得て料金はそちらから即時に引き落とされる。
「あ、」と一瞬固まってから少し考えて、スティールは素直に「ご馳走になります。」と礼を述べた。
緊張しているのか、まだ表情も仕草もぎこちない。
こちらも律儀に「どういたしまして。」と返しながら、ローレンスは指を絡めた。
何処からどう見てもラブラブ空間が出来上がっている。それなのにまたしても予期せぬ闖入者の声が、店外から聞こえた。

「おー、いたいた。やっと見つけたー！」
聞き慣れたその声に、ぎょっとしてスティールが振り返ると…私服姿のスティングと、その後ろには両の手の平を顔の前で合わせて申し訳なさそうにぺこぺこと頭を下げているサンドラがいた。
タイミング良く、二人の隣のテーブルは空いていた。当然のようにそこに陣取りオーダーするスティングをあっけに取られて眺めていると、後ろから控えめに袖を引かれてサンドラが声を掛けてきた。
「ごめん！ほんっとーにごめんねっ！　スティングに問い詰められて誤魔化しきれなかったの～っ！」
大きな青い瞳にうっすらと涙を浮かべて、サンドラは屈みこんで謝った。
「う…スティングめ～っ！　一体どういうつもりなのよぅ。」
眦が釣りあがりかけた少女の手を、宥めるようにローレンスが握りこんだ。一気に緊張がほぐれた様子に、少し嫉妬すら感じているのだが、勿論そんなことは億尾にも示さない。
少女が目を向けると、ローレンスは軽く頷いて、
「一緒にお茶するくらい、いいんじゃない？」

と言った。
おお、大人の余裕だ～と少女二人はさざめいて、サンドラはもう一度青年にもお辞儀してから椅子に腰掛けた。
すっかり落ちきってしまった砂時計に気付き、ローレンスがスティールのティーカップに茶漉しを載せた。片手を握られたままのスティールは、戸惑いながらも給仕を任せる。片手でポットから注げる自信がなかったのだ。
ミルクの分余裕を見てから紅茶を注いでくれたので、蓋のない小ぶりのミルクサーバーからは自分の好みで注ぐ。少し甘いような独特の茶葉の香りにうっとりしながら、軽くかき混ぜてからカップを口に運んだ。
その共同作業を見るともなしに見てしまった隣のテーブルの二人は、はああと大きな溜め息をついた。
「なんだかなぁ…。」「凄く独特の雰囲気っていうか。」
スティングのは落胆交じりの、サンドラのは驚嘆の溜め息だったのだけれど、ん？とスティールは不思議そうに首を傾げた。
無言で「何か変？」と訊いているのだが、敢えて二人とも微苦笑するに留める。　普通そこは一旦手を離して自分でするでしょう、とは突っ込まない。
スティールも頓着せずに、紅茶をゆっくりと味わっている様子だ。口内から鼻に抜ける香りにうっとり身を任せて、またその様子を向かいの青年が幸せそうに見つめているのがスティングには居たたまれない。会える時間や回数は限られているはずなのに、どうしてこうも馴染んでいるのかが不思議だったし、見た事のないような服装でいそいそとデートしている姿も心外だった。
とにかくスティングにとっては、「有り得ない」ことばかり目の前に突きつけられて驚きの連続なのだけれど、それで自分が傷付いたとしてもやはり二人きりの時間はなるべく邪魔してやろうという魂胆なのだった。
スティールにしてみたら、ディーンにもお茶を淹れてもらった経

験があるので、さほど違和感を感じず自然に受け入れてしまっているのだけれど、それを本人も気付いていない。相手に負担を感じさせずに当たり前に振舞うあたりが、ローレンスの魅力なのかもしれない。

そうしている間にもスティングの頼んだ品々が並べられた。自分用に珈琲とホットサンドのセット。サンドラには勝手に選んだらしい紅茶とシフォンケーキ。どうやら奢るらしく一人で勘定している。

ふーん、と横目で見守りながら、既に落ち着きを取り戻したスティールは、心の中でサンディがんばれ！とか、一応これでもデートっぽいしいいんじゃないかとか、二人のことを考えていた。

それからずっと繋いでいたままの左手のことを思い出し、ふと視線を戻すと、同じタイミングでローレンスも目を合わせてくる。スティールの考えそうなことを推測していたのかもしれないが、流石の間合いだった。

「僕は十分楽しいよ。」

そっと、スティールにだけ聞こえる音量で告げられて。

こくりと頷きながらじわりと胸の中が温かくなる。

こんな風にさりげなく言葉にして伝えられて、気に病まなくていいんだと言外に感じさせてくれる。その優しさにずっと甘えたまま、自分はローレンスに何が出来るかと色々考えても見たけれど、まだはっきりとは掴めずにいる。

飲み干したカップにお代わりを注いでくれている手つきを眺めながら、スティールは絡めたままの手を持ち上げて、そっとそのまま自分の頬に当てた。テーブルが小さいので、そんな仕草すらも容易に出来てしまう。

思案している少女の頭からは、ここが何処だとか隣のテーブルの二人のことだとかは綺麗に消えてしまっていた。

まだ初冬とはいえ、軒下のテーブル席は当然外気温そのままで、重ねたままの手から伝わる体温の方が頬より高かった。

ポットから離れていくローレンスの左手からもう一度顔に目を移

し、ゆっくりと瞬きした。

この手が好き。

こんな温もりを憶えてしまったら、もう離すことなんて出来ない…。

あたしは、きっと…もう。

自分でも何を伝えたいのか判らない。

ローレンスは、手を預けたままその視線を受け止めて柔らかく微笑んだ。そしてゆっくりと瞬きを返して、それで何かが伝わったように感じられる。

ホットサンドを頬張っていたスティングは硬直してサンドイッチを取り落としそうになり、サンドラが皿を差し出してそれを阻止した。

図書館でもそうだったけれど、この二人はお互いに片思いのまま何かを伝えようと、傍から見たら両思いの空間を構成しているらしい。

付き合っているから両思いとは限らないことは良く解っている。そして最初は多分興味半分でローレンスが申し込み、そして断る理由も無くスティールがそれを受けたことも。

もしもスティングが同じ時期にスティールに交際を申し込んだとしても、果たして今の二人のようになれたかというと…全く自信は無く、それ以前に申し込み自体を一蹴されている可能性の方が高い。

けれど、今目の前で繰り広げられている言葉のない遣り取りには愛情が溢れていて、ちょっとやそっとの心構えでは太刀打ちできそうにも無かった。

それでも気を取り直して、サンドラに礼を言って珈琲で口を湿らせてから再度食事を始める。

シフォンケーキを食べる合間に授業のことや課題のことなど、他愛ない話題を口にするサンドラに便乗して、スティングは隣の二人にも話しかけてみた。いつかのランチのようにそれなりに和やかな時間が過ぎて行き、ふと時計に目を遣ったスティールが「そろそろ行こう。」と席を立つ気配を見せる。
「何処行くか決めてんの？」
スティングの問いに、あっけらかんと少女は答える。
「うん、今日は映画観るために誘ったんだもん。」
「ふーん、じゃあ俺らも…。」
「付いてきてもどうせ席は別だよ？　カップルブース予約してあるし。」
「マジで！？　あれってホントに個室みたいなもんじゃんか！」
驚いているのか怒っているのか複雑な表情のスティングのジャンパーの裾をサンドラがくいくいと引っ張る。
「ね、ねぇ、スティング、じゃあさ、私たちも空いてたらカップルブースにしようよ。」
「うんうん、それがいいよサンディ！」
ぱあっと笑顔になりスティールが大きく頷いた。
これ以上は妨害のしようもないと諦めたのか、スティングはサンドラの意見に従うことにしたらしく、四人はそれぞれに腰を上げた。
手を繋ぎ直して腕全体に自分の腕を絡めるようにしながら、スティールは青年の右側を先導して歩く。

なんだか無性に嬉しくて仕方なくて、ちらりと見上げれば口元を綻ばせたローレンスが目を合わせてくれてそれでまた浮き足立ってしまう。
ずっと一緒にいられないのがとても寂しいと思う。
けど、また次に会う約束をしたり電話をしたり、それからどんな服を着ていこうかとかどんな話をしようかとかいろいろ考える時間

も楽しい。
シャールと会う前の日も、こんな風にわくわくするけど、シャールの目にもっと綺麗に可愛く映りたいとかそんなことは考えもしなかった。
そういう違いが…あたしが〈銀の界〉を選べない理由の一つなんだろうか。
もしもお父さんお母さんのことが心配要らなくて、ただシャールかローレンスか選べと言われたら、そうしたらやっぱりあたしはローレンスを選ぶんだろうか。
そんな選択肢はないほうがいい。
このままがいい。
だけど、そんなときが来たら…。

7

映画館の入り口でスティングとサンドラと別れて、二人ともコートを脱ぎながら指定されたブースに向かう。必要最低限に落とされた照明の下で、少し不安そうな表情に気付いたのか、しつらえられたソファに座るなりローレンスがスティールの腰を抱き寄せた。

まだシールドは下りていない。

それでも耳元に唇を寄せて低く囁く。

「僕はきみになにも捨ててほしくはないよ。今のままのきみを大事に想っているから…だから、比べて選んだりとか、そんな事はしなくていいから。」

歩きながら隣で百面相している少女に何か思う所があったのだろう、いつものように何でもないことのように口にする。

本当は、シャールより自分を、そしてスティングよりも自分を選んでくれていることが嬉しくて。けれどそれで相手との関係をゼロにして欲しいとかそんな事は望んでいないのだと。

大事なことは口にしなければ伝わらないと知っているからこそ。

「ローレンス、どうして…。」

唇を震わせて、スティールは青年を見上げた。

自分の欲しい言葉をそんなにタイミング良く与えてくれるのか。

ローレンスは帽子とサングラスを外してテーブルに置き、きちんと目を合わせる。

「僕は付き合いの長さではシャールにもスティングにも負けるけど、それなりに人生経験もあるしスティールがどんなことを考えているかとか何となく判るよ…。」

「何となくじゃなくて、多分いつも的確すぎるんだけど…っ。」

そんなにあたし顔に出ているかなぁと、情けない顔になるスティー

ル。
くすりと笑いながらローレンスは頷いて、こういうの以心伝心って言うんだよとご満悦だ。
むうう、と悔しがりながらも、やっぱりそういう風に気持ちが通じているのは純粋に嬉しい。

時間が来たのか、プライバシー硝子も兼ねたスクリーンがブースを覆っていく。照明は完全に落ちて、スクリーンやコンソールのスイッチ類が放つ僅かな明かりのみに包まれて、完全に二人だけの空間が出来上がる。
「ローレンス、あたしね…。」
ん？　と顔を覗き込む青年にひたと目を合わせて。
「冬の休暇始まったら、おうちに遊びに行ってもいいかなあ？」
切れ長の目を見張って、今日初めて驚きの表情になるローレンス。
「…それは、願っても無いことだけど、」
やや戸惑いながらも、こちらもその真意を測ろうと深く瞳を覗き込んで。
「僕の部屋に来るっていう意味、本当に解ってる？」
真剣な声で問うた。
スティールは開きかけた口を結んで、頬を染めて頷いた。
「あたし、男の人の部屋なんて、スティングくらいしかしらないけど…でも、ていうか…だからその…それは物の数に入らないから初めてだけど、その……二人でゆっくりしたいし、で、あの、」
しどろもどろに説明する唇を青年の唇で一瞬だけ塞がれて、そしてまた至近距離から囁かれる。
「この先に進んでもいい、て意味に受け取っちゃうけど。」
皮膚を掠める声に、体が震えた。
「まだ、先の話だし、やっぱり夜は駄目だけど…。」
やや婉曲的に、けれど否定はしないで答えると、強く抱擁されて息も出来なくなる。

いつの間にか映画が始まっていたけれど、二人にはただのＢＧＭになってしまっていた。
苦しそうな少女に気付いて腕を緩めてローレンスは謝罪し、それ以上は追及せずに座りなおしてスクリーンに目を向けた。
ほっとしながらも予想外に抱擁を解かれた事に一抹の寂しさを憶えて、スティールは自分からローレンスの腕に抱きつくようにしてその肩に頭を預けた。応じるようにローレンスも反対側の手をスティールの手に重ねた。

きっとお互いの気持ちは通じていると思った。

この手を、離したくないと思っていた。

7（後書き）

ストーリーは一応ここで終わりです。
変な終わり方でごめんなさい。しばらくこんな日常が続きます。
次回にこの二人の初エッチ話をＵＰしてから、水花執筆のお話を連載します。
若干文体などが変わりますが、「きみのためにできること」を二人で書いていたので、続編のシリーズは以前のようにリレー形式にはしないで話ごとに別々に書き進めました。そうしたら文章が全然違ってしまったという・・・（元々書き方が違う二人がそれぞれに合わせて書いていたので）
水花は、このシリーズの最もシリアスで大変なところを書いてくれています。引き続き読んで頂けると嬉しいです（＝´∇｀＝）

深夜ラジオで生リク！（前書き）

以前投稿していた「優しさにつつまれて」はＲ１８指定をつけて再投稿しました。こちらには別のＳＳを差し替えることにします。ご指摘ありがとうございました（私自身も予てより悩んでおりましたので踏ん切りが付きました）。

深夜ラジオで生リク！

はい、今日も始まりました！　リスナーのお楽しみ「有名人に生リク！」のコーナーです。
なんと今晩のゲストはあのＳＳＣのローレンス・シュバルツ氏ですよ～っ！
いつもの十倍くらいのリクエストメールが届いておりますが、その中から深夜放送でしか訊けないようなネタを発掘してみましたので、皆さん息を潜めて聴いていてくださいね～っ！
「息を潜めてって…。」（ローレンス朗らかに笑い中）
えーと、耳の穴をかっぽじっての方がよかったですかね？
（ローレンス爆笑中）
「い、一体僕はどんな質問をされるんですかっ」
テレビとはまた違ったイメージですが、ローレンスさんはオフのときはそんな感じなんですか？　実は笑い上戸？
「そうですねぇ、ツボにはまるとかなり笑いますね。」
今日のお召し物も素敵ですが、映像がないときくらいシャツとスラックスでなくても良さそうですが…実はこれもオフ仕様ですか？
「あー、そうです。もうこれは幼少時からのくせみたいなもので。基本的にボタンがあるものしか持っていないです。慣れてしまえばどうってことないですけど、たまにはＴシャツとか着てみたいときもありますね。」
うわー。明日になったらＴシャツが山のように届くと思いますよ！
「あはは、それじゃあお一人様一点に厳選してお願いします。お礼カード出しますよ。」
ホントですか！　皆さん、ローレンスさんのカードです！　お宝ですね～っ！　僕も贈りますからよろしくお願いします。
「光栄です。」（笑）

さぁそれではそろそろ質問の方に移りたいと思います。まず一通目…これこそ深夜枠の特権ですよ。イーストエンドの三十代女性からの質問。
『ローレンスさんはどんな手順で相手に気付かれない手際の良さで服を脱がせているんですか？　是非教えてください。』
だそうですがっ。さあ、実際どうなんですか！？　僕も知りたいです、てゆーかご教授ください！！
（ローレンス爆笑中）
「うわー。どっからそんなネタ仕入れてくるんですかっ？」
そりゃあもう数々の女性遍歴のある方なので、記憶が定かではないと思われますが…その辺りからではないかと。
「はあぁ。」
そういえば最近は浮いた噂がないですね？　あれですか、やはり以前昼のワイドショーで突撃されてた本命女性の件、ほんとうなんですねぇ。
「そうですね、今は彼女一筋ですね。なかなか振り向いてもらえないというか、手が届いたようでかわされているような。自分からアタックするとなると難しいですね。」
いやいや…ここまで愛されている相手の方、本当に羨ましいです。リスナーからしたら、早くくっつけばいいのにっていうのと、そんなの許せない、ていうのと二律相反する気持ちがありますかねぇ。
「そうですね、それがあるから、うまくいったとしても結婚するまでは公表するつもりはないですよ。」
本気ですね！　もうそこまで気持ちは固まってますか。
「まぁ僕もそれなりの年齢ですし、いずれはと。まだ先は長そうですが。」
ほほぅ～。これは本当に結婚会見が楽しみです。
「会見はしないかもしれませんよ？　両親もしていませんし。」
えぇーっそんな殺生な～っ！！
「ははは、僕はいいけど彼女が気の毒じゃないですか。さ、じゃあ

質問の答えですが…」
ああ、そうですね、脱がせる手順ですねっ。楽しみですねっ。
「手順というよりまずは手と口でちゃんと愛撫できるようにならないと駄目ですよ。脱がせる手は片方だけなので、それ以外を駆使して相手の意識をそちらに集中させてください。」
キスしたり撫でたりとかいうことですね？
「そうです。つまり最低限キスは上手でないと。後は片手でボタンやホックを外せればいいんで。」
ボタンに意識がいくとキスが疎かになるんですよね～。
「多分そういう人が多いですね。まぁ、相手に自分で脱いでもらったり、半分着たままっていうのもプレイとしてはアリですけど。やっぱり最初はリードしたいですよね。」（笑）
初めてするときですねっ！　それは確かに…っ。
「それで外せる止め具は外しておいて、愛撫の一環として撫でながら体の曲線に沿って下に落とせばいいです、服。落ちます、簡単です。」
か、簡単ですか…早速今度試してみます。
あ！　ボタンとかのない服の場合はどうしたらいいんですか？
「その場合はちょっとボタンのある服より脱がしにくいけど、下から手を入れて…ですね。あ、こんな感じで。」
ぼ、僕ですか！
今Tシャツの裾から片手が～。
「愛撫はしませんよ。」（笑）
も、勿論です。その気になりそうだから勘弁してください。
「で、さっき言った通りいろいろしながら…入れたほうの手も脇腹とか愛撫しながら肩から袖に手を入れるわけです。で、二人分袖に腕が通る感じでそのまま手先までいって、手の平を触りながら下に引いたら…。」
あ、なんだか簡単に片袖脱がされてしまいました。これ、あんまり脱がされているって感じがしませんね。

「でしょう。その調子でもう片腕抜いてもいいし、頭を先に脱がせて片袖は落としてもいいです。」
頭は難しそうですね～。
「難しくはないけど、流石に全く気付かれずには無理です。」（笑）
「ええと、首筋とか口でいろいろしながら、手を耳とか辿らせて…こんな感じで頭をぐるっと撫でます。」
あ！　脱げた！　はやっ！！
「自分の腕を滑らせるように相手の服を外すのがポイントです。」
はー、それで反対側の肩から腕を撫でるとシャツが落ちると。
いやはや、体験すると凄く簡単そうなんですが。
「簡単ですよ～。要するに相手の肌とこちらの肌を合わせて、相手の肌に生地が当たらないように動かしたら『脱ぐ』という行為が誤魔化される訳ですから。」
多分今皆さん必死でメモを取っていますね、きっと。
僕も家で練習しますよ～。男のロマンですよね。

え？　もう時間がない？　次のコーナーに行けって？！
ああ、時間とはなんと無情なものでしょう。
質問一つしか消化出来ませんでしたが、充実した時間でしたね！
それでは、ローレンスさんとはこれでお別れです。ありがとうございました！
「僕も楽しめました。ありがとうございました。」
今日のゲスト、ＳＳＣのローレンス・シュバルツ氏でした。

深夜ラジオで生リク！（後書き）

この〈Ｗｏｒｌｄ〉シリーズはＲ指定のものとそうでないものとあります。指定つきのものはシリーズ管理が出来なくて判りづらいのですが、あらすじに明記しておりますので是非他の作品もご覧頂ければと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8012s/

Answer

2011年7月11日10時37分発行